
ぱらのいあな日記（美奈子ちゃんの憂鬱短編集）

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱらのいあな日記（美奈子ちゃんの憂鬱短編集）

【Nコード】

N2204D

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

「美奈子ちゃんの憂鬱」短編集。「月夜茶会」掲載分バックアップとしての掲載です。

悠菜ちゃんの災難 2年4月頃

宝条君は、水瀬悠理を愛しています。——性的な意味で。

宝条君が、水瀬悠理に熱い眼差しをむけています——性的な意味で。

そんな宝条君が気づかないこと。

それは、水瀬悠理だと思っていた相手は、水瀬悠菜ちゃんだったことでした。

「あっ」

その熱い眼差しを感じた悠菜は、突然、廊下の角に隠れた。

「どうしたの？」

一緒に歩いていた未亜が不思議そうな顔をする。

「何か、アブないものでもいた？」

「宝条君が」

「ああ——ホントだ。“俺のハートはマイクロ波出しまくってるぜ！”みたいな暑苦しい視線がヒシヒシと」

「家に置いておけば、電子レンジ代わりになるでしょうけど、会いたくないです」

「経験がモノいうよねえ……ねえ、いっそ、お尻貸してあげればあ？」

「お尻は痛いんですよ？」

「や……やったこと、あるの？」

「な、内緒です」

頬を赤くしてそっぽを向いた悠菜が再び未亜を見た。

そこにいたのは、未亜ではなかった。

「やあ。悠理」

ムダにさわやかさを前面に押し立てまくる宝条の挨拶。

それに、悠菜は引きつった顔で頷いた。

「こ……こんにちわ」

「こんなさわやかな天気だ」

「思いつきり曇ってますけど」

「心では、晴天さ」

「午後の降水確率は100%って」

「ふふっ。それはうれし涙だよ？ どうだい？ 2年生になった感想は？」

そっ。

腰に回された手。

それだけで、悠菜は産毛まで逆立つほどの嫌悪感に襲われた。

「べっ、別に……私、友達と回っているところだから」

「何!？」

宝条の顔色が変わった。

「友達に輪姦まわされている!？」

「回ってるんですっ! な、なんてセリフを大声で! それでもアイドルですか!？」

「僕はもう、君だけのアイドルでいいんだ!」
宝条は力説した。

「僕はもう、君しか見えていないんだ！」

「お、お気持ちは嬉しいんですが……」

悠菜は何とか、腰に回された手から逃げようともがく。

「ほら。同性愛は御法度っていうか」

「何を言うんだい？」

ぎゅっ。

宝条は、悠菜の腰に回した手に力を込めながら言った。

「陰間に代表されるように、この国では、男色は美談と共に語られているじゃないか！僕は、悠理と結ばれるためになら、いくらでもカミングアウトしてやるさ！」

「陰間……さすがに最近、時代劇出演が多いですもんね」

「ふふっ。褒めてくれてありがとう」

「でも、現実の世界でこういうことするのって、芸能人の適性に欠けるレベルを遥か彼方に置き去りにして、もはや人間として失格のような気がします」

「ふふっ。僕はね」

グイッ。

突然、宝条は、悠菜を抱きかかえた。

「君の前なら獣になる！若いケダモノ！英語で言えばヤングなアニマルに！」

「そこまで開き直らないでくださいっ！っていうか、誰か助けてえええっ！」

「……」

「……」

「……えーっ」と

呆然として走り去る宝条を見送った未亜は、同じようにリアクションに困る生徒達と顔を見合わせながら言った。

「私——どうしたらいいのかなあ」

宝条が飛び込んだのは、体育用具室の奥。

鉄のドアがある特別器具室だ。

普段は、イベント用の高額な照明や通信機器が保存されているのだが、

「な、何ですか！？ここはっ！？」

悠菜が驚いたのも無理はない。

いつの間にか、器具室にはその手のホテルで使われるベッドが用意されていたのだ。

「この前、余計な邪魔が入った経験を、僕はムダにしていない。対策は万全さ」

宝条は胸を張って答えた。

「ふふっ。見直したかい？惚れ直したかい？」

「……」

あきれ顔の悠菜が答えた。

「控えめに言って変態。素直に言えばチョー変態としか思えません」

「いやあ。そんなに褒めてくれて嬉しいよ♪」

「褒めてませんっ！——きゃっ！？」

ベッドの上に投げ出された悠菜は、慌てて逃げだそうとしたが、そのままベッドに押し倒された。

「や、やだっ！」

「ふふっ。痛いのは最初だけ。すぐに、僕専用の快樂の住人に」

「わ、私、Mのシュミは！」

「すぐに気持ちよくさせてあげるさ！——僕は君を手に入れるという大志だけで生きているんだ！」

宝条は、体を起こすと叫んだ。

「見れっ！この僕の大志を！」

「……た、確かに」

悠菜はマジマジと目の前に現れた黒鉄の城（笑）を見つめながら言った。

「こ、股間が壮志を抱いていらっしやる」

「褒めてくれてありがとう」

「――じゃなくて！やってることがモロ変態だって、わかんないんですか！？」

「欲しいモノを手に入れるためには、手段は選ばない。人はそういうものだろう？」

一瞬、椅子の顔を思い浮かべた悠菜は、ちょっとだけ躊躇して、視線を彷徨わせた。

「解ってしまったら人として御仕舞いなのに、イヤになるほど解ってしまいます……」

「そうだろう？」

「だからあ！私は手に入れるのは好きですけど、手に入れられるのはキライなんですっ！」

「挿入れるのが好きだったのかい？」

宝条は、困惑した顔を悠菜に向けた。

「僕は受け身はちょっと」

「じ、じゃあ、そういうことで！」

宝条の言葉の意味を理解できず、とにかく逃げるチャンスだとだけ思った悠菜だったが、

「受け身の快楽を教えるのが、男の義務だよね？」

宝条から逃れることは出来ない。

「る、ルシフェっ！」

「彼女は来ないさ」

「ひゃんっ！」

耳に舌を這わされた悠菜が思わず声を上げ、羞恥心に顔を赤くす

る。

「かわいい声だね。ルシフェルに最高級緑茶と茶道具一式を渡したら、もう何してもいい。そう言われている」

「ひ、ヒドイっ!」

「ふふっ。もう、素直になろうね?——おおっ!」
「?」

宝条の感嘆の声。

その視線がどこに注がれているか知った悠菜は泣きながら暴れるしかなかった。

「や、やだあっ!」

「カワイイよ? うん。プリントが一番イメージに近いけど、こういうストライプもいい!」

「み、見ないで!」

「しましま。ストライプ。ゼブラマンもびっくりだ♪」

「ワケわかんないこと言わないで!」

「それにしても……」

宝条の手がゼブラマンもびっくりの布地越しに“悠菜”に触れた。

「悠理……君、まさか」

「——それで?」

あきれ顔のルシフェルに、かなめが答えた。

「まあ……強姦といえば強姦だが」

かなめも煮え切らない。

「オトコ同士とはいえ、とりあえず、アレ以上はさすがに作品としてもマズいから止めたが」

「悠菜ちゃんも災難ですね」

「ペドな上にホモ、宝条も重傷だ」

「未然に防げたんですか?」

「私が突入した時には、宝条が突入をかけた直後だったらしい。水瀬に言わせると、“何か入ってきた！痛かった！何か熱いのが出た！”とか何とか」

「……ま、マズくないですか？」

「泣きながらトイレに駆け込んでいった。宝条は即座に叩きのめして生徒指導室送りだ。もうそろそろ目を覚ますだろうから、たっぷり説教してやる」

「はぁ……」

「それにしても」

かなめは笑って言った。

「水瀬にとってもいいクスリだ。カマ掘られたら少しは大人しく——」

「あの？福井少佐？」

「ん？」

「今、水瀬君が女の子になってるって、知ってますよね？」

「何だ？」

「ですから——」

翌日、宝条は前日に自分が何をしたのかまるで思い出せないことに首を傾げながら、廊下の角を曲がろうとして、そして、最愛の相手を見つけた。

宝条君は、水瀬悠理を愛しています。——性的な意味で。

宝条君が、水瀬悠理に熱い眼差しをむけています——性的な意味で。

…
以下、悠葉がいる限りエンドレスに続く。

紅葉、来襲！ 2年6月頃

授業のため、職員室を出ようとしたかなめを、南雲が呼び止めた。

「福井先生、水瀬から電話です」

「水瀬から？」

首を傾げながら、かなめは南雲から受話器を受け取った。

「もしもし？——ああ。水瀬か？……何？ルシフェルと一緒に休みたい？仕事か？」

二言三言会話をしたかなめが、突然、受話器に怒鳴った。

「グタグタ抜かしてないで、とっとと来いっ！」

ガンッ！

受話器を叩き付けられた電話が机の上で碎け散った。

「せ、先生！？」

職員全員が驚きの視線を向ける中、ポニーテールを角の如く逆立てたかなめが南雲に怒鳴った。

「南雲っ！」

「は、はいっ！」

「あの二人、登校してきたら生徒指導室に押し込んでおけっ！」

「はっ？」

「五月病で休みたいなんてぬかすバカの性根、たたき直してやるっ！」

「——大体」

昼休みになってようやく教室に戻れた水瀬達を前に、あきれ顔の美奈子が言った。

「何だって、五月病で休みたいなんて言い出したの？」

「だって……」

「私達の身になれば、わかるよ」

「水瀬君はともかく、ルシフェルさんまで？」

真面目で通るルシフェルが仮病を使っても休みたがる理由。それが、美奈子にはわからない。

「何があったの？ 私には話せないこと？」

「……一昨日」

水瀬が言った。

「一昨日、三年生に転入生が入ったの、知ってる？」

「ああ。未亜が何か言っていたような」

「その人が原因」

「……近衛の関係者？」

水瀬達は、無言で頷いた。

「ってことは、そんなに厄介な人なの？」

「近衛であれ以上に厄介な人って、いない」

「ルシフェルさんがそこまで言うとは」

美奈子は、驚いた視線を水瀬に向けた。

「水瀬君以上ってことだね？ どんな人？」

「ぷうっ！ 桜井さん、失礼だよ！」

「だけど——」

「おい、水瀬、ナナリ」

入り口にいた男子生徒が声をかけてきた。

「お客だぜ？ 三年の」

ガタッ！

美奈子の前で、水瀬達があからさまな狼狽を見せた。

「ぼ、僕達、いないって言って！」

「いるじゃないっ！」

水瀬の声より一段階高い声が教室に響き、教室に女子生徒が入ってきた。

リボン は三年生。

ただ、外見はかなりあどけなく、外見上は水瀬と同年といっても過言ではない。

つまり、幼い。

「何よ！さっさと来いってメールしたのに無視して！」

「で、電池が切れてまして……」

「わ、私……ちょっと急用が」

「――二人とも」

女子生徒は、平べったい胸元を人差し指で突いた。

「わかってるね？」

「……」

「……」

水瀬とルシフェルは、青い顔をして席を立った。

「あ、四方堂先輩」

心配になって水瀬達を探しに出た美奈子は、三年の廊下で生徒会長の四方堂緑とすれ違った。

ロングヘアをリボンで束ねた知的な眼鏡っ娘。

騎士養成コース在学中だが、本人の騎士ランクはかなり低い。

「あら？桜井さん」

両手で書類を抱きかかえ、ほくほく顔の緑に、美奈子は訊ねた。

「あの……水瀬君達見ませんでした？」

「えっ？知らないけど」

美奈子は、先程訊ねてきた三年生の女子生徒のことを緑に告げた。

「ああ。紅葉ちゃんのことね？」

「紅葉？」

「ええ。津島紅葉。数日前に転入してきた子。水瀬君とも知り合いだったのね」

「……知り合いというより、水瀬君達を従わせていたようにも」

「ふうん？」

「水瀬君達の態度からして、嫌々連れて行かれているって感じなんですけど」

「そう？」

「……あの？」

美奈子は緑の態度が不思議で、思わず訊ねた。

「普段の四方堂先輩なら、少しは心配してくれると思ったんですけど」

「別に？紅葉ちゃんだから」

「先輩」

「はい？」

「何か、積まれたんですか？」

「えっ？ははっ。紅葉ちゃん、メサイアについて滅茶苦茶詳しくて、非売品の写真とか、いろいろもらっちゃったのよ」

「それで黙っていてくれと？」

「うん♪生徒会は、紅葉ちゃんについては、一切関与しませんって念書あげたもん♪」

メサイアの前には人権も規律もへったくれもない。

常日頃からそう豪語するメサイアオタク。

それが、目の前にいる四方堂緑という人物だ。

「……で、津島先輩、今、どこに？」

結局、美奈子が水瀬達と再開できたのは、保健室だった。

「まったく、情けないわねえ」

保健室のベッドの上で唸る二人を前に、懽然とした表情を浮かべるのは、紅葉だ。

「何よ。あの程度で動けなくなるなんて、それでも魔法騎士？」

「そ……そうはいいますけど」

水瀬達は痛む体で紅葉に文句を言った。

「光速で飛んでくる飛翔物体をあんな風に……」

「大体、あれ、何の役に立つんです？」

そんな二人に、紅葉は情けがなかった。

「え？——えっと」

しばらく考えた後、紅葉は笑いながら言ったのだ。

「忘れちゃった♪」

「……」

「……」

「ま、やってれば思い出すから♪さ、二人とも、クスリが必要なら紅葉がどこから取り出したのは、一抱えもあるような極太の注射器。」

「この——よっと、“逝き帰りX”を打てば、致死率99%の確率で確実に」

「死ぬ、死んじゃいますっ！」

「大丈夫よ——理論上は」

「それ、人間相手の理論なんですか！？ね、どうなんです！？」

「え？自信ないなあ……えっとお……何相手に研究したんだだけっけ？」

「僕達にも人権が！」

「うるさいっ！中佐の命令に少佐が逆らうなっ！」

——結局、二人が何の実験をやっていたのか？
その答えは、ついにあかされることはなかった。
理由？

答え…紅葉が忘れ去ったまま、他の研究に没頭するようになったから。

合掌。

日菜子 夏の一コマより 水瀬2年8月頃

「体を動かしなさい！」

日菜子の前でそう怒鳴ったのは、姉の麗菜だ。

「何ですか！公務がないとはいえ、そんなにダラけて！」

「ですけど……」

カウチソファーに寝そべってポツキーをかじっていた日菜子は、バツが悪そうに姉に言った。

「せっかくのお休みですし、帰省中の春菜だってどうせ」

「春菜なら、宮城の植物を調べるって、朝から歩き回っています！」

「うっ」

「あなたも少しは運動なさいっ！」

「……はい」

部屋を出ていく姉に、見えないように舌を出しながら、日菜子は思う。

「運動不足だとは、思いますよ？」

日菜子はソファーにひっくり返ると、天井を見つめた。

「でも、折角のお休みなんですから、好きなこととしていたって……」
ごろりと寝返りをうつと、テーブルにあった雑誌の記事に目が行く。

「……水泳？」

「……はい？」

突然呼び出された水瀬は、またしてもお忍びの手助けとして、日

菜子の宮城脱出（麗菜に言わせると逃亡）を手伝わされた。

場所は、都内の有名スポーツ用品店。

「ですから、水泳です」

日菜子は、水瀬を水着売り場まで連れてくると、今回のお忍びのワケを話した。

「せっかくの夏ですから、水泳でもやろうかと」

「それは……いいことなんですけど」

水瀬は、首を傾げた。

「宮城にも、水泳施設はありますよ？」

「あそこは、利用したくありません」

「何ですか？」

「……春菜がいるからです」

「春菜殿下がいらっしゃると、何か不都合でも？」

「いろいろあるんです」

「はぁ……？」

水瀬は、水着を選ぶ日菜子の後ろ姿を見ながら、日菜子が宮城の水泳施設を使いたがらない理由に、大凡の察しをつけていた。

——そりゃそうだろう。

水瀬だってそう思う理由は一つだ。

春菜殿下のナイスバディと一緒にでは、女の子として、姉として、それは傷つくだろう。

そういう、ことだ。

「で——どこで泳ぐんです？」

「どこか、いいところはありませんか？」

「うーん」

水瀬は首を傾げながら答えた。

「僕も……プールとかって、ほとんど行ったことが」

「水瀬は、泳げないんですか？」

「いえ？」

水瀬は答えた。

「子供の頃、日本海でシャケやブリとってました」

「……」

「あ、クロールとか、背泳ぎとかは、大学のプールで清掃員のアルバイトして覚えました。結構、自信はあるんですよ？」

「そ、そうですか——水瀬」

「はい？」

「試着します」

「あ、はい……ちょっと待ってください？」

水瀬は、試着室の中をいろいろ調べた後で、日菜子に言った。

「どうぞ」

その日の夕方——宮中、夕餉の席。

「一体、どうしたの？ 日菜子」

麗菜が驚いたほど、日菜子は顔を真っ赤にして怒っていた。

「水瀬と、何かあったの？」

「……水瀬が、あんなヒドい人だと思いませんでした」
「？」

「今日、水着を買いに外に出ました」

「またそういうことを！」

「試着しました——水瀬にも見てもらいました」

「——へえ？ 日菜子、度胸あるわね」

「いろいろ試したんですが、全部、どれを着ても、“いいんじゃないですか？” としか言ってくれないんです！」

「へえ？」

「競泳やセパレート、ビキニ……全部、何着ても“いいんじゃないですか？”ですよ！？ スク水にマイクロビキニまで手出したのに！」

「あんた、それやりすぎ」

「水瀬……呆れてたんじゃないですか？」

春菜がおずおずとした口調で言った。

「姉様、ヘンな所で意地になるから」

「そ、そんなこと、ありません」

「で？ 結局どうしたの？」

「い、一応、買ってきました。水色のワンピース……水瀬にどれが良いか選べっていったら、これがいいっていうから」

そう言う日菜子の頬が赤くなった。

「水瀬も大変だ」

「ですねえ」

しみじみという身内の心情が、日菜子にはわからない。

「——どういう意味です？」

「言葉通りのことよ——それより」

「はい？」

「このお腹、よくオトコの前にさらせたわね」

プニッ。

プニプニ。

（→効果音をつけると、こんな感じだろうか）

「……」

「うっわー。姉様スゴ」

「……っ！」

「こりゃ、水瀬とデートより、ダイエットの方が先ね」

プニプニ。

「タマの方がスレンダーよ。これ」

「姉様……太りすぎ」

「確実に」

「……グスッ」

「泣いて済む問題じゃないでしょう？こんな自業自得よ。あーあ。ただでさえ幼児体型なのに、さらにプニッだなんて——水瀬に嫌われるわよ？」

「それに、姉様、泳げましたっけ？」

「ダメダメ。日菜子は浮き輪なしじゃ泳げないんだから。ね？カナツチさん？」

「……わ、私っ！」

日菜子は立ち上がって怒鳴った。

「ダイエットします！夏の終わりまでにウエスト引き締めますっ！」

「——その前に、その生活習慣改めなさい」

「それも含めて！」

「じゃ、姉様？」

春菜が日菜子の腕をとった。

「明日から、私がみっちり、水泳のコーチしてあげますね？」

「……えっ？」

「張り切って頑張りましたよ！」

翌日。

「？忙しいのかなあ」

突然、デートをキャンセルされた水瀬が首を傾げたのと同じ頃、宮城の水泳施設では、

「さあ、バタ足からです！」

妹の腕につかまりながら、必死に水泳の特訓に励む日菜子の姿があった。

妹のビキニからこぼれるはち切れんばかりの胸元を目指してバタ足に励む日菜子は思った。

——まるで、人参をぶら下げられた馬みたいです。

「頑張ってくださいっ！」

動くたびに、プルプルと震える胸。

それは、日菜子が望んでやまない、この世で水瀬に次いで欲しい存在。

「水泳は、おっぱいの発育にもいいんですよ？」

4歳から水泳を続ける春菜の言葉に、日菜子は奮い立った。

夏一杯、日菜子は水泳にうちこみ、25メートルを泳げるまでになったのだが——。

どよん。

夏の終わり。

日菜子は鏡の前で落ち込んでいた。

「あら？どうしたの？」

「……ひっく」

日菜子はボロボロ泣きながら、姉にすがりついた。

「あ……あ……」

「へ？」

麗菜は、日菜子が手にしているのが、メジャーであることに気づき、そして、理解した。

「あーあ」

麗菜は、思わず天井を仰ぎ見た。

「ウエストじゃなくて……そっちがまず減っちゃったかあ」
ただでさえ真っ平らなのに。

麗菜は、そう言いかけて、何とか口を押さえることに成功した。

「——ダイエットの最悪の法則って知ってる？」

日菜子は泣きながら首を横に振った。

「決して、減っちゃいけない部分から減るの——わかるでしょう？」

日菜子が、バストアップ運動だけは熱心にやるようになったのは、これからのことである。

合掌。

特売は主婦の戦場です。男はそんな光景、見たくありませんけど。

食事当番。

水瀬家において、それは買い出し当番を兼ねる重要な仕事。

大抵は水瀬の仕事なのだが――。

●秋篠博雅の日記より

「特売？」

放課後、ルシフェルに買い出しにつき合ってくれと頼まれ、商店街の中を歩いていた。

「そう」

ルシフェルの手には新聞の折り込みチラシが握られている。

葉月商店街の端にあるスーパー・ジャイアンで特売セールがあるというのだ。

「水瀬君、かなり上手く仕入れてくるんだけど、今日は私が買いだし当番だから」

「それで特売か」

成る程。

横を歩くルシフェルの端正な顔立ちを横目で見つめながら、俺は思った。

きっと、ルシフェルはいい奥さんになるだろう、と。

当然、その横にいるのは自分だ。

うん。

やっぱり、当然だな。

「とりあえず」

ルシフェルはチラシを見直した。

いくつかの賞品の写真に赤丸がつけられている。

「モヤシ一袋10円、豆腐一丁30円……何よりサンマ一匹10円！」

ぐっ！

震える拳を握りしめ、感極まった様子のルシフェルは、完全に浮き足立っている。

何がそんなに嬉しいのかよくわからないが、ルシフェルが嬉しいなら、（未来の）夫として、大目に見てやろう。

俺はその時、本当にそうとしか考えていなかったのだ。

「っ!？」

俺は、そのスーパーに入った途端、息を飲んだ。

な、何だ!？

この殺気は！

俺はすぐに殺気の元を探した。

そして、すぐにわかった。

特売コーナーにたむろする、よく言っでご婦人方……悪く言っておばちゃん達だ。

主婦歴ん十年のベテランというか、強者、猛者、そんな言葉でしか表現できないようなバケ……いや、さすがにこれは失礼か……一筋縄ではないかないタイプだ。

近づくだけで気が遠くなる防虫剤と化粧と香水と加齢臭のミックスしたえも言われぬ臭気。熱帯の昆虫だがは虫類でさえここまでやらない程の無駄に派手な色合いのファッション。人類というより餅類と呼びたくなる動く度に揺れるゼイ肉。何より、この神をも恐れぬ不遜な態度。

……か、完璧なおばちゃん達だ。

俺は、すぐにルシフェルをこの場から連れ出したかった。

ルシフェルがこんなおばちゃん達の側にいれば、それだけで――

」。

……。

……。

いかん、今、人生に絶望しかけた。

時間が経つにつれて、場の空気は緊迫する。

肌を針で刺す。

その言葉がしっくりくる程だ。

ルシフェルとつき合いだして、いろんな場面に遭遇したけど、この緊迫度はそんなものじゃない。

俺は、自分がひるんでいることを嫌でも思い知らされた。

ここはもう、戦場そのものと見るべきなんだ。

そうでなければ、この緊迫感は説明が出来ない。

「る、ルシフェル」

俺はルシフェルに言った。

「ここは、諦めて帰った方が」

「何？」

「だから」

「近衛左翼大隊筆頭の私が、一般人の主婦に負けた——そう認めろというの？」

な、何で、ここに肩書きが出てくるのか、それがわからない。

でも、ルシフェルがこの空気に感化されているのだけは確かだ。

こりゃマズい。

「ほら、嬢ちゃん達、邪魔だよ」

ドンッ。

俺とルシフェル達を突き飛ばしてやって来たのは——ひとりの……ひとりの……ううっ。思い出ただけで吐き気がする。

ご婦人……言葉ではうそがつけるなあ……おばちゃんだ。

アフロみたいな髪型。化粧品じゃなくて天ぷら粉でもつけたような肌。ペンキと見まごうばかりの口紅をつけ、着色料が心配な辛子明太子同然の唇。体型から連想する職業は？と聞かれれば関取以外にないという恐るべきおばちゃんだった。

「カップルで来るところじゃないよ。帰んな」

だみ声でそう言ったおばちゃんが向かうのは、特売コーナー。

丁度、そこには特売品を乗せたワゴンがあった。

メガホンを持った店員が特売を告げる叫びをあげ――

戦いが始まった。

翌日。

「ルシフェルさんが負けた!？」

信楽の驚きの声の前で、悔しそうに唇を噛みしめるルシフェルが肩を振るわせている。

「っていうか……」

桜井は言った。

「そういうもんだよ。年期が違うんだから」

「でも」

「大体、そんなところでルシフェルさんほどの美人が目の色変えておばさん達に混じっているって、はつきり言ってへん」

桜井の言うとおриだと思うが……。

「で、でもね？」

ルシフェルは言う。

「例え、どんな場面であっても、他人に負けるっていうのが、どうしても納得できなくて」

結局、ルシフェルはこの日のスーパー・ジャイアンの特売コーナーに向かった。

結果は惨敗。

幾多の戦場を駆けめぐってきたルシフェルが、おばちゃん達にはじき飛ばされ、ある時はつまみ出され、散々な目にあったのだ。

信じがたい光景を、俺は呆然として見守るしかなかったのだが――。

狙った特売品は何一つ手に出来ず、ルシフェルは肩を落としてスーパーを出た。

それからすぐ、先日出会ったおばちゃんが特売品の詰まった買い物袋を両手に提げて出てきた。

おばちゃんは、俺達のことを覚えていたらしい。

「だから言っただろう？ カップルの来る所じゃないって」

悔しさのあまり涙まで浮かべるルシフェルをなだめすかして家まで送り届けたその帰り道のことだ。

「あれ？ あんた」

住宅街で声をかけられた。

振り返ると、ある建て売り住宅の玄関先に、あのおばちゃんがいるた。

「あのカワイイ子の彼氏じゃないかい」

「あ、先程は」

俺は一応、頭を下げておいた。

「へえ？ 若いのに礼儀正しいじゃないか」

どうやら、俺はおばちゃんに気に入られたらしい。

まだ夕食まで時間がある。そんな理由で、玄関先で立ち話だ。

「でもねえ」

おばちゃんは、うつとりした声で言った。

「ああやって、みんな一人前の主婦になるんだよ」

「は？」

俺はその意味がわからなかった。

主婦って、みんなあんなことするのか？

「そうさ。オトコにはわかんないけどね。家族のため、ああやって

戦場に出るのさ」

成る程。

俺はその一言で納得した。

戦場。

ルシフェルが本気になった理由。

それは、特売品なんかじゃない。

あの特売コーナー独特の空気。

それを、戦場の空気だと読んだからだ。

戦場に出た以上、誰にも負けたくない。

いわばプライドそのものなのだ。

しかし――

「ふふっ。私もね？ 主婦に成り立ての頃は、あの子みたいに、特売品に近づくことさえ出来ず、そりゃもう、悔しい思いをしたもんさ」

「はあ……」

「特にあんだけカワイイ子だ。私の半年前位の頃そっくりだもんねえ。そりゃ、シンパシーも湧いてくるってもんさ」

は……半年前？

「写真、見るかい？」

玄関の中に姿を消したおばちゃんが手にしていたのは、一枚の写真。

生後間もない赤ん坊とダンナらしい男。そして、二十歳そこそこの見目麗しい女性がそこにはいた。

赤ん坊を抱きしめ、初々しいまでの、はにかみを浮かべた小柄な女性は、俺の目から見ても、かなりの美女といえた。

「こ……これが、あなた、ですか？」

何かの間違いだ。

この美女と、このおばちゃんが同一人物！？

絶対、嘘だ！

「そうさ」

おばちゃんは嬉しそうに頷いた。

「まあね？あの子も連日、特売コーナーという戦場で磨かれれば、私みたいな一人前になれるさ。ウマイもん毎日食えるよ？」

「……」

俺はその日、どうやって家に帰ったか覚えていない。

さらに翌日。

●桜井美奈子の日記より

放課後、ルシフェルさんがしきりに首を傾げていた。何でも、秋篠君に言われたそうだ。

「今度、特売コーナーに行ったら別れる」

秋篠君、よっぽど恥ずかしい思いでもしたんじゃないかな。

私も、ルシフェルさんが特売コーナーから足を洗うように説得してくれて秋篠君に頼まれたし。

「私が……連日負けたから、呆れられたかな」

「いや絶対違うから」

「そう?」

「大体、秋篠家って名門でしょ? その跡取りの嫁が、特売コーナーで目の色変えてるなんて、困るんじゃない? 世間体とかいろいろと」

「……そっか」

ルシフェルさん、私の嘘をマトモに信じてるし。

うん。

本当に素直な子だと思う。

夜。

なんだかんだでルシフェルさんの手料理を御馳走になる。

うん。

やっぱり美味しい。

葉子も連れてくれば良かったけど、食卓が私とルシフェルさんだけなのは気になった。

「水瀬君は?」

「今日、買い出し当番」

「ただいま」

玄関で水瀬君の声がした。

時間はもう8時すぎ。

食後のコーヒーで話し込み過ぎたかな。

「お帰りなさい」

「水瀬君、御邪魔してるね?」

「あ、桜井さん。ルシフェルの相手してくれてたんだ。ありがとう

——はい。ルシフェ」

水瀬君が手にしていた買い物袋をルシフェルさんに手渡した。

「安くなってたから、お肉たくさん買ってきた」

見ると、スーパー・ジャイアンの買い物袋。

その中には、半額のシールのついたお肉がたくさん。

「ど……どういう、こと？」

ルシフェルさんが悔しそうに肩を振るわせる。

「へ？」

「何で、水瀬君はあの特売を」

ルシフェルさんが特売で負け続けたことを聞いた水瀬君は、

「そんなの、ルシフェルが勝てるわけないよ」

そう、平然と言った。

「あそこはおばちゃん達の世界だもん」

「で、でも」

「あのね？」

水瀬君は諭すように言った。

「僕達は僕達なりに戦うの。だから、僕が行くのは、閉店間際」

「――えっ？」

「売れ残ったのを安く買うの。特売は主婦の戦場だけど、戦後の処理だってかなり安いんだから。そこを狙うのも戦いだよ？」

成る程。

そういうことか。

「あとは、折角魔法騎士なんだから、田舎の直売所で野菜を安く買うとか、漁港近くのお店で大量に鰯を買うとか、主婦には出来ない戦い方を、僕達は出来るんだから」

「成る程？」

「実際、僕も時々、瀬戸さん家や博雅君の家とか、いろんな所の買い出し引き受けることあるよ？スーパーいくより、地元で買った方が安い時多いし。あ、後は近衛で軍用に仕入れたの、仕入れ値で売ってもらうとか」

「出来るの？」

「それが、主夫の実力というものです」

●秋篠博雅の日記より

……しくじった。

本当にそう思う。

主婦。

それは、別にあのおばちゃんやルシフェルのことだけじゃなかったんだ。

「さあっ！博雅さん！行きますよ！？」

着物にタスキがけという出で立ちでスーパー・ジャイアンの特売コーナーに突撃していくのは、俺の母親。

名門・秋篠家当主の妻だ。

昨晚、ルシフェルが特売コーナーで辛酸をなめた話をしたら、母上は滅多に見ない新聞の折り込みチラシを目にして、即座に俺にスーパーへの案内を命じた。

その目は尋常ではなかった。

「人生で最大の損失です！」

そんな特売を知らなかったことを、母上はそう呼んで地団駄を踏んで悔しがった。

で、俺は、母上が特売コーナーから投げつけてくる特売品をキャッチして籠に入れていく仕事を仰せつかったのだ。

「さあ！次は大根です！」

「サンマの特売は逃せませんっ！」

普段、おしとやかなタイプの母上が、目の色を変えて特売品を買いあさる姿を見るにつれ、俺はつくづく思った。

外見は関係ない。

オンナは結局もオバさんになるんだ。

そう。

あのおばちゃんのような外見にならなくても、

未だ美貌を讃えられる母上でも、
そして——ルシフェルでも。

みんな、オバさんになるんだ。

俺は、飛んでくる大根とサンマを受け取りつつ、人生に何か、暗い影を見た気がした。

特売は主婦の戦場です。男はそんな光景、見たくありませんけど。

(後書き

これもどうにもオチが弱い気がします。反省です。

詩乃先生の憂鬱 水瀬1年次4月頃

教育者として人間だ。

故に、頭に來ることだってある。

それが、かわいいはずの生徒だったとしても、だ。

では、どんな生徒が頭に來るのか？

例えば――

授業をさぼる生徒

授業を妨害する生徒

授業を聞かない生徒

中には、

自分を殺しにくる生徒

援交したのにサセてくれない生徒

というのもあるかもしれない。

しかし、ある種の教育者の場合、

自分の授業を聞かなくてもテストで高得点をとる

こういう生徒こそ、最も頭に來るらしく……。

キーンコーンカーンコーン

「じゃあ、次の時間までに宿題、忘れないようにねえ」

「きりーつ。礼！」

授業が終わり、生徒達があわただしく教室から出る中、一人の先生がため息をついて廊下を歩いていた。

さくらい・しの
桜井詩乃

明光学園教諭。担当は数学。

”ツボ”を押さえた的確な授業展開、生徒の興味を引く話術と、まさに教師の鏡のような存在だ。

この先生にも、やはり悩みはある。

授業には自信がある。

そのはずなのに――。

”また、あの子だけ寝ていた”

どうして？

私の授業、つまんないのかなあ……。

思わず、ため息が出てしまう。

授業には、結構自信があるんだけど……。

はあ……。

「どうしたんですか？桜井先生」

振り向くと、英語担当の南雲がいた。

筋肉系男は嫌いな詩乃だが、性格がさっぱりした南雲のことは、気に入っていた。

「あら。南雲先生。授業でしたの？」

「ええ。ため息なんて、らしくないっすよ？」

「はあ……実は」

「？」

「先生は、授業中寝ている生徒をどうしていますか？」

「放っています」

「放って？」

「ええ。いけませんか？」

「だって、授業聞いていないんですよ？」

「聞かなくて困るのは、俺達じゃないですよ。あいつらです」

「それは、そうですね……何だか、見捨ててるようで、好きにはなれません」

「そりゃあ、考え方だと思いますがね。アイツらが俺達の授業を見捨ててるんですから」

「考え方、ですね」

でも、

ううん！

頑張れば、きっとあの子だって、授業を聞いてくれるはず！

私は、誰も見捨てたりはしない！

よし、頑張るのよ！詩乃！

詩乃の教育者としての精神と背中には、その崇高な使命に燃え上が
った。

「あ、あの？先生？突然、背中に炎なんてしょっちゃって、ど
うしたんです？」

「演出です！」

「は、はあ。……あの、スプリンクラー、作動してるんですけど……」

”とにかくわかりやすく”

これが、詩乃の授業の基本理念だ。

わかる↓面白い↓勉強したくなる

分かり切った理屈ではあるが、これを授業で実現出来る教師はそう多くはない。

それを軽々とやってのけるが故、詩乃は教師として高い人気を得ているのだ。

「――というわけで、ここにXを代入することにより、答えはすぐに出てきます」

生徒達の間からは、感嘆の声が上がる。

「クソまじめに努力することはないんです。要は要領です」

詩乃は微笑みながら数学を学ぶ秘訣を言った。

「要領よくやって、後は神様に任せていれば、神様は”正しい答え”という奇蹟を、あなたのおケツに突っ込んでくれます」

生徒の沈黙を、了承と勝手に受け取った詩乃は思う。

難しすぎることから生徒達が敬遠するこの手の問題でも、大切なのは、解き方をどう教えるか。

問題を解決した後、基になる考え方が何かを明らかにし、明らかにした基になる考え方を活用し、それを自分のものにする。

これが基本だ。

これに、私流のちょっとした工夫を加えれば、ほら――。

生徒達の眼の色が違うでしょ？

世界の破滅かアノミーの局地に立たされたようなあの眼。

「それが出来ない人は、両生動物のクソをかき集めた値打ちしかないのです。いいですね？」

これだけやれば、あの子だって――。

ちらっ

問題の生徒を見た詩乃は、愕然とした。

また、寝てる……。

「コホン。水瀬君？」

横の席の生徒が、机に突っ伏したまま、ピクリとも動かない生徒を突いて起こす。顔を上げ、まだ授業中であることに、この生徒は驚いているらしい。

――ちょっと、バツが必要かしらね。

詩乃は、黒板一杯に複雑な数式を書き出した。

先程までの方程式の応用問題。

ただし、大学で相当なレベルの数学を修めた者でなければ解ける代物ではない。

解けなくて当たり前だ。

解けなくていい。この数式をきっかけに、授業に集中させよう。
うん。いい方法だ。

「――さっ。水瀬君？この問題解ける？」

「XⅡ16」

「――え？」

「だから、XⅡ16です」

一呼吸で解かれてしまった。

普通、一流大学の学生でも答えるのに20分は必要はずなのに。
でも、違ってくれた。

内心、詩乃は生徒の間違いに安堵していた。

「はあい。違いまあす。この場合のXは、25です。ダメよお？
授業聞かなくちゃ」

「……先生、方程式書き間違えてる。……えっと、4行目と24
行目、YとXの代入、逆だったら、25だけど、式通りなら16だ
よ？」

「……えっと……」

よくよく見てから、詩乃は青くなった。

「ち、ちよっと待ってね!？」

15分後

詩乃は結論に達した。

この子の指摘は正しい。

確かに、このままで解けば、答えは16にしかない。

「あ、あははははっ！ゴメンね。水瀬君」

笑ってごまかしたが、計算ミスをほとんど授業を聞かない生徒に、

一瞬のうちに指摘されたことに、内心で焦りすら感じていた。

この子にとって、私の授業の価値って何だろう。と。

「――なるほど、そういうことですか」

今までの経緯を告げられた南雲は、うらやましい。という顔で頷いた。

「オレなんて、マトモに授業をするのが夢だというのに、なんて贅沢な……」

詩乃の悩みは、南雲にとっては地上に存在すること自体信じられないような悩みだった。

「まあ、アイツは浮世離れた変人ですからね」

「それはわかっています。でも、かわいい生徒にかわりはありません。きちんと授業を受けてもらいたいと思うのは当然じゃないですか」

「そりゃあ、まあ……」

「先輩にも言われました。教師の仕事とは、”可愛い豚娘共をシゴき抜いて一人前の海兵隊員にすることだ”って」

「何か違う。それ違う。一体、どこの誰なんですか？それ……」

「元は海兵隊の指導教官だったそうです。軍隊でモメゴト起こしてそのまま日本に逃げてきたと……あ。まだFBIから指名手配中のはずです」

「……それが、先輩？教師？」

「はい」

さも当然という顔で頷く詩乃。

人のことは言えないが、上には上がいる。と南雲は妙な感心をした。

「はあ。このままでは先輩に申し訳が―」

「先輩とは大学時代に知り合ったんですか？」

「ただしくは大学院です。サークルで知り合った先輩でした」

詩乃は遠い目を窓の外に向けた。

「教師として尊敬すべき方のみならず、スプラッター映画……いえ。それ以上に、女同士のすばらしさを一から教わった、かけがいのない、お姉様でした。……ああ、お別れのあの夜のすばらしさを、体が忘れられません」

語りつつ身悶えする詩乃を、ひき気味に見る南雲。

「……は、はあ……」

「あああ……思い出すたびに……お姉様あ……（はあと）」

南雲は、その光景を想像することを、夜まで待つことにした。

それからというものの、詩乃は手を変え品を変え、何とか授業に集中させようと躍起になった。

あらゆる授業改革の本を読みあさり、教材を工夫し、参考になるものはどん欲に授業に取り入れた。

”桜井先生の授業は面白い”という評価は、生徒達の間で当然となりるのに、さほどの時間はかからなかった。

生徒達の変化はめざましかった。

”生まれて初めて数学の授業が面白かった”

”予備校の授業よりたになる”

”先生と二人っきりの課外授業が受けたい”

”あの巨乳でオンナのすばらしさを教えてほしい”

と、わずかの期間で、詩乃の授業は学園中の評判をさらっていた。他のクラスの生徒が紛れ込んでまで受けたがる授業として、生徒達からの評価と成績は鰻登り。

定期テストでも、他の数学教諭受け持ちの生徒と比較して、偏差値で10以上の開きが生じていたことが、それを裏付けていた。

しかし――

テストでトップ成績をとった生徒は、今日も机に突っ伏したままだ。

詩乃は、正直落胆していた。

この子は、私の授業を聞かなくても、トップをとった。

この子には、私の授業が必要ないんだろうか……。

詩乃の考えは悪い方へ悪い方へ進む。

結局、私の努力って何だったんだろう。

生徒一人、授業を聞かせることが出来ないなんて――。

私が悪いの？

それとも、この子が悪いの？

私は精一杯のことをしたつもり。
それでも、授業を聞いてもらえない。

そうね——。

私の努力が足りなかったってことかな……。

自分の至らなさに泣きたくなるのを押さえながら、続ける授業。

私、やっぱり、教師に向かなかったんだ。

だから、この子は、授業を聞いてくれない。
でも、学園でトップの成績なんだ。

私の授業に、意味はない。

不意に目頭が熱くなった途端——。

ふわあああああつ……ムニヤムニヤ

間の抜けたあくびがクラス中に響き渡り、詩乃は思わずつのめ
って、手にしたチョークの先端を割った。

「……へ？」

振り向くと、あの生徒が、気持ちよさそうに眠っていた。

その寝顔は、確かに可愛い。

可愛いけど……。

そうね。

格言で言う、アレなのね。

詩乃の理性は、文字通り、キレた。

ツカツカツカ

穏和な表情はどこへやら、鬼のような形相で、生徒達の間を抜け、清掃用具入れからバケツを取りだすと、教室の外へ。

何事かと見守る生徒達の耳に、水道の蛇口を開いた音が聞こえ、しばらくした後、その形相の恐ろしさから、全員が眼を合わせようとしない中を詩乃は歩き、そのまま――。

ガンッ！

教室中に、そんな音が響き渡った。

「害虫は消えました」

「あ、あの……」

バンッ！

美奈子の声を遮ったのは、教壇に叩きつけられた指示棒の音だった。

静まりかえった教室を冷たく睨んだ詩乃が怒鳴る。

「はっきりさせておきます！わたしは数学”訓練教官”です！」
ざわつきが消えない教室に、詩乃の声が響き渡る。

「授業中だ！話しかけられたとき以外は口を開くな！口でクソたれる前と後に“サー”と言え 分かったか、ウジ虫ども！」

「は、はあ……」

「Sir, Yes Sirだ！日本語すらわからないのか！？」

「さ、Sir, Yes ……Sir」クラスの全員が呟くように
復唱する。

「ふざけるな！ 大声だせ！ タマ落としたか！」

「Sir, Yes Sir！」今度は絶叫に近い。

「よろしい」

詩乃はようやく普段通りの顔に戻った。

「さあ。みんな、授業に集中しないと、同じメにあうんだからね？」

詩乃は、そういうと、いつも通りの明るい笑顔をかわいい生徒達に向け、授業を続けた。

へしゃげたバケツを被ったある生徒が、ピクリとも動かないのは、決して眠っているからでない中を――。

この日の授業以降、

”桜井先生だけは怒らせるな”

それが、生徒達の合い言葉となり、そして、問題の生徒たる水瀬も、最初から最後まで、マジメに授業を聞くようになったという。

お酒は好きですか？ 水瀬1年次5月頃

「—というワケなんだな。わかるかい？」

「なるほど。大変なことなんですね」

「……もしもし？」

「どうしたんです？ 由里香さん」

「？」

ある日の夜、綾乃の父・昭博と水瀬が夜食の鍋をつついていた所へ、由里香が口をはさんできた。

なぜか、額に青筋が立っている。

「お二人とも、今、何時だと思っているんですか？」

「10時」(×2)

「おお、はもったね。悠理君」

「そうでしたね」

「そうじゃなくて！」

「由里香さん？ 声が大きいですよ？ ご近所の皆様にご迷惑です。

ちなみに夜食を食べています。悠理君の作ってくれた」

「あら、おいしいそう……そうでもありません！ 悠理君！」

「はい？」

「手に持っているのは何！？」

何故か怒っている由里香の言葉に、視線を右手にやった水瀬が答える。

「お箸」

「ひ、左手！？」

「……おちよこ」

「中身は！」

「あ、これですか？ 明鏡止水の大吟醸です。おばさん、好きですよね」

さっそく空のおちよこに一升瓶から酒を注ぐ水瀬。

「あら！」

「由里香さん、せっかくですから飲みましょう」
昭博も微笑みながら席を勧める。

「じゃ、お言葉に甘え……じゃなくて！悠理君！未成年でしょう！お酒なんて飲んでいいの！？」

「……いけないんですか？」

「法律で決まっています！未成年でタバコやお酒飲むのは不良のはじまりです！」

「由里香さん、古い……」

ギロツと睨まれた昭博はとっさに視線をそらす。

「だいたい、昭博さん！なんですか！助教授の立場で——」

「僕は教授です」

「どっちでも同じです！聖職者が何をやってるんですか！」

「まあまあ、かけつけ一杯」

「じゃ、いただきます……はあ……おいし」

「おばさん。いい飲みっぷりですね。ささ。もう一杯」

「私、お酒には目がなくて……あらあら、ありがとう」

1時間後

「らからあ、わたしはですね？……ヒック。まだ34なんですよ？34！それなのに、“おばさん”れすよ？“おばさん……ヒック。わかってるの？キミは”

ろれつが回らなくなりつつある由里香と、

「いいじゃないですか。いいですか？人生というのはですね？」

壁に向かって説教を始める昭博。

「……」

水瀬は他の酒を持って部屋に逃げようとして由里香につかまり、絡まれていた。

「ゆう君？お姉さんから逃げるとはどういうことかしら？お姉さんのお酒が飲めないともいうの？」

「い、いえ、あのですね？おばさん」

「おばさん……？」

突然、由里香が水瀬をにらみつけると、水瀬の頬を力一杯ひっぱった。

「私はまだ34れす！いいれすか？34！まだ若いんれす！お姉さんといいなさい！お姉さんと！」

「いひやいいひやい！」

「あはははっ！ひどいなあ……悠理君、いいかい？僕の目を見て聞きなさい。人生はね……」

「おじさん、それ冷蔵庫……」

「さ、ゆう君、飲みなさい。まだ若いんだから、飲まなきゃ、ね？」

「は、はあ……」

結局、由里香是水瀬の未成年飲酒を止めるどころか、勧める——いや、強要していた。

翌日、目を覚ました綾乃が目にしたのは、リビングで雑魚寝している両親と水瀬の姿。

水瀬は綾乃から時間ぎりぎりまで説教を受け、“お酒臭い”という理由で登校を止められたという。

「へえ……すごいことになってるんだね」

朝から不機嫌な綾乃から事の次第を聞いた美奈子があきれ顔で言った。

「水瀬君、お酒好きだったんだ」

「お部屋片づけていたら一升瓶がごろごろ出てきたんですよ？いいお酒ならきちんと冷蔵保存しないと」

「綾乃ちゃん、論点違う」

「コホン……と、ともかく、飲めるからってお父さんがお母さんの目を盗んで晩酌の相手させてるんです。困ります」

「ま、綾乃ちゃんだって楽しそうだよ？ 実際」

「そ……そんなこと」

「あーあ、照れちゃって」

「美奈子ちゃんったら！」

「……反省してます」

放課後、帰宅した綾乃を前に由里香は凹んでいた。

「本当に？」

氷嚢を頭に当てる由里香に厳しい眼差しをむける綾乃。

「だってえ……」

「お母さん、昔からお酒には目がないものね」

「悠理君の選ぶお酒っていいものばかりなんだもの。肴も美味しくてついつい……」

「で、次の日は二日酔いじゃだめじゃない。お母さん、ヘンに意地汚いトコあるんだから。大体、明日、お父さんと長野に行くんですよ？ 大丈夫？」

「な、なんとか……」

「まったく、みんなしてお酒お酒って……」

部屋に戻った綾乃だが、どうしても興味がわいてきて仕方なかったことがある。

（お酒って、本当に美味しいのかしら）

時と共に高まる関心に負け、綾乃はあることを企んだ。

翌日、出かける両親を送った後、綾乃が向かった先は、水瀬の部屋。

水瀬はまだ戻ってこない。

多分、しばらくは大丈夫だろう。

あたりを確かめつつ、こっそりと部屋に入る綾乃。

オトコの子の部屋に忍び込む。

そのことだけでもドキドキものだ。

「おじゃましまあす……」

そう呟きながら入った部屋の中には、段ボールが数個と着替えがあるだけの殺風景な空間が広がっていた。

問題は押入だ。

押入の下段。

昨日、悠理君が他の女の子からもらったラブレターの束が入った箱を見つけたのは偶然だ。

決して家捜ししたんじゃない。

見つけようとして見つけたんじゃない。

家主の娘として持ち物全部を検査したら出てきただけだ。

悠理君を簀巻きにして運河に投げ込んだのは正しい行為だったと今でも信じている。

女の子の名前とクラスは把握しているから、落とし前はしっかりつけてもらおう。

——運河じゃなくて、いっそ溶鉱炉の中のほうが良かったかしら。

そんな風にぶつぶつ言いながら、段ボールの陰から取りだしたのは何本かの一升瓶。

「清酒……大吟醸……純米……どれがいいのかしら？」

酒の格など、綾乃にわかるものではない。

どうせ試すだけだ。と、封の開いたものを選び、気づかれない程度、ちよつと飲んでみることにする。

「……」

思ったより甘い。

「へえ、これがお酒なんだ」

もう一口。

うん。これはおいしい。

もう一口。

うん。これはいい。

もう一口。

もう…

綾乃が2本目の封を切った時、玄関には4人の姿があった。

「大変ですね」

「もう。どうしてそんな大切な書類を忘れるんですか？」

「ごめんごめん（^^）」

「残念だな。せっかく飲めると思ったが」

そう。水瀬と綾乃、双方の両親だ。

「本当に、息子が世話になっているのに、ご挨拶にも伺わないのはさすがに気が引けてますね」

「本当に、申し訳もございません」

ということだ。

「悠理、由里香さんのご迷惑にはなっていないだろうな」

「大丈夫、だと思います」

「よし。後で部屋を検分する。時間をくれてやる。片づけてこい」
「はい」

階段を上り、昭博の書斎の隣の部屋が水瀬の部屋。

Σ (O D O = になった水瀬の目の前には

(一 | 一) 顔で酒を飲み続ける綾乃がいた。

(H - D -) σ = になる水瀬は、部屋に入った。

「瀬戸さん。まず服着て。大丈夫？」

「だってえ、暑いんですよ。ここ」

そう。今の綾乃は下着しか身につけていない。ちなみに白のレース。

押入から引っ張り出された一升瓶はほとんどが飲み干されていた。

「一升瓶で5本以上！？……瀬戸さん未成年でしょ！こんなに飲んじゃダメでしょ！」

論点が違うが、珍しく叱るような口調の水瀬と、不満そうな綾乃。綾乃の目と声は完全に座っている。

「自分だって、飲んでるじゃないですか」

「い、いや、あのその」

「大体、なんですか、あのラブレターの山は！」

「だ、だってもらっちゃったんだから……」

「私、偶然見つけた時には、本当に悲しかったですよ？……あ、あんなに大切にしているってことは……ヒック……ふえええん！」

「無碍にするわけにもいかないでしょ！」

「じゃあ、手紙に返事書いたんですね？何てです！一言一句、全部話してもらいます！それまで離れませんからね！」

といいつつ、水瀬にひつつく綾乃。

(勘弁して…… (T | T))

怒り上戸に泣き上戸、さらに絡み上戸のトリブルコンボを喰らった水瀬は心の底からお手上げ状態だった。

「ううっ……知ってるんですからね！美奈子ちゃんだって悠理君

のこと好きなの！他にも菜々美ちゃんとか、由里ちゃんとか、聞く度に私がフラグばっかり折るのにどれだけ苦労しているか、わかってるんですか！？」

「ご、ごめんなさい。わかりません」

「悠理君は冷たいです！大体、私を瀬戸さんって呼ぶことから納得できません！なんで綾乃って呼んでくれないんですか！？それとも、3歳の時交わした婚約なんて、子供の遊び位にしか見てないんですか！？高校に入ってようやく再開できたのに、他の子とばかりなかよくなってる！」

「せ、瀬戸さん」

「綾乃です！！」

「あ、綾乃ちゃん、落ち着いて……」

「わ、私だって」目に涙をためながら抗議する綾乃。

「私だって努力してるんです！せめて美奈子ちゃん並のバストになろうって！……ゴクゴクコグッ……ぷはぁ……でも！私の方がウエストは細いんですからね！」

「あ、ああああああ」

手近にあった一升瓶をラッパ飲みしながらまくし立てる綾乃を、ただおろおろと見つめるしかない水瀬。

「悠理君だって、おっぱいは大きい方がいいんでしょう！？」

「あ、あの、僕は別に……」

目を背け、返答に困りきる水瀬を睨む綾乃の口元が、不意にゆるんだ。

「ねえ、ゆ・う・り・く・う・ん？」

ファンなら悶絶死確定なまでの妖艶な笑みを浮かべつつ迫り来る

綾乃。

「は、はい」

「オトコの子なんだから、試してみる？」

「へ？」もう、水瀬もあまりのことに涙声になっている。

「私はいですよ？クスクスクス」

「な、なななな、何を？（Σ（OДO＝」

「うふふふっ……いわせないでくださあい」

綾乃に抱きつかれた瞬間、

ふわっと水瀬を包み込む綾乃の匂い

やわらかな肌の感触

綾乃の吐息

そのすべてを感じた水瀬の思考は綾乃に占領された。

この娘が、欲しい。と

「あ、綾乃ちゃん……」

水瀬の震える手が綾乃の肩にかかろうとした時

「はいそこまで！！」

部屋に入ってきたのは双方の両親だった。

平謝りに謝る綾乃の両親と水瀬の両親の間で、二人を抜きにした状態で話し合いがもたれたのは、出張先の長野でのこと。

綾乃が二日酔いの頭を抱えてうなっている中でのことだ。

ちなみに、綾乃は酔っていた時のことを何一つ覚えていなかった。

「大丈夫？梅干し持ってきた」

綾乃の部屋に入ってきたのは、看病を言いつけられた水瀬。

「魔法でなんとか……」

「さっき電話で、だめだっておばさんから念を押された」

「お母さん達、無事ついたんだ」

「うん。何かお母さんとおばさんも忙しいみたい」

「ふうん」

「ウェディングドレスと白無垢がどうかこうとか……」

「ふうん？」

銃と中学生と小姑と 水瀬1年次5月頃

■某月2日（木） 朝 明光学園正門前

「やつほお！み・な・せ！」

パッコーン！

カワイイ声と同時に、いい音が周囲に響く。

水瀬が後頭部を叩かれた音だ。

振り返った水瀬の目の前には、バツが悪そうな顔の女の子がいた。

「ヒドイよ萌子ちゃん。痛いよお」

「ごつめーん。肩叩こうとしたんだけど、思いっきり低かったから」

学生鞆を後ろに隠しながらいたずらっぽく片手で謝る女の子は、中等部の制服を着ていた。

腰まで伸ばした黒髪にクリツとした愛らしい眼——将来、かなりの美人になるだろう。

「今の、手？」

「そうよ？やわらかかったでしょ？」しれっと答える女の子。

「思いっきり硬かったけど」

「気のせいよ」

「——もうっ。人を叩くなんていけません」

「はいはい。それよりね？例の件、どうなったの？」

「あっ。あれ？あのね？」

一緒に校門向け歩き続ける二人。

制服が同じだったら、仲のいい同級生で通るだろう。

それほど、あまりに親密すぎた。

少し離れた場所で、その光景を見ていたのは、綾乃と美奈子だった。

■某月3日（金）明光学園校内 昼休み

「おい水瀬」

「あ、品田君。どうしたの？」

「姫のお召しだぜ」

「？」

「萌子ちゃんや。中庭で待ってるさ」

「ああ。ありがとう」

席を立って教室を出て行く水瀬の姿を見送ったのはやはり綾乃と美奈子。

「品田君？」

「はいな」綾乃に呼ばれ、品田はすぐに飛んでいく。

「さっきの、「姫」って、誰のことです？」

「あれ？綾乃ちゃんなら知っているやろ？加納萌子ちゃん」
「？」

「先月、中等部からデビューの可能性って、雑誌に取り上げられた、あの子や」

「——あっ」

「そ。“ポスト瀬戸綾乃”って言われたあの子や」

「それが、なんで「姫」って？」

「ほら桜井、春の葉月祭りでさ。武者行列あるやろ？あそこで十二単着たんや。あの子。ま、その時のヒロインなお姫様役が木村香奈。知ってるやろ」

「あの、アイドルの？」

「そ、あの子よりも美人ってことで、取材のカメラが木村の撮影おざなりにしたって位、似合っていたらしくてな？で、それ以来、あだ名が「姫」や」

「その子が、何で水瀬君と？」

「そんなん、ワイが知るかいな」

ちらりと互いに目配せした二人が教室を出て行ったのは、それからすぐのことだった。

■瀬戸綾乃の日記より

結局、二人がどんな話を話していたのか知ることは出来ませんでした。

ただ、なんだか親しげな態度がムカつきます。

あの萌子とかいう泥棒猫、いつか天誅を喰らわせてやります。

■桜井美奈子の日記より

加納萌子

加納？

気になったから、品田君に確認してみた。

やっぱりそうだ。

狩野グループの子だ。

この葉月を根拠地として、近衛兵団の関連の一切を手がけるといってもいい複合企業。

その元締めが加納家。

近衛兵団を除けば、加納グループ関連企業への従業員とその家族だけで全人口の9割近いという葉月のこと。

加納に刃向かって葉月で生きていけない。

綾乃ちゃんが心配。

■某月6日（月）明光学園図書館 昼休み

「あ、水瀬！」

席に座って本を読んでいた水瀬の横に、萌子が座った。

「あ、萌子ちゃん。昨日はお疲れ様」

「こっちこそ、ありがとうね。とっても楽しかった。でも、やっぱり長いのがいいけどさ、大きいからキツかったわ。反動が押さえられなくてさ。だから、今度はもう少しソフトなのがいい。天気が良ければ部屋の中より外の方がいいし」

「……萌子ちゃんも好きだよね」

「どうです？」

少し離れた所で、集音マイクを使っているのは未亜。その後ろには綾乃と美奈子がいた。

図書館で何をやっているか、二人の放つ異様なオーラを恐れ、誰も確かめることができずにいた。

「うーん。やっぱり調子が悪いっていうか、何かノイズがヒドイんだよね。水瀬君にこういうの使うと」

「？」

「誰かと話していき。肝心なところがノイズで消えるんだ。いつも」

「これは、それほど大切じゃないと？」

「多分ね——ええっと、何々？」

どうやっても、ノイズがひどくてどこか肝心な所が聞き取りづらい。

『来週は——長いのが——大きいからキツかった——もう少しソフトなのがいい。天気が良ければ部屋の中より外の方が』

『萌子ちゃんも好きだよね』

「長いのか？ 大きい？ 外？ 好き？」

何故か、キーワードばかりに意識が行った未亜が会話を解釈する。

「えっと、○○○○○が長くて太くて、アの時きつかった——萌子ちゃんも中学生だもんね。だから、もっと優しくしてほしい。プレイの場所はお外がいい……にああ。萌子ちゃん、あんな年で進んでるう」

■桜井美奈子の日記より

未亜の言葉を、最初は理解できなかった。

ううん。理解したくなかった。

そりゃ、ちょっと進みすぎじゃない？

高校生なんだし、いくら何でも中学生はないと思う。

でも、そういうことなの？

もし、相手が欲しいなら、言ってくればいいのに。

瀬戸さんより私の方がスタイルいいんだし……わ、私、何言ってるの！？

■瀬戸綾乃の日記より

もう決めました。

この泥棒猫も水瀬君も、処刑します。

そのためにも、今は証拠固めが必要です。

未亜ちゃんにお願いしましょう。

嫌な顔してましたので、札束でビンタしてあげました。

とても喜んで引き受けてくれました。

■某月8日（水）明光学園食堂

水瀬と萌子が親しげに食事をとる姿を、周囲の生徒達は憎悪をもって見守っていた。

中等部で「姫」の異名をとる萌子。

そして、その相手は相手は瀬戸綾乃の婚約者にして、公の場でキスシーンまでやってのけた水瀬。

しかも、萌子も水瀬も、互いについては「親しい関係」というニュアンス以上に答えようとしないことが、様々な憶測を生んでいた。そして、今や水瀬の評価は、「学園のスケコマシ」こと北条瞬を下回る程の下落ぶりを見せていた。

最も面白くない思いをしていたのは、当然、綾乃だった。

二人が食事をしながら、熱心に何かを眼にしている。
そこへ――

「悠理君」

愛らしい。いいたいが、どこか恐い声の綾乃が、水瀬の横に座る。
何故か、座った途端、水瀬の顔が苦痛に歪んだ。

「何のお話、してるんですか？」

「え？あ、瀬戸先輩。これですこれ」

萌子が綾乃の前に広げたのは、一冊の雑誌。

「？」

よく見ると、兵隊の格好をしたモデルが銃を構えている。

「これ、ズリズリー社の50口径。すごいんですよお？撃てば反動で肩の骨折れたかもって思えますよ？で、これが――」

「悠理君」

熱心に銃について説明する萌子に気づかれないように、綾乃はこっそり水瀬の耳にささやいた。

「これ、何ですか？」

「その前に足どけて……痛い」

「あ、ごめんさい」

さつきから足を踏みっぱなしの綾乃は、素知らぬ顔で言うとおりにした。

「あのね？萌子ちゃん、銃が趣味でね？で、こういうのについても詳しいわけ」

「水瀬君がどうしてそれに付き合っているんです？」

「うーん……いろいろ」

ガンッ

鈍い音がして、水瀬の顔が蒼白になる。

「何故です？」

「足どけて……痛い」

「しゃべったらどけてあげます」

「あ、あのね……耳、貸して」

「？」

綾乃が水瀬の顔に耳を近づけた途端、ペロッ

「きゃっ!？」

バキッ!!

水瀬が突然、綾乃の耳をなめた。

何故、水瀬がそんなマネをしたのかはわからない。

ただ、それに驚いた綾乃が問答無用で水瀬を殴りつけ、水瀬が保健室へ担ぎ込まれたことだけは事実として残った。

■某月8日（水）明光学園高等部保健室

「あの……」

「先輩、話には聞いていましたけど、これはないんじゃないですか？」

怒った萌子の前で、綾乃は小さくなっていた。

水瀬は二人の目の前でベットに横たわっている。

「そりゃ、いきなり耳をなめられたら、驚くのは当然です」

「はあ……」

「でも、ここまですることないんじゃないですか？」

「はあ……」

気まずい沈黙が保健室を流れる。

「失礼します」

そこへ入ってきたのは、美奈子だった。

「あっ、あの……水瀬君が倒れたって」

「殴られたんです!」

顔を真っ赤にして怒る萌子。

「あ、あの……萌子ちゃん？」

萌子の大声でようやく目を覚ましたらしい水瀬が、起きあがりながら萌子を止めた。

「だ、大丈夫。この位……」

「どこが!？」

萌子の怒りはそれでも収まりそうにない。

「聞いてはいるよ? 瀬戸先輩に何度も殺されかかったとか、瀬戸先輩のせいで将来が危なくなっているとか、水瀬の死因には瀬戸先輩の名前が書かれるはずだとか」

「そ、そこまで……」

「この清純風武闘派アイドルの暴挙を語る上ではまだ手ぬるいくらいです!」

「萌子ちゃん!」

「水瀬は黙ってて!」

「ひっ、ヒドイ……酷すぎる……」

「あ、あのね? 加納さん?」

涙に暮れる綾乃を慰めつつ、美奈子は、あえてストレートに聞いた。

「あの、二人って、どういう関係なの?」

「……」

綾乃と美奈子、二人をじっと見比べた萌子は言った。

「腹違いの兄妹です」

「エ、ッ!? Σ (O_D_O=) (×2)

「き、兄妹? い、今時、そんな使い古しのネタ……だっ、だって水瀬君……」

「言ったじゃないですか。腹違いって」

「あ、ああ……」

あまりのことにパニックになっている頭を励起しつつ、なんとか理解に努める美奈子がさらに聞いた。

「じ、じゃあ、あの……この前の図書館での会話って、近――」

「え? ……ああ、日曜日にお父さんをお願いして、自動小銃の射撃やったことですか?」

「射撃？」

「ええ。38式とか、50キャリパーとか、撃ち放題で。長モノ（ライフル）って、やっぱり反動が強くて困りました。その時、水瀬が監視と指導役で入ってくれて」

「あの……外ってのは」

「屋内射撃場、音の反響がすごくてイヤなんですよね。屋外の方が楽しいし」

思い出したように萌子は言った。

「でも、水瀬、最近ちよつとエッチなんですよ？銃の反動で転びそうになった時、胸鷺掴みにするし、姿勢が正しくないって、体中触ってくるし——」

水瀬が、綾乃により再度ベットに昏倒させられたのは、この直後のことだった。

「瀬戸先輩！何で女の子がここまでやるんですか！？」

「信じられない！こんな暴力的な女の子がいるなんて！」

「やっぱり、桜井先輩の方が絶対お似合いです！」

「先輩、水瀬との交際を諦めて下さい！」

ことある毎にその口から飛び出す綾乃への抗議。

将来の義理の妹からの抗議は、常に正しく、そして、綾乃にとって反論出来るものではなく——。

■瀬戸綾乃の日記より

もうダメです。

ストレスでお肌も髪もダメになりそうです。

義理の妹と分かり合うのが、こんなに辛いことだなんて、知りませんでした。

やっぱり、あの人に相談させていただきましょう……。

加納萌子――。

戸籍上の水瀬萌子――。

その登場は、綾乃にとって、恐るべき小姑との軋轢の誕生を意味していた。

綾乃が突如テレビ番組の占い人生相談に登場し、小姑との泥沼の関係という、関係者どころか視聴者までを青くさせたほどの相談内容の濃さで話題になったのは、それから一ヶ月もしないうちの出来事だったという。

ケンカは好きですか？ 水瀬1年次5月頃

その力故、力を持つ者として常に己の振る舞いに慎重な姿勢を求められるのが、騎士。

しかし、皮肉なことに、その力故、己を試してみたいという欲を持つ者もいるわけで……。

■明光学園

生徒達が体育館座りで見守る中、二人の生徒がスタンプブレードを構え、対峙していた。

一人は大柄な男子生徒、もう一人の生徒は、対峙する生徒の胸元くらいまでしか背がない。

男子生徒は上段の構え、対する小柄な生徒は切っ先を少し下げた構え。

「工藤やっちなえ！」

「ぶつつぶせ！」

生徒達の中から興奮気味の声援が飛び、それに応えるように男子生徒は相手に突撃した。

上段からの袈裟斬り。唐竹割。

力と体格にモノを言わせた、文字通りの力任せの一撃。

（とった！）

対する小柄な生徒はただその一撃を、ぼんやりと眺めているだけのように見えたからなおさら、自分の勝利を確信していた。

が、

「!?!」

必殺の一撃がインパクトする直前に、相手の姿が男子生徒の目から消えた。

「なっ―――!」

同時にスタンブレードに伝わる重い感覚に、男子生徒は思わずスタンブレードを取り落としそうになった。

次の瞬間、

つんっ。

何かに額を突かれ、男子生徒は、自分が敗北したことを知った。

突かれたのは、小柄な生徒のスタンブレード。

男子生徒のスタンブレードの峰に両脚を乗せ、自分を見下ろしている小柄な生徒からの一撃だった。

「よし!そこまで!」

ホイッスルと共に教官の声が飛び、小柄な生徒は、スタンブレードから飛び降りた。

「勝者、水瀬!双方、礼!」

「よっしゃあ!次はワイや!」

生徒達の中から勢いよく立ち上がったのは、”野生児”という言葉でしか表現できないような、よく日焼けした体格のいい男だった。

「水瀬!次はワイと勝負や!」

スタンブレードを振り回す男だったが、水瀬は水瀬で相手にしてない。

「草薙、時間だ」

全く相手にしないという口調で止めに入っただのは、指導教官の南雲だった。

「なんでや！一度くらいええやろ！」

「お前はダメだと何度言えばわかる」

「何がや！ちいっとばかり、腕試しするだけやろうが！」

「ダメだ」

文句を言い続ける草薙を無視しつつ、南雲は授業の終了を宣言した。

「いや、あの動きはマネできないな」

「そうかなあ。あれなら簡単と思うけど」

「無茶言うなよ」

授業の後、更衣室で着替えながら水瀬は博雅と話す。

「訓練すれば難しいことじゃないよ。博雅君だって出来るって」

「お前と俺のそういう所の価値観は全く違うってことだけはよくわかった」

「そうかなあ……」

「で？昼飯どうする？」

「教室に荷物置いてから学食行こうかな。一緒に行く？」

「ああ。やはり午前中の体育は腹が減る」

ガラッ

ピシャッ

教室のドアを開けた水瀬は、中を見た瞬間にドアを閉めた。

「……」

「お、おい、どうした？」

ドアだけを見つめる水瀬は、凍り付いた声で言った。

「瀬戸さんが怒ってる」

「はあ？」

「どうしよう。すごく怒ってる」

「心当たりは？」

「ありすぎてどれだかわからない」

「ま、とにかく、話を聞かなきゃわからないだろうが」

「うん……」

ガラッ

開かれたドアの向こう

そこには、いつの間にか、綾乃が立っていた。

「……悠理君」

「は、はい」

「ちよっとこっちへ来て下さい」

ぐいっ

綾乃は問答無用で水瀬の腕を掴むと、廊下を引きずっていく。

「せ、瀬戸さん！ぼ、ぼく、これからご飯！」

「安心して下さい。私は食べましたから」

「……で、桜井さん。瀬戸さんのご立腹のわけは？」

見送りながら、博雅は教室から顔を出した美奈子に訊ねた。

「わかんない。どうも、綾乃ちゃん家でのモメ事みたいだけど」

「でもさ、瀬戸さん、いつからだ？」 水瀬君” じゃなくて、” 悠理君” って呼ぶよな」

「そうね……」

連れてこられたのは、体育館の裏。

まるで気に入らない生徒にヤキを入れる不良のような行動パターンだが、幾度となく、ここで綾乃に処刑されかかっている水瀬は涙ながらに覚悟を決めた。

今まで、生き残ってきたのは、単に運が良かったただけなんだ。と。

「私が、何で怒っているか、わかりますか？」

「う、ううん」

「……約束、覚えていますか？」

「え？」

「この前、約束してくれたじゃないですか！ランキング1位3週連続でとったら、”菊理媛”飲ませてくれるって！」

「……あゝ」

忘れてた。

数が出回ってなく、あまりに貴重だから、こっそり一人で飲むつもりだったが、「荷物検査」で見つかったあの酒のことだ。

ちなみに、市販価格で5万円以上する高級酒。

おととい、最後の一滴を名残惜しくも飲み干してしまっていた……。

『少し、味見していいですか？』

やっと手に入れた嬉しさから、水瀬の自慢げな説明を聞いた綾乃が関心を持ったのは、その貴重性故のこと。

だが、一人で飲みたい水瀬は、「今度の新曲で3週ランキング1位とったら飲ませてあげる」という条件を付けて、そのまま忘れていた。

「昨日で3週間です。1位はとりました！でも、なんであのお酒がないんですか！？」

「え、部屋に……」

「昨日の夜、部屋中調べました！あの瓶だけありません！」

「あ、あれ、その……」

「……」

やっぱり、本当のことは言おう。

水瀬は決心して綾乃に頭を下げた。

「ごめんなさい。飲んじゃいました」

「嘘つき！約束したじゃないですか！飲ませてくれるって！」

「う、ううっ……かつ、買ってくるね？」

じとっ。という目で綾乃は言い放った。

「今日の夜7時までです。遅れたら許しません」

「はい……」

「おつまみはお刺身がいいです。この前作ってくれたの」

「築地で仕入れてきます」

怒り心頭のまま、水瀬を置いて教室に戻る綾乃の後ろ姿を見つめつつ、ため息をつく水瀬。

多分、プレミアがつくから、あの一本と同じ値段では手に入らないだろう。いだろう。

場合によっては都内の酒屋を何軒も回らなくてはならないだろう。

——綾乃ちゃんも、飲んべだからなあ……。

その水瀬も教室に戻ろうとした時、体育館の壁にもたれるようにしてこちらを見ている生徒に気づいた。

草薙だ。

無視するようにその前を通ろうとする水瀬に、草薙が言った。

「アイドルが飲酒か？」

ピタッ

水瀬の足が止まった。

「まずいなあ。ワイ、ついついしゃべってしまいそうや」

「——この場で消すって方法もあるよ」

「おお怖」大げさにおどけて見せる草薙。その目に含まれているのは、軽蔑そのものだ。

やれるもんならやってみいやー。

その目は、そう語っていた。

挑発されていることは、水瀬自身、わかっていた。だが、綾乃絡みで引くことは出来ない。

「取引せんか？」

「取引？」

草薙の口から出た意外な言葉に、正直、水瀬は困惑した。

「せや。引き受けてくれたら、ワイは黙る」

悪い条件でなければ、乗ってもいい。

水瀬は、そう判断した。

「条件は？」

その一言に、草薙は、嬉しそうに言った。

「ワイと、勝負せんか？」

「やめろ」

審判を頼みに行った南雲に開口一番、そう言われた。

「何でやねん！？おい南雲お、水瀬のことになると、何かヘンやで」

「変でもなんでもいい。アイツとケンカ沙汰なんて認めん」
とりつく島もないという南雲。

「大体、水瀬は、本気でお前とケンカなんてやる気はハナからないはずだ」

草薙の知らない水瀬の何かを、この男は知っている。
だからこそ、草薙は思いきって訊ねた。

「……マジメな話、何でや？南雲、あいつの何を知ってんのや」
「……」

「ヘンやでホンマに。今まで誰とケンカしても、『殺さない程度で抑えろ』しか言わへんやんか。水瀬が相手だと、何やねん？ワイがアイツを殺しちまうとでも考えとるんか？」

「逆だ」

言ってから、南雲は”しまった”という顔で舌打ちした。

「逆！？ワイが水瀬に殺されるっーんか？あ？」

「……」

南雲は答えない。

「冗談やないで……!!」

暗に肯定する南雲の態度に、草薙はキレた。

「ワイを誰や思ってるんや！ケンカ上等、常勝無敗の草薙様やで！？南雲！ちいっとワイに勝ったからって、なめすぎやないか！？」

「……」

「……な、なんや」

じっ。と、静かに草薙を見つめる南雲に草薙は思わず警戒した。

「……じゃあ聞くが、お前にとって、ケンカとは何だ？」

「一種のコミュニケーションや。あれほどわかりやすい会話なんて、他にあるかい」

「アイツは違う。違うんだ」

「まあ、おぼっちゃまやから、ケンカなんて知らんやろうがな」

「アイツが知ってるのは――」

今まで、草薙が見たこともないほど冷めた目の南雲は言った。

「殺しだ」

「！」

南雲の口から出た言葉の裏に、あの時の水瀬の視線を思い出し、草薙は戦慄した。

「こ、殺して……」

「いいか？ アイツはあの戦争の命のやりとりの中を生き残ってきたんだ。そんな奴に、ケンカなんて”甘ったれた”言葉が理解できると思うな」

「甘ったれたあ？」

カッとなったが、草薙は抑えた。

ケンカと殺し合いは勝手が違うことくらい、草薙にもわかるからだ。

「そうだ。ケンカは勝っても負けても次がある。

だが、殺しに次はない。

ケンカのルールが、お前のルールだというなら、アイツのル―

ルは殺しのそれだ。

後がある者と後がない者でやりあって、”ある者”が”ない者”に負けることはあり得ない。

草薙。だから、お前は”負ける”。負けて、そして”殺される”。いいか？

ケンカだろうがなんだろうが、やり合う以上、あいつには、お前のルールに従う理由なんてどこにもないんだ。

もし、あいつが本気で来たら、お前は間違いなく殺される。

これは、俺が保証してやる」

「……」

「お前、殺されるぞ」

ゴクツ。

草薙は、戦慄混じりの生唾を飲み込んだ。

南雲が一切の嘘を言っていないことは、その口調からわかる。

ケンカをする上で、最も大切な能力。

それは、

”ケンカを売っていい相手と悪い相手を見極める”能力だ。悪い相手なら、命の保証すら出来ない。

南雲の言葉が真実なら、草薙は、知らず知らずに、”絶対にケンカを売ってはいけない相手”にケンカを売ったことになる。

だが―――。

草薙は体が震えてくるのがわかった。

”ここで消すことだって出来るんだよ”

その言葉と共に放たれた殺気――。

強がったが、脚が震えた。

生まれて初めて感じた、”死への恐怖”

間違いなく、ヤツは強い。

下手をすれば、南雲より強い。

いや、確実に、南雲より強い。

だが――。

草薙は思う。

強ければ強いほど、楽しめる。

それが、ワイのケンカや。

だからこそ

ヤツと戦いたい。

強い相手とケンカして楽しみたい。

その欲望を、草薙は抑えられなかった。

「何が何でも、ワイはやるで」

「オレは止めたぞ」

「気にすんな。必ず、ワイが勝つ」

「時間とルールは？」

「明日の祝日はさんで、明後日の体育の時間、借りるで。何でも
ありの勝負や」

その日の夜6時30分

瀬戸邸前

チャイムを前に南雲は考えこんでいた。

―どうやって、水瀬を止めるか。

その答えがどうしても思いつかない。

もしかしたら、という一縷の望みをかけた相手の家がここだった。

玄関前で考えあぐねた様子の南雲の姿を見つけたのは、買い物袋
を下げた水瀬だった。

「あれ？南雲先生」

「あ、ああ。水瀬か」

「どうしたんです……ああ」

言葉がまとまらない南雲の様子に、水瀬はすべてを察した。

「ど、どうした？」

「草薙君との件、止めたいというんでしょう？先生」

「あ、ああ。いいか？水瀬、アイツは――」

その悪戯っぽい口調に、申し出を応じてくれるかと思った南雲だったが。

「止めるっていうなら、お断りします」

「なっ！」

「一度、痛い目見た方が彼のためですよ。だから、お断りします」
さっさと玄関を開けて中に入ろうとする水瀬の肩を掴んで南雲は水瀬を止めた。

「ち、ちょっと待て！」

「？」

「み、水瀬！頼む。アイツは俺達のルールをわかっていないだけだ。それがわかれば、あいつだって」

「……もう、知っているんじゃないですか？」

「！」

「知った上で、それでも草薙君なら来ますよ。バカだから」
もう、とりつく島もなかった。

だが、草薙を失うわけにはいかない。

あいつにはまだ、可能性がある。

オレが見抜いた、あの可能性を、オレはまだ失いたくない。

「どうしても、ダメか？」

「どうしても」

「なら、ここで、オレがお前を止めるか、それとも」

「僕たちの間で私闘は厳禁。切腹モノです。それより先生。お腹空きませんか？築地でいい魚を手に入れました。新作料理の評価も聞きたいですし。どうです？」

「……わかった。他の手を考える」

「はい」

「だめです！！」

30分後、家中に綾乃の声がとどろき渡った。

広いコンサート会場の隅で届くほどの音量だ。

その声は、家中のあらゆるものをゆるがせ、水瀬も南雲も思わず耳を押さえたほどだ。

「悠理君！ケンカなんていけません！絶対ダメです！」

南雲が出した奥の手。

それは、綾乃に教師として意見を求めること。

『明日、水瀬が草薙とケンカするらしいが、瀬戸はどう思う？』

効果はてきめんだった。

怒りをあらわにした綾乃に睨まれた水瀬は、恨めしそうに南雲に抗議した。

「せ、先生……ズルい」

「先生は関係ありません！悠理君！ケンカなんて絶対ダメです！やったら、もう口きいてあげませんからね！？」

「え、そ、そんなあ……」

「これが、大人のやり方だ」

水瀬の抗議の視線を勝ち誇った目ではじき返した南雲は、鷹揚な態度で、手近にあった猪口の酒を飲み干した。

「……いい酒だな。これは」

「悠理君！約束してください！絶対ケンカしないって！じやなきや許しません！」

「……ううっ……わ、わかりました」

「決まりだな」

徳利から酒をつぎ足しながら南雲は満足そうに頷いた。

「しかも先生、それ、僕のお……」

「？」

「せ、先生！それって！」

「？何だ、瀬戸まで。なんだ？オレに出してくれたんじゃないのか」

「えっ、えっと……」

思わず顔を見あう水瀬と綾乃。

「……お前ら」

教師にじっ。と見つめられ、恐縮するあたり、まだ二人とも、ただの生徒、いいかえれば、子供だった。

「あ、あの……」

「その……」

「……まあ、いい」

南雲は酒を飲み干しながら言った。

「オレは、そこまで厳格じゃない。飲むか？」

「はいっ」

「にしても、瀬戸まで飲むとは知らなかったな」

「ほ、ほんのちよつとです。たまに」

バツが悪そうに微笑む綾乃。

「先生も、飲まれるんですか？」

「たまに、だ」

すでに”菊理姫”は空になっていた。

「……はい。”明鏡止水”もってきたよ」

水瀬が頭のタンコブをさすりさすりテーブルに一升瓶を置いた。

「ほう？」

「ご苦労様でした」

「いいえ……」

5分ほど前のことだ。

『水瀬君、お酒が終わりました』

『じゃ、お開き』

『明鏡止水がいいです』

『あれ、お婆さんの』

『もってきてください』

『ううっ。や、やだ。お婆さんに怒られ——』

ガッンッ！！

酒が絡むと人が変わる綾乃の一撃が、見事に水瀬の頭をクリーンヒットした音が響いた。

「しかし……」

封が切られた途端に、控えめながらも鼻孔をくすぐる、フルーティかつ華やかな香りを楽しみつっ、南雲は言った。

「水瀬、その年で尻に敷かれているってのは、どうかと思うが……」

「何とでも言ってお下さい……グスッ」

南雲が何かを言おうとした途端、

ピロロロロロッ

室内に携帯の着信音。

「お？」

南雲が携帯をとる。

「はい。南雲です。……ああ、理事長……はい？今、ですか？今生徒の水瀬と一緒に酒を飲んで……え？ですから、水瀬です。水瀬悠理。1年A組の。アレと酒を……」

「先生！それまじじゃないですか！？」

慌てて水瀬が南雲に言った。

「え？だって、水瀬、お前と酒飲んでるのは事実……」

南雲の酔った頭もそこでもいい加減、気づいた。

「えゝ！？い、いいいいえ！！！！理事長！間違えました！正しくは、水瀬の親とです！理事長！りじちよおおおおおっ！！！！！」

すでに切られた携帯への南雲の絶叫も虚しく……。

休み明け

明光学園

「……なるほど、ね」

校内掲示板の前に、美奈子があきれ顔で綾乃から経緯を聞いていた。

「せいぜい、南雲先生が綾乃ちゃんの名前を出さなかっただけでもよしとしなくちゃ、ね」

「何だか、申し訳ない気がします」

「草薙君も、なんだかやる気なくしたらしいし」

「ケンカがなくなっただけでも、私はよかったかな、と」

綾乃と美奈子の見る掲示板には、一枚の紙が貼り付けられていた。

” 告知

以下の者、教職の身でありながら、生徒と共に飲酒をした廉で3日間の自宅謹慎処分とする。

1年A組担任 南雲敬一郎

以下の者、未成年飲酒の廉で、同じく3日間の自宅謹慎処分とする。

1年A組 水瀬悠理 ”

綾乃のお願がせ体験搭乗記 その1 水瀬1年次7月頃（前書き）

×まじめに

○はじめに

でっち水瀬より。

今回のお話は、「緑ちゃんの憂鬱」全二話の少し前という時間設定になっています。

「美奈子——」は、時間設定がかなり曖昧なのが持ち味（↑ヲイ）ですが、念のため。

綾乃のお願がせ体験搭乗記 その1 水瀬1年次7月頃

某月某日

皇居

皇室近衛騎士団メサイア第三レベル格納庫

「うっわーっ」

綾乃がそれを見た第一声が、これだった。

その足下に立ち、てっぺんを見ようとすれば、後ろにひっくり返りそうになる。

全高は、確か32メートルだったかな？

綾乃は、事前に受けた説明を思い出した。

「MDIJβ-604。『水龍』です」

横にいたこの施設の関係者が綾乃に説明する。

綾乃は、撮影スタッフと共に、その人物が広報課の山本という名だと挨拶されていた。

「近衛でも特殊騎扱いです。海外のそれと比べても、かなり高性能騎なんですよ？」

「あれ？これだけ白いんですか？」

綾乃がいるのは、近衛騎士団メサイア格納庫の中だ。

巨大な格納庫の中には、メサイアが居並んでいる。

日本で普通に生きていれば、絶対見ることが出来ない光景が目の前に広がっていた。

生徒会長の四方堂先輩なら失神モノだろうなあ。と、綾乃は意地の悪いことを考えたものだ。

さっき途中で見たメサイアとは少し離れた別の施設に格納されている、その騎を見た綾乃が疑問に思ったのは、そのメサイアの色。さっき並んでいたメサイアの色は、確か濃紺に近い色だったが…

…。

「ああ。あれですか？あれは通常騎でして。部隊や状況によって色を変えることもありますよ？」

「こっちは、違うんですね？あれ？」

よく見ると、同じような白いメサイアが何騎も並んでいるのが綾乃の興味を引いた。

ただ、ほとんどが組み立て中らしく、ほとんどが、体の一部が欠けている状態だった。

「白いのがたくさん…この、水龍って子のお友達ですか？」

「え？」

山本は、驚いた顔で綾乃を見た。

「あ、すみません。変なこと言って」

「いえ」山本は慌てて手を振って否定した。

「メサイアコントローラーの子達も同じようなこといいますからね。あ、すみません。ここではご遠慮下さいね？」

カメラマンの小林がカメラを動かす仕草をただで止めが入る。

「カメラはすぐにお渡ししますけど、それだけはどうか」

スタッフの一切の機材は、後ろにいる近衛兵の監視下にある。

スタッフも契約上、何より、銃を持った近衛兵とのめ事などは願ひ下げだった。

「了解。でさ、あれが「皇龍」って奴？」

小林の指さした先は、向かい合って立ち並ぶ白いメサイアの奥。そこには、ライトに照らされて鈍い金色に輝くメサイアがいた。

天皇専用騎「皇龍」だ。

「はい」

「で、あの横のシートで囲われたのは？」

そこには、騎体が推測できない程、シートやカバーに覆われたメサイアとおぼしき物体があった。

「あれについてはお答えできません。ご了承下さい」

「あつ、そ」

「ここはそういうところですから」

綾乃達がここにいる理由。

それは綾乃の仕事。

そして、近衛兵団のイメージキャラを向こう10年タダで引き受けたことになっている綾乃の初仕事。

それが、近衛兵団隊員募集のポスター撮影。

何枚か撮影される中で、最もインパクトが期待されているのが、この水龍を使った撮影。

水龍の片手を、その目元まで持ち上げ、その手のひらに綾乃が乗る。

といった、いわば「美少女とメカ」の黄金則に乗っ取ったといえる構図だ。

当然、撮影される綾乃も、ステージ衣装ではない。

今回は、近衛右翼騎士の制服を凛々しく身につけている。

ちなみに、後で同じ構図で、メサイアコントローラーの戦闘服と騎士のプロテクトアーマーでも撮影する予定だ。

どれが採用されるかは、綾乃でもわからない。

ただ、この制服が一番、綾乃は気に入っていた。

「さて。ここでの注意事項はもうたくさんでしょう。機材をお渡しします。準備に入ってください」

各所から、整備兵や騎士達が遠巻きに見つめる中、撮影スタッフが準備に入る。

「各整備兵に通達！ぼっとしているな！いいか！？握手だの記念撮影だの、サインだの絶対禁止だ！バカやらかしたら、海イたたき込むぞ！」

スピーカーから警告じみた通達が響き渡る中、綾乃は無理を承知で、メサイアのコクピットを見せて欲しいと願い出た。

「コントロールルームならいいでしょう。でも、くれぐれも写真撮影だけは」

「わかっています。っていうか、私、カメラ持ってませんし」

「ああ。そうでした」

クスクス笑いあう山本と綾乃は、リフトでメサイアの頭部まで上っていた。

周囲では、近衛兵の監視の元、撮影スタッフがカメラやライトの設置を急いでいる。

経験から、まだ時間的余裕はあるのがわかる。

ガコンッ

不意に音がして、リフトが止まった。

「うっわー。高いですねえ」

「ビル3階位に相当します。騎士はここまで飛び上がって乗り込むことがあるんですよ？」

「本当ですか？」

下をのぞき込むと、足下がすくむ。

慌てて視線を前に戻した先に、H・M i n a s eと書かれたプレートが張られているのを、綾乃が見つけたのは偶然のことだ。

それが、この騎のメサイアコントラーの名前だということを、綾乃は知らない。

「みなせ？」

「どうしましたか？」

「はあ。クラスメートのお友達に同じ姓の子が」

「ああ。悠理君ですね？」

「ご存じなんですか？」

「この水龍は、そのご両親の騎ですよ」

「えっ!？」

思わず居住まいを正す綾乃の姿に、山本は苦笑しつつ言った。

綾乃が、二人の息子の婚約者であることは、近衛関係者なら公然の秘密、むしろ常識だ。

「気になりますか？」

「はっ、はあ……」

「そんなものですかね。……さて、少し離れていてください」

山本はそういうと、水龍の頭部装甲の一部を開き、出てきたコンソールを操作する。

バシュッ

空気が漏れるような音がして、装甲が大きく開いた。

「ここがメサイアコントローラー、つまり、騎士のメサイアの操縦をサポートする任務につく隊員達が搭乗する所です。略してMC
L」

「へえ」

複合装甲をくぐり、中をのぞき込む綾乃。

薄暗い中、あちこちに配置されたパネルやスイッチ類のぼんやりとした灯りが見える。

少なくとも、山本にはそう見えた。

というか、山本は綾乃の横顔に見とれていて、コクピットの状態に何ら関心を払っていなかった。

「意外と、シンプルでしょう？」

そして、山本は、綾乃が奇妙なことをしているのに気づいた。
にこやかに、小さく手を振っているのだ。

「瀬戸さん？」

「え？あ、申し訳ありません」

慌ててハッチから体を出す綾乃。

「いえ。どうしたんですか？」

ハッチを閉めつつ、山本が尋ねた。

「あ、可愛い女の子が手を振ってきたんで、思わず」

バツが悪そうに笑う綾乃だが、山本にとって驚くには十分だった。
「瀬戸さん？」

「す、すみません、変なこと言って」

「山本さん」

無線から驚きと困惑のまざったような声がした。

格納庫内のメサイアを管理するハンガーコントロールからだ。

「どうした？」

「困ります。さっき、水龍のどこいじったんですか？」

「？ハッチを開けただけだが？」

「水龍のMCLのステータス・パワーが、一時的に入りました。うそ言わないでください」

「え？い、いや、本当にハッチしか操作していないよ」

「……本当ですか？またヘンにいじろうとしてませんでした？山本さん、いろんな方面から疑われてますよ？今回だって、広報なんて嘘ついて」

「この件ばかりは完璧に潔癖だ。なんなら、ログ調べてくれてもかまわん」

「……えっと、ハッチ開いた際、何か変わったことは？」

「綾乃ちゃんがのぞき込んだくらいのことだが……まさかな」

高レベルのメサイアコントローラーになると、コクピットに入っただけでシステムが起動体制に入ることがある。

ごく希なことだが、しかし……。

「さっきのこともある……か」

山本はつぶやくように言った。

「はい？」

「いえ。こっちのこと」

そして、事態は起こった。

「はい綾乃ちゃんそのまま！」

高さ25メートル近い高さに登っての撮影だ。
少し視点をずらせば遠く離れた地面がみえる。

誰でも、見えないように命綱をつけてもらったり、万一に備えて
何人も騎士の人が見守ってくれているとわかっている、どうしても
顔が恐怖で引きつってしまうだろう。

気合いでそれをねじ伏せるあたり、綾乃もまた、プロだった。

フラッシュが焚かれ、何枚もの撮影が進む中、撮影スタッフが知
らないところで、綾乃の立っている「水龍」を巡って、各方面が大
変なことになっていた。

「あ、あれ？」

最も最初に、その事態に気づいたのは、MCLで水龍をコントロ
ールしていた春日少佐だった。

現在の水龍は、ハンガーに固定されており、綾乃の立つ右腕以外
全ての間接がロックされている。春日の仕事は、右腕の操作と撮影
中の水龍の監視。ただ、それだけだった。

今、次々に間接のロックが解除され、エンジンがアイドリング状
態から稼働状態へ出力を上げていく。

ただし、春日は何もしていない。

というか、元に戻そうとして、水龍に拒否されていた。

『コントロールより春日少佐！何をしている！』

「わ、私、何もしていない……“さくら”！一体、どうしたとい
うの！？」

目の前の精霊体に驚きを隠せない声を上げる春日だったが、目の
前の精霊は、悲しそうな顔で春日に語りかけた。

（お願い。この女の人を……お母さんを、あの子に会わせてあげ
て）

「あ、あの子？、だ、誰のこと？」

（お願い）

綾乃のお願がせ体験搭乗記 その1 水瀬1年次7月頃（後書き）

でっち水瀬より

メサイア……何のことかわかんない方ばかりでしょう。

いずれ、解説をアップします。いずれ……。

元のイメージは、FSSのMHとガンダムのMSそのものです。

近衛騎士団Ⅱミラーージュ騎士団

のイメージ図式は、以前も明らかにしている所ですし……。

ちなみに、メサイアのイメージは……。

「白龍」Ⅱ「LED」

「水龍」Ⅱ「シュベルター」

「皇龍」Ⅱ「KOG」

「幻龍」Ⅱ「ルミナス（カルバリーR）」……ただし、騎体カラー違います。近衛の標準騎がこれになります。

って所です。好き勝手書いてごめんなさい。イメージ掴んで欲しいだけなんです。って、永野センセイ、ごめんなさい……。ちょっと続編書いてください。

綾乃のお願がせ体験搭乗記 その2 水瀬1年次7月頃

当然、綾乃達もその異変に気づいていた。

何かの機械の作動音らしい甲高い金属音が鳴り響き、居合わせた整備兵達が右往左往する。

「スタッフをさがらせろ！総員退避！」

「え？きゃっ！」

足下が揺れ、綾乃は水龍の掌の上にへたり込む。

そして、綾乃を護るように左腕が右腕の上に覆い被さると、

水龍は、ハンガーから降りた。

山本が戻った時、ハンガーコントロールは大騒ぎになっていた。メサイアが暴走していることを、彼ら自身が認めざるを得なくなっているからだ。

「少佐！春日少佐！何をしている！止めろ！」

「ダメ！コントロール不能！強制停止システム作動しません！さくらが！」

通信越しの春日の声が涙声になっている。

「さくら！やめなさい！何をやっているかわかっているの！？…え？だから！それと何なの！？わかるように説明なさい！あーんっ！もう始末書書きたくないよおっ！！」

「少佐、さくらは何と言っている？」

「あの子に、お母さんに会わせてあげてって！何のことかわかりませえん！（号泣）」

「あの子？お母さん？」

精霊体にとって、「あの子」とは、仲間のメサイアの精霊体の中でも年下の存在、つまり、自分より後に生産された精霊体を指し、

「お母さん」とは、専属レベルのメサイアコンローラーを指す。それはわかっているけど、どの騎体の、誰を指しているのか、山本には思いつかなかった。

「とにかく止めろ！緊急事態だ！待機中の騎体を出せ！」

「ダメです！動きません！」

通信兵がとんでもない報告をしてきた。

「どうということだ！？緊急事態に備えて待機中だろうが！整備は何を――」

「精霊体がコントロールを拒否しています！」

「はあっ！？」

メサイアの精霊体は、自己の意志を持つ。

しかし、コントロールを拒否するなどというほど、強い意志を持つものではない。

少なくとも、山本達はそう教わってきたし、そんな意志を示されたこともない。

「ど、どうということだ？精霊がストだど！？」

「水龍、動きます！」

監視モニターは、歩き出した水龍の姿を捉えていた。

「どこに行こうというんだ？そっちは奥だぞ？」

山本は、それでわかった。

「あの子」が誰なのか。

「903号騎のステイタスモニターを出せ！それと、水瀬少佐を呼び出せ、緊急事態だ！」

水龍の目指す先、それは「皇龍」の隣、カバーに覆われていたあのメサイアだ。

「えっ……きゃっ！」

不意に覆われていた左手が動き、つぎの瞬間、左手はメサイアのカバーを力任せにはぎ取った。

掌に見つけたグリップらしい所にしがみつくようにしていた綾乃

の目に、そのメサイアが姿を現せた。

「金色のメサイア……？」

隣の皇龍にそっくりだが、でも、頭の形が違う。

綾乃にはその程度しかわからなかった。というか、そんなことを考えていられる状態に綾乃はなかった。

水龍の右手は、そのメサイアの頭部に吸い寄せられるように伸び、あわせるようにメサイアの頭部ハッチが開いた。

「え？え？」

まるで、綾乃に、

乗れ。

といわんばかりのことだった。

自分の乗っている掌と、ハッチの向こうのコックピット――。何度もそれらを交互に見た挙げ句、

「えいっ！」

綾乃は思いきってハッチの中に移った。

この子の掌にいるより、安全だ。

そんな、打算の結果だったが。

綾乃を受け入れた途端、ハッチは閉まった。

「えっ、と……」

真っ暗な中、ぼんやりと照らし出されているのは、コントローラ―シートだけ。

（きつと、すぐに助けが来てくれる）

綾乃はその時を待つことにした。

それ以外、自分に何が出来るわけではない。

「おじゃまします」

なるべく、スイッチなどに触れないように、こっそりとシートに座る綾乃。

「へえ……」

意外と座り心地がいい。

ふわふわした感じで、下手なソファよりゆったり出来る。

ただ、この心地よさと暗さは、今の綾乃には大敵だった。

「……あ……だめ」

連日の仕事の疲れがたまっている綾乃は、すぐに睡魔に抱かれることになった。

——それは、夢か現実か、綾乃にはわからない。

綾乃は青白く光り輝く部屋にいた。

四方の壁全体が、青白く光る世界。

そして、“それ”は綾乃の目の前に現れた。

「——？」

それは、髪をツインテールにした年端もいかない少女。

綾乃が一瞬、彫像かと思ったのは、少女が水晶の柱の中に埋め込まれていたから。

下半身と両腕は、水晶の柱の中に埋まっていて見えない。

「？」

彫像にしては、あまりに肌がリアルすぎる。

「……」

つんつ。

突っつくと、柔らかい。生身の女の子だ。

「——んっ」

そして、少女の端正な眉がぴくりと動く。
生きている。

「あの？もしもし？」

さらに突くと、少女は弱々しく瞼を開いた。

「あの？」

「……ママ？」

「いつ、いえ、私、そんなトシじゃありません」

由里香が聞いたら激怒モノのセリフだ。だが、少女がグズリだしたのとは関係ないはずだ。

「……グスッ」

「あ、ああっ。なっ、泣かないで？」

「だ、だって——」

「と、とにかく、こんなヘンなモノをとりましょう！」

「えっ？」

「女の子をこんな所に閉じこめておくなんて、許せません！」

「ダッ、ダメ！」

水晶を無造作に掴んだ綾乃の手に、瞬間、軽く電気が走った。

「！！」

「だっ。ダメだよ。お姉ちゃん。こ、これは——」

「いいえ！」

慌てる少女を前に、綾乃は断言した。

「この程度、なんでもありません！」

ガシッ。

力任せに水晶を握る。

「あれ？」

水晶は、まるで砂のように、綾乃の手の中で粉々に砕け散っていく。

手のしびれは、まるで免疫が出来たように感じない。

「……」

「ほ、ほらっ。大丈夫ですよ？」
少女の驚きの視線をごまかすように、綾乃は次々と水晶を破壊していった。

そのころ、コントロールは上を下にの大騒ぎになっていた。

封印されていた精霊体が突然目を覚まし、メサイアの起動ステータスが作動、セキュリティで何とか完全起動が阻止されているという危険状態が発生したからだ。

主力メサイア二騎が暴走などという最悪のシナリオが、居合わせた全てのスタッフの脳裏をかすめていた。

「ばっ、馬鹿な！誰の仕業だ！？」

「903号騎、精霊体の封印が外れていきます！」

「バカをいえ！あの封印がそう簡単に——ええいつ！外部からの破壊工作の可能性は！？」

「可能性全てを割り出せ！侵入経路を割り出すんだ！」

数分後——。

「わかりました！解除操作は——」

報告の第一声を発したオペレーターの声は、次の瞬間、悲鳴になった。

「903号騎MCL内！封印解除率上昇！現在45…49…50を突破！すごいスピードです！」

「MCL内部情報を！」

「山本中佐…：現在、MCLにいるのは——」

山本の横にいた技官が小声で山本に話しかけた。

「冗談はよせ」

「しかし——」

「MCL内部のコントローラーのステータスチェックは出せるか？よし。いいか？モニターを続ける。コントローラーレベルのチェックが最優先だ」

「最悪は……」

「MCLの自爆装置、作動チェックしておけ。我々にとっては、アイドル一人の命より機密保持だ」

「はっ……はい」

綾乃のお願がせ体験搭乗記 その3 水瀬1年次7月頃

夢か現実かわからない世界で、綾乃は少女と出会った。

「あの……お名前は？」

フルフル

泣き出しそうな顔で、少女は首を横に振る。

「まだ、ないの」

「え？」意味がわからなかった。

「まだ、ママがいないから、名前、もらえないの」

「ママが、いない？」

「14号機なんかね？私より後に造られたのに、すぐにママが出来たから、由理香って名前つけてもらえたんだよ？だけど……」

「でも、お父さんが」

「パパの方がもっとヒドイもん！」

女の子はムキになって怒り出した。

「私のこと、“金メッキ”ちゃんって呼んだよ？ヤダっていったら、“金箔”ちゃんでもいいか？って！」

「……どこの誰です？娘にそんな名前つけようとするなんて」

「装甲色が金色だからだって！ペットだって、毛色が白ければ「白」、黒ければ「クロ」って名前付けるからって！」

ぐすっ

ぐすっ

泣くな。と言う方が無理かも知れない。

そんな親の下に生まれたら、普通の子ならグレる。

綾乃はそう思った。

「……」

そして一瞬、そんなことをしでかしそうな男の子の顔が脳裏をよぎったのも時へ実だった。

しかし——。

「装甲色？」

待って下さい？

綾乃は、その言葉にひっかかった。

装甲？

ここは？

そして、この子は？

メサイア

精霊

「あの……もしかして、私が入った金色のメサイアの……精霊さん？」

「……お姉ちゃん、私が誰だと思っていたの？」

「わかりませんでした」

「……ひどいよお……」

少女はぐするのを止め、怒り出した。

「みんなヒドイ！ パパは私を“金メッキ”っていうし、MCさん達まで私を“金ちゃん”って呼ぶし！ 私、女の子なのに！」

「はぁ……つまり」

綾乃は少女の怒りの訳を訊ねてみた。

「名前がない。——それが一番、気に入らない。ということで
すか？」

「そう！」

「……」

うーん。

名前名前——。

綺麗な名前がいいな。

綺麗なモノ。

あ、この前、グラビア撮影で使ったあの施設は綺麗だった。

水の都をイメージしたっていう水の時計。

水の中で鈴が高らかに鳴り響く様は、荘厳なまでに幻想的で、
本当に綺麗だった。

水と鈴——

みすず
「……水鈴」

不意に、ポツリと綾乃が呟いた。

「え？」

「水鈴って、ダメですか？」

「みすず——？」

少女の驚いた表情は、すぐに悲しそうな顔に変わった。
フルフル。

「……いいよ。でも、ダメ」

「？」

「名前は、ママじゃなきゃ、つけられないの」

チラリと綾乃の顔をみた少女は、恐る恐るという顔で言った。

「——お姉ちゃん、私のママになってくれる？」

「え？……ええ。あなたがよろしければ、名付け親になってあげ
ます」

「本当！？」

「え、ええ……迷惑にならなければ」
「やったあ！」

■ハンガーコントロール

ここに居合わせたスタッフ達が、903号騎と呼ぶメサイアのス
テイタスマニターは、ある文字で埋め尽くされていた。

「水鈴？」

「すいれい？」

「みずすず？」

「みずりん？」

「なんて読むんだ？」

「賭けるか？」

「読み方なんてどうでもいい！」

山本の罵声が、スタッフ達を仕事へ復帰させた。

「どういことだ!？」

「誰かが903号騎に名前つけちまったんですよ！」

「名付けを!？」

「そうに決まっています。903号騎が喜んでるんですよ」

「903号騎のMCLステイタスはモニター出来てるな？」

「精霊体コンタクト同調率89%を超えています。並じゃないで

すよ……これ」

「89%？ランクは？」

「AAAで効くと思いますか？」

「水鈴水鈴。ふんふふうん」

“水鈴”と名前が決まった少女は、鼻歌を歌いながら、綾乃の周
りを飛び跳ねていた。

「よかったですね」

「うんっ！」

「じゃ、もう、これでみんなにもちゃんとした名前で呼んでもらえるし」

「うんっ！ありがとうね。ママ！」

「……お母さんです」

「？」

「ママじゃなくて、お母さん」

「お母さん？」

「そうです。ママっていう呼び方、実は私は好きじゃないんです」
ペロッとはつの悪そうに舌を出す綾乃。

「うんっ！お母さん！」

水鈴は嬉しそうに綾乃に抱きつく。

年の程は6歳位。

まだ娘というには早すぎる気もするが、小さい子に甘えられるのは、母性本能が刺激されるのか、悪い気はしない。

そっと抱きしめながら、綾乃は水鈴の髪を撫でようとして、出来なかった。

「こらっ！」

不意に世界に割り込んできた者がいたからだ。

それは、綾乃も水鈴もよく知った人物。

水瀬だった。

「ダメでしょ！こんなに人様のご迷惑になるようなことして！」

「だってだって！」

水瀬は綾乃から水鈴を引き離すと、その小さなお尻めがけて手を振り下ろした。

ペチンッ

軽い音が辺りに響く。

「痛あい！」

「さくらや周りの子まで巻き込んで！こんな騒ぎ起こして！」
「知らないもんっ！」

「連帯責任！金ちゃんもとる！」

ペチンッ

「うわーんっ！私、ちゃんと名前あるもん！」

「僕が考えてあげたでしょ！？」

「あんなのヤダもん！」

「贅沢いわない！」

ペチンッ

「えーんっ！やだもんやだもんっ！」

パンッ

空間の全ての音が、その破裂音にかき消された。

綾乃が、水瀬をひっぱたいた音だった。

「……え？」

思わず、上げた手を頬にあて、動きを止める水瀬。

その視線の先には、顔を真っ赤にして怒っている綾乃がいた。

「……」

「あ、あの、綾乃ちゃん？」

ぐいっ。

水瀬の耳を力一杯引っ張る綾乃。

そして、

「悠理君っ！！！」

マイクなしで広いコンサート会場の端にまで届く声量の綾乃が、渾身の力を込めて、水瀬の耳元で怒鳴りつけた。

水瀬の意識が、一瞬、遠のいた。

「小さい女の子に何をするんです！」

「あ、あの、だっ、だからね？」

「だから明後日もありませんっ！いいですか！？——その前に二人とも、そこに座りなさい！」

「わっ、私もお！？」

何故か、水鈴まで正座させられた後、綾乃の説教は延々、整備部隊が水鈴のMCLハッチの解体に成功、内部に関係者が入り込むまで続けられたという。

なお、解体にかかった時間は、整備記録によるとのべ6時間。

かかった費用は、全額、公では由忠の給料から天引きされたという。

3日後——。

「やつ、やっと終わった……」

今回の件に関する始末書書きが終わった水瀬が、ペンを握った形で固まった右腕からペンを引き抜き、机に突っ伏した。

「全く、相変わらず大変ねえ」

始末書を引き取りに来た事務官が、始末書の内容をチェックしながら気の毒そうに声をかけてくる。

「でも、いつかはきつと、いいこともあるわよ」

「ひ、人の情けが身にします」

「うん。ところで悠理君？」

「何です？」

「この精霊体の名前、「すいれい」ってなっているけど、いいの？」

「……もう、知りません。それで通してください。整備の三枝さんもいってましたし」

「ふうん？」

その翌日

「どういふことです!？」

美奈子が教室に入った途端、罵声が響いた。
見ると、綾乃が水瀬の首を締め上げていた。

「あ、綾乃ちゃん……苦しい」

「何ですか!？この“すいれい”って!？」

「な、何が違うの?」

「水鈴です! 水の鈴でみすず!」

「……へ?」

「ちゃんと聞いたじゃないですか!」

「お、覚えてない……」

その態度に激高した綾乃が水瀬を怒鳴りつけた。

「それでも父親ですか!？母親として恥ずかしいです!」

「……」 (生徒某A)

「……」 (生徒某B)

「……」 (生徒残り全員)

―以上、これを聞いた時、居合わせた生徒達が発した声でした。

この後、学校では二人が校長室に呼び出される騒ぎに発展したとか。
か。

「おい! 綾乃ちゃん呼んでこい! すいれいがゴネて調整出来ねえよ!」

「みすずだもんっ!」

整備仕事の度に綾乃が呼び出されるようになったとか。

「で、何だか知りませんが、私、こんなものにサインさせられたんです」

綾乃が付箋とシールだらけの書類を水瀬の前に出す。

「？」

そっとシールをはがしてみると、それがメサイアコントローラーとして近衛に入るといいう、綾乃の入団契約書で、しかも、契約金の項は¥0だったとか。

事態が沈静化するのに、約2ヶ月近い騒ぎになったという。

いずれにせよ、この年、903号機こと、皇室近衛騎士団総隊筆頭専用騎「水鈴」は、ようやくロールアウト。

その専属MCに、極秘ではあるが、綾乃が指名されたのは、揺るぎのない事実である。

はっぴーばーすでい！ 水瀬1年次7月（前書き）

「美奈子ちゃんの憂鬱」シリーズ短編の第一号はこの作品です。元ネタとなったPS2の「Love Songs」の影響が……ないです（^^）

はっぴーばーすでい！ 水瀬1年次7月

7月9日火曜日 桜井美奈子の日記より

瀬戸さんの誕生日。

せっかくだからって、クラスのみんなでお金を出し合ってお祝いしてあげることに。

同じ事務所の子達にも口添えしてもらって、瀬戸さんが放課後まで残れるようにしてもらえたのはホントにありがたかった。

ただ、事務所の社長さんとか校長先生まで来るってのが気になったけどね。

学校、借りてるんだから目をつぶらなくちゃ。

実行委員は私と品田君、あとはクラスの有志で5人ほど。

瀬戸さんを驚かせようと思って、瀬戸さんが不在の時に希望を募ったら参加者は全部で25人。不参加者は都合がつかなかった人たちばかりで、この人たちもしきりに残念がっていたっけ。

最初、スーパ―とかでお菓子じゃなくてきちんとオードブル用意して、肝心のケーキもって話もあったけど、みんなが食べる分つてなると、やっぱりお金が足りない。

理由は簡単。

いいだしっぺの品田君だ。

「一人1万な！——なにい！？高すぎ？しゃあないな……5千でどうや？」

なんていってて、結局、

「ほなしゃあない！千円や！それならエエやろ！？」

何がエエのか知らないけどさ。

一人千円で何用意しろって？

「なんや。ポテチで十分やろ？」

綾乃ちゃんの誕生パーティだよ？これ以上評価下げたいの？

「ま、なんとかなるやろ」

その後、品田君はパーティの飾り付けだけで予算の4割を浪費した挙げ句、後のこと全部私に押しつけて行方不明になってくれやがった。

まさかジュースとお菓子だけっていうのもどうかと思うし。

とにかく、これで綾乃ちゃんの品田君に対する評価が底値になるのと、私主催のリンチパーティは確定だ。

いろいろさっ引くと、飲食に回せるのは半分の12500円。一人500円じゃ、ペットボトルとお菓子二袋がいいところだ。それにしても、やっぱり、いくらなんでもポテトだけってのも……。

どうしたもんかと思っていたら、

「どうしたの？」

不思議そうな顔をかけてきたのは水瀬君だ。

「あのね？」

私が理由を話すと、

「一人500円でパーティ……ねえ」

水瀬君も、うーん。と唸ってしまう。

やっぱり、水瀬君の神経でも無理だと思っただろう。なら無理だ。

そう思ったら、

「僕、料理作ろうか？」

「出来るの！？一人500円だよ！？大丈夫なの！？」

「大人数の料理の方がやりやすいんだよ」

当日の放課後、水瀬君は材料をもって食堂の炊事場にこもってしまった。

食堂のオバちゃんによると、朝早くから登校して仕込みをしていたという。

水瀬君は心配だけど、私達は私達でパーティの準備を開始した。文化祭みたいで楽しいってみんなでわいわいしながら飾り付けやテーブルセッティング。用意できた所で水瀬君が大きな何かがあったお盆を持ってきた。

「ケーキ、出来たよ」

そう。よく見るとケーキ。まるでウェディングケーキみたいな豪華なもの。

クリームで作られた飾りがとても綺麗で、ご丁寧に砂糖菓子の人形までついている。

「男の子の」手作りって言われても信じられない。絶対、一流のお店で一流のパティシェが作りましたって感じだもん。

「Happy Birthday」ってチョコレートの飾りがきちんとついているところがニクイ。

「お金、足りた？」心配になったからそれは聞いておくことにした。

「うん。ケーキはだいたい千円って所かな。調理室の材料、かなり借りたけど」

「……マジ？」

「ケーキなんて粉膨らませてクリーム塗っただけだから、そんなにお金かからないよ。それに、あそこの在庫管理、かなりいい加減だから」

作ってもらってなんだけど、味がものすごく心配な一言だよな。

「オードブル、いつ頃持ってきていい？温かい方がおいしいから」
水瀬君は料理に集中しているらしい。かざりつけとかには関心すら示さない。

「おい水瀬！」

秋篠君が声をかけてきた。

「料理、何が出るんだ？みんな結構興味あるみたいだぞ」

「出てからのお楽しみってことじゃ、ダメ？」

「細かい内容はいいさ。ただ、どんな感じの料理か位は教えておいてもらってもいいだろう」

「うーん。うんと、待ってね」

と、水瀬君は持っていたメモ帳に何か書き始めた。

「えっと、最初にほら、校長先生とか来るでしょ。その挨拶とかあるから、その間のつなぎで、まず前菜のスープと肉料理を出して、その後はみんなで楽しむって事だからそちにビッフェとしてビーフシチューとブイヤベース。パスタ3種類、サラダ4種類、あとは市販のフランスパンって所。」

「……お前、料理何人でやってる？」

「ぼく一人」

「間に合うのか？」

「うん。あ、料理運ぶのだけ手伝って」

で、始まりました。瀬戸さんの誕生パーティ。

クラッカーが鳴り響き、みんなでハッピーバースデイの大合唱。

桜井先生に合唱の音頭をとってもらうつもりだったんだけど、リハで「ハッピーバースデイ、デア、ジーザス」とか歌い出した挙げ句、「神は海兵隊より前に存在した！」とか言い出したので、丁重にこちらから辞退させてもらった。

しかたないから、私が音頭とった。

瀬戸さんもうれしさのあまり涙ぐんでいたっけ。

校長や先生のスピーチの間、ジュースとスープを料理研究会の子達に協力してもらって運んだ。

薄い色のスープ。コンソメスープかな。やっぱり、水瀬君、予算、ぎりぎりだったかもしれない。次に出で来る料理も心配。

「うわっ。薄い」ってあちこちで声が上がる。

私も席に戻ってスープに手を伸ばす。

温かいけどホント、一口飲んだらお湯を飲んでいるかと思ったほど薄い。

みんな塩や調味料を探すけど、どこにもない。

校長先生のスピーチはまだ続いている。話、好きだよね。校長先生も。

しかたないから、私も席に戻って二口、三口って飲む。

不思議。

飲むたびに何となく、味わいが広がってくる。四口目でこんなにおいしいスープ飲んだことないって位おいしさが口の中に広がってくる。

本当においしい、このスープ！

でも、このおいしさにすぐに終わる。少なすぎるんだ。

おかわりって声があちこちであがるけど、もう寸胴の中身はからっぽ。

男子生徒の中にはカチャカチャなんとかして残りを飲もうってしている意地汚いのもいたっけ。

で、ようやく校長先生のスピーチ終わり。

綾乃ちゃんの事務所の社長さんのスピーチが始まるころを見計らって肉料理が出される。

社長さん。スープの後だから、肉料理に気をとられてどう考えて

も準備してきたスピーチ原稿とばし読みしているのがわかった。

というか、給仕している私の方が、お肉に近い分、すぐに食べた
いってという欲望と戦うハメになった。

何だろう。運んできたキャニスターのフタをあけた途端につばを
飲み込んだほどおいしそうな匂いに負けそうになった。

給仕役の子はみんなそうだろうけど、とにかく手早くお肉をお皿
にのせてみんなのところへ運ぶことだけに専念。さっさと席に着く。
社長のぶったぎりスピーチが終わったのと同時にみんなの席に行
き渡って、みんな一斉にお肉に向かう。

お皿の上から薄く立ち上る湯気と一緒に、食欲をそそるなんと
もいえない匂いに華をくすぐられて、次から次へと口の中に唾液が
わいてくる。

お肉をナイフで切り、フォークで口に運ぶ、ただそれだけの時間
が恐ろしくもどかしく感じる。

うっわっ！

ホント、それしか言葉にならないほどおいしい。

こんなにおいしいお肉、食べたことないって位、美味しい！

味の幅が広いっていうのかな。こういうの。

外側のぴりっとする香ばしさから、かみしめる度の中から半生の
肉からにじみ出る、妙に淡泊なのに、魂まで満足が広がるような肉
汁の味まで、全てが絶品。

呑み込んだ途端、次の一切れが狂おしいほどほしくなる。そうや
って次々と肉を口に運ぶ。一口ずつ至福の時を味わうのはいいけど、
一気にお皿に顔を埋めちゃいたい衝動に負けそうなほど。

これ、本当に水瀬君が作ったの？

みんな、次に何が出てくるかってそわそわしてる。

「野郎、やりやがったな」

不意に隣に座っていた羽山君がつぶやいたのが聞こえた。

「どういうこと？」

「料理で長いスピーチ潰しやがった。本当ならスープを校長のス

ピーチの前に出せば完璧だったろうな。知ってるか？あの社長、ス
ピーチ魔だってこと」

詳しくないけど、確かに用意された原稿は相当な長さ。あれ、ま
ともにしゃべられたらたまったもんじゃない。

「ヘンな所で気が利くっていうか、肝心な所できかないっていう
か」

「そこが、水瀬君の水瀬君たるゆえんでしょ」

「言われてみれば違いない」

さ。本日の主役、瀬戸さんのスピーチ。

こんなにたくさんの人にお祝いしてもらったことは初めてだっ
ても感謝してくれたし、私たちも企画してよかったってホントに
そう思った。

で、ケーキの上のローソクにともされた灯を吹き消して、みんな
で瀬戸さんの誕生日をお祝いして、さ。後はご自由にご歓談くださ
いって段階……。

よく考えたら、私たち、みんな席について誰も給仕していない！

あわててブースに目をやったら水瀬君が恨めしそうな力オでら
んでいた。

平謝りに謝って、片づけを全部私たちがやることで許してもらう。
出された料理は予定通りの料理達。

心配していたケーキも……なんていいのかわからないくら
い美味しい！

口の中に甘さが広がっても、決してしつこくないし、食べ終わっ
た後はさっぱりとした感覚が口の中に残るから、いくら食べても平
気って感じだった。

本当、すごい。

これを水瀬君はあの予算でやってのけたんだ。

みんなで高級レストラン顔負けの味わいの料理を手に歓談。瀬戸さんの周りにはたくさんのレストランメイトが集まってにぎやかな時間が過ぎる。

水瀬君は、いつのまにか羽山君の手を借りて給仕に走り回っている。

聞けば、羽山君もホテルのレストランでバイトしているからこういうのは得意だという。けど、水瀬君、楽しめたのかな。

「水瀬君」

私の心配はどうやら瀬戸さん自身も感じるどころだったらしい。少し心配そうなカオで水瀬君に声をかけた

「瀬戸さん。誕生日おめでとう。ごめんね。プレゼント、用意してなくて」

「いいです。こんなにおいしいお料理作っていただいたんですから」

「そう言ってもらえるとうれしい……な」

「今度、本当にお料理教わろうかしら。教えてもらえる？」

「いいよ。いつでも言うって」

「ありがとう。じゃ、水瀬君の誕生日には、私が腕をふるってあげますね？ね。水瀬君の誕生日って何月何日です？」

周囲から冷やかしの声上がる。瀬戸さん、頬が赤いよ（笑）で、この瞬間、水瀬君の口から出た一言に、私たちは凍り付いた。

「ぼく？今日だよ？7月9日」

「……」

「……」

「……」

全員、思わずシンってなる。

いくら何でも、自分の誕生日に、クラスメートとはいえ、他人の誕生日のお祝いで給仕やつてるなんて、そんなの、あり？

その時の羽山君の言葉が全員の気持ちを代弁していたから、ここに残しておく。

「はやく言えこのバカ！」

「さてと——準備いい？」

私達は水瀬君を壇に登らせた。

みんなの手にはクラッカー。

「いつでもいいで？」

「派手にやりましょう？」

「じゃ、せーの」

私達は驚いている水瀬君めがけてクラッカーの紐に指をかけた。

クラッカーよ鳴り響け！

ここに水瀬君がいてくれることを祝って！

「ハッピーバースデー！！！」

緑ちゃんの憂鬱

この世界における最強の兵器といえは？

答…メサイア。

平均25メートルの人型兵器。

現代のいかなる通常兵器をもものともせず、空を飛び、雨霞と飛び来る機関砲弾を避け、あらゆる物を破壊してのける、まさに最強の魔法兵器。

国家間の戦争は大抵、このメサイア同士の戦闘で勝敗が決するといわれる程、圧倒的な戦闘能力があり、このため、国家元首たる者は、国家防衛のために最低数騎のメサイアを配備することが、最低限度の義務とさえ言われている。

つまり、戦場にこれが出ると兵隊の出る幕はない。

まさに、最強の兵器ー。

それは、男の子にとって、憧れの対象。

しかし、それは別に男の子に限定した話でもなく……。

放課後、生徒会室

夕暮れに染まる部屋に入った未亜の目に、一人の女子生徒が止まった。

腰まで伸ばした髪をリボンで束ね、穏和な瞳をメガネが彩る。

落ち着いた、知的な意味で可愛いタイプだ。

明光学園生徒会長 四方堂緑。

2年生、ちなみに彼氏の話はない。

「あれえ？会長、まだいたのお？」

「ええ。ちよつと、本を読んでいて」

「ええ？何？」

未亜は、彼女の背後に回り込んでページをのぞき込んで凍り付いた。

「会長、これ、何？」

「雑誌よ？」

「全部、英語？」

「ええ」

「読めるの？」

「え？ええ」

「ちなみに、この写真の、なんかゴツツイ機械の固まりみたいな
の、何？」

「あ？これ？ドイツ国防騎士団のメサイア、MDF-25“ノイ
シア”。その新型マジックランチャー発射装置の写真。改良したん
だって」

「あ？」

「すごいでしょ？MLDタイプ24。戦車の正面装甲、200キ
ロ先から貫通したって」

「はあ……あの？会長、そういうの、好きなの？」

「ええ。もう大好き！」

まるでアイドル雑誌にのめり込むような無邪気さで笑みを浮かべ、
雑誌を抱きしめる緑に、未亜は少し引いた。

「そっかあ。あ、会長も騎士なんだから、じゃ、将来は」

いいかけて、未亜は黙った。

緑の騎士ランクを思い出したからだ。

「ごめんね？あの、日本でメサイア乗れるのって」

「皇室近衛騎士団。私みたいな最弱レベル、騎士崩れなんて相手
にしてくれないわ。やっぱり、好きってだけじゃ、現実は、ね？」
寂しそうに笑う彼女の顔に、バツの悪い思いをした未亜が、なん
とか話題を変えようとして言った。

「あ、そういえば、綾乃ちゃんが近衛のマスコットキャラになっ
たの、知ってる？」

「あっ、そうなんだ」

いいつつ、彼女は引き出しから袋を取り出し、机の上に置く。

「うん。この前、何か、メサイア絡みでトラブルがあったみたいだけど。ま、10年間タダ働きってのも考えると、なんだか可哀想な気もするけどね」という未亜に、

「お小遣い、とんでもないことに使う娘もいるみたいだけど?」

何故か声色が冷たくなる緑。

「だ、誰のことかなあ……」

アハハッと笑う未亜は、なぜか後ずさって部屋から出ようとした。

「信楽さん?このテの盗聴器って、高いんでしょ?」

袋から取り出したのは、小型のコンセント。

「あ、あはははっ。ちえっ。バレちゃってたか」

そう。生徒会のスタッフでもない未亜がここにいる理由。

それは、しかけた盗聴器が動かなくなったことの調査。

どうやら、動かなくなったのではなく、動けなくされた。ことは確からしい。

「ダメよ?生徒会の会議っていつでも、他の生徒に知られたくないことだってあるんだし」

「会長おっつ。ごめんなさい。見逃して?」

両手をあわせて拝み出す未亜だったが、緑は冷たかった。

「もうっ。ダメです。これは生徒会として没収します」

「えーっ!?まだローン残ってるんだよお!」

「ダ・メで・す」

「うー」

ほおをふくらませる未亜の目に、さっきの雑誌が映る。
そうだ。

「……ねえ、会長、取引しない?」

「取引?」

「会長、喜ぶと思うんだけどなあ」

「私が?」

「そ。メサイア好きなら絶対」

「ダメです。私、メサイアのプラモデルはほとんど持ってますか

らね？他のアイテムも」

「うわ……オタク」

未亜がポツリとつぶやいた言葉に緑の目線が厳しくなった。

このままでは交渉にならない。

「違うよお」

「じゃ、何？」

「メサイア、間近で見るチャンスっていえばわかる？それと引き替え」

「え！？」

眼をランランとさせて椅子から立ち上がる緑。

「し、信楽さん！それって！！」

ガガガッ！！

未亜めがけて、なんだかヨダレすら垂らしているように見える緑が、事務机を押しながら迫ってくる。

ちなみに、事務机の重量は50キロを軽く越えている。

それを、いわば太股の動きだけでゴキブリのように自分の所まで動かしてきたのだから、未亜でなくても逃げたくなるだろう。

だが、まだローンが残ってる商売道具を見捨てるわけにはいかなかった。

「う、うん。知り合いが芸能関係やってるでしょ？そのツテでもらったんだけど、私、興味ないから……」

「ま、まさか！？」

ついに緑が事務机ごと、未亜を押さえつけた。

「そ。近衛軍火力演習のチケット。S席最前列だよん？」

近衛軍が年一回、公開で実施する総合演習が火力演習。

メサイアが参加する日本で唯一の演習なだけに、メサイアが見たというファンの申し込みが殺到する関係で、倍率は恐ろしく高く、緑も、何度も申し込んで毎年抽選から外れている。

いわば、緑の夢のチケットだ。

それも、いわゆるVIP用のS席最前列。

それが目の前にちらつかされたものだから……。

「持って行って！何ならどこに仕掛けてもいいから！」

袋ごと盗聴器を差し出す緑の眼は、尋常でない光を放っていた。

「会長……いいの？」

「いい！メサイアのためなら、校則も規律も人道もへったくれもないわ！」

（こういう人が、生徒会長でいいのかなあ……ウチのガッコ）

それが、二ヶ月前のことだった。

その日、緑を衝撃のニュースが襲った。

思わず失神しそうになるほど、緑を驚かせ、そして驚喜させたもの。それが、近衛の新型メサイア導入とそのお披露目のニュース。

皇室近衛騎士団。

極東最強の騎士団のメサイア。

それは、日本の科学・魔法技術に裏打ちされた世界最高レベルのメサイアのこと。

その最新鋭騎のお披露目だ。

ファンならば絶対ー。

「なんとしても直にこの眼で見たい！」
ということになる。

緑とて同じだ。

しかし、Web上での掲示の一文に、緑は頭を抱えることになった。

「公開は、2ヶ月後、マスコミおよび近衛軍関係者、その家族等に限定して行われる」

緑は悩んだ。

行きたい。

行ってみたい。

でも、私はマスコミにも、近衛にも知り合いはいない。

「えーっ？ダメだよお」

未亜ちゃんにも断られた。

「あのね？マスコミってのは、取材する人の意味」

「アルバイトの口、ない？」

「ないよお。こういうの、身元調査厳しいんだよお？学生なんて許可おらないよ」

「……」

何とか、潜り込む方法はないか。

緑は数日、そればかりを考え続けていた。

だが、妙案が浮かばない。

そして、ある日の昼休みー。

「やっぱ、就職するなら近衛だろ」

生徒会室のいた緑の耳に、そんな言葉が聞こえてきた。

思わず、誰の言葉か無意識のうちに探してしまう。

生徒会書記の工藤と梨本だった。

共に騎士だ。

「ま、俺たちは無理だな」

工藤が笑いながら否定するが、梨本はあきらめきれないという顔

だった。

「だけどよお」

「無理無理、縁故でも採用されねえって話じゃねえか」

「当たり前だろ？でもさ、一年戦争のせいで人手足りてねえから、採用枠広げたって噂だし、その証拠に、今年の一年、誰だっけ？えっと、羽山と秋篠っての、確か近衛入りの噂あるだろ？それにホラ……えっと」

梨本は言った。

「ほら！一年にいるだろ？水瀬って。あいつのオヤジ、近衛の幹部だし」

緑が生徒会室を飛び出していったのは、その瞬間のことだった。

一年A組教室

乱暴に開いたドアに、クラスに居合わせた全員の視線が集中する。

「水瀬君、いる？」

息を切らせてきたのは、緑だ。

（うっ、お昼、食べ過ぎたかな。気持ち悪い）

「あれ？会長、どうしたの？」

学食からの戻りらしい未亜が、ジュース片手に声をかけてくる。

「顔色悪いよお？吐きそうって顔してるし……どうしたの？」

「あ、信楽さん。水瀬君は？」

「え？うーんと、席外してるね。トイレかな？」

「じゃ、伝えておいて。放課後、視聴覚室に来てって」

「う、うん……」

「大切な話だから、お願いね？」

緑は、胃薬をもらいに保健室へ、口元を押さえたまま、歩いていった。

「……会長？」

「四方堂先輩が？」

未亜のご注進を耳にした綾乃の眼の色が変わった。

「そ。なんだかわかんないけど、水瀬君呼びつけてた」
これだけで未亜には数千円の利益になる。

綾乃が構内に張り巡らせた、水瀬悠理浮気監視システムの一環だ。

「四方堂先輩の態度は？」

「なんか、ものすごくそわそわしてて」

うーんと。思い出したように、未亜が言った。

「そうそう。吐きそうになっていた」

「……」

「あの、綾乃ちゃん？」おそろおそろという顔で声をかけるのは美奈子だった。

「変な妄想、しないでね……？」

「うふふっ。水瀬君？お姉さんがお・し・え・て・あ・げ・る」

「先輩……」

美奈子の願いも虚しく、綾乃の脳内では、いつもの通り、綾乃ちゃんの妄想劇場が禁断の濡れ場を演じていた。

きっかり5分後、

「未亜ちゃん、悠理君は？」

妄想から意識を引き上げた綾乃は、あきれ顔で自分の顔をのぞき込んでいた未亜に尋ねた。

「綾乃ちゃんが妄想にイッてる最中に逃げたっていうか、視聴覚室に行った」

「何で止めてくれなかったんですか!？」

「だって、綾乃ちゃん止めてたんだもん!」

「あの？会長？来ましたけど」

カーテンが下がっている視聴覚室の薄暗い中をのぞき込んだ水瀬

を待ちかまえていたもの、それは、鈍く輝く二つの光、緑のメガネの輝きだった。

「いらっしやい。水瀬君」

待ちかまえていた緑が水瀬に歩み寄る。

「あの、ね？私、水瀬君にお願ひがあるの」

恥じらうようにすら見える仕草。

―お父さんなら、きっと喜ぶ状況なんだろうなあ……。―

と思いつつ、しかし、水瀬には、イヤな予感しかなかった。

「全く！この前の保健室の時、二度とあんなマネしないって、血判状まで書かせたっていうのに！」

視聴覚室に向かう綾乃は、激怒のあまりか、すさまじいことを口にしていた。

廊下に居合わせた生徒達のことなんて、誰一人、目に入っていない。

「綾乃ちゃん、そんなことさせたの！？」

「はい！全文血文字で！」

ついてきた美奈子と未亜が、水瀬に同情しつつ、ひきつった顔を見合わせてしまう。

「何もそこまで……」

「綾乃ちゃん、残酷すぎ」

「ですけど！」

綾乃が二人にかみついた。

「浮気者を躰るには、体にたたき込むしかないじゃないですか！

……ああ、もう！今度は視聴覚室！？こうなったら、指の一本か二本が十本、詰めてもらいます！

「それダメ！それ何か違う！」

「でさあ、綾乃ちゃんはどこでサレたいわけ？」

「えっと、旧校舎とか、薄暗い位で人気がない所が……何を言わ

せるんですか!？」

「ありや残念。視聴覚室、先越されたね」

「まだです!」

「だからヤバイ発言、大声でしないで!」

ガラッ!

綾乃が力任せに開いたドアの向こうで、水瀬は死にかけていた。
緑が力任せに水瀬の首を絞めていたからだ。

「悠理君!」

綾乃の怒鳴り声に弱々しく救いのまなざしを向ける水瀬。

「あ、綾乃ちゃん……助けて……」

「こ、これは一体……」

驚きを隠せない美奈子と未亜だが、緑の眼には、水瀬しか見えていない。

「水瀬君、これは私の人生を決めるかもしれない、大切なことなの」

緑の意味深い言葉に、綾乃は驚いて動きを止めた。

「ど、どういうことですか!？悠理君!？四方堂先輩!？」

「水瀬君しかお願いできないの」

「だっ、だから!」

「もう、時間がないの。もう二ヶ月なのよ?」

「!？」

「私を助けると思って、ここは“はい”って言って」

「ぐ、苦しいです……」

「私に幸せを与えてくれるのは、水瀬君、あなただけなのよ?」

「……」

たまらず、コクコクと、弱々しくうなずくだけの水瀬だったが、
緑はそれで納得したらしい。

「ありがとう！水瀬君！」
感極まったらしい緑が、首が変な方向に曲がっている水瀬に抱きついた。

綾乃の目の前で。

綾乃は凍り付いたまま、動かない。

「あ、綾乃ちゃん……？」

美奈子が突いてみたが、硬直がとけない。

綾乃のアタマの中では、緑の言葉が繰り返し再生されている。

「水瀬君、これは私の人生を決めるかもしれない、大切なことなの」

――人生を決めるって、どういうこと？

「水瀬君しかお願いできないのよ」

――悠理君しかお願いできないことって？

「もう、時間がないの。もう2ヶ月なのよ」

――に、2ヶ月？

――2ヶ月って？

――2ヶ月って、何？

――1ヶ月30日で60日が、何？

そういえば、先輩、お昼に……。

「私に幸せを与えてくれるのは、水瀬君、あなただけなのよ？」

幸せ？

2ヶ月？

先輩の吐き気

2ヶ月？

幸せ？

先輩の吐き気

2ヶ月……。

その日、視聴覚室は、室内の貴重な機器と共に完膚無きまでに破壊されたという。

2ヶ月後、

公開されたのは、β級メサイア「白龍」と近衛騎士団総隊筆頭専用機「水鈴」

晴れ渡った空の元、純白と黄金色に輝くメサイアの勇姿は、お披露目に立ち会った者達を感激させるに十分すぎた。

その中のこと。

「あ、いましたよ？ 四方堂先輩」

綾乃のコントロールする「水鈴」の「眼」が、招待席からこちらに熱い眼差しを向けてくる緑の姿を捉えていた。

「どれ？ あ、本当だ」

「水鈴」のコクピットのモニターに映るその姿に、水瀬は正直、呆れていた。

「いくらつぎ込んだのかなあ？ あの買い物の山」

「大人買っているのかしら？ ああいうの」

販売ブースで買いあさったんだろう、近衛やメサイアのアイテムがぎゅっ詰まった袋が周囲を埋め尽くしている中に陣取る緑のその眼は、感動のせいか涙で潤んでいる。

「あ」

突然、袋の山が崩れ、周囲の観客の上に崩れ落ちた。

メサイアの眼は、その一部始終を捉えていた。

アイテムをかき集める緑が、周囲に平謝りに謝っている姿も……。

「記録、とれてる？」

「は、はい……」

水瀬の耳に、綾乃のクスクス笑う声が聞こえてくる。

「全く……人騒がせだよね？先輩も」

視聴覚室での騒ぎを思い出して、ため息をつく水瀬。

「それだけ熱心、ということですよ」

「綾乃ちゃんだけ暴れていたくせに」

被害は、当然、全額を綾乃が負担。

といたいだが、

相手はトップアイドル。

騒ぎにしたくない学校側が、一方的に、「事態は水瀬の魔力の暴走」ということで片づけてしまい、数日後、水瀬家から寄付の名目で、数百万円が学園に支払われたという。

「毎回毎回、何を考えているんです！」

「えーん、ごめんなさいい！」

綾乃が、事情を知った母からこってり絞られた挙げ句、半年間の小遣い停止を言い渡されたこととか。

「この、おおたわけえっつ！！」

「僕のせいなんですかあっつ！？」

水瀬が、この件に絡めた息子の素行について、学校からさんざん苦情を言われた父に怒鳴られた挙げ句、数ヶ月にわたって仕送りを止められたり、困り抜いた挙げ句、綾乃の家での居候を再会することになったこととか。

このようなことは、本筋とは関係のない、余計なことだ。

少なくとも、水瀬にそこまで迷惑をかけた本人は、赤面しつつ言った。

「わ、私も、熱心だということです」

「何に？」

「言わせないでください！」

綾乃の座るMC^{メサイア・コントローラー・ルーム}Lでは、「水鈴」の精霊体が、不思議そうな顔で綾乃を見つめていた。

緑ちゃんの憂鬱（後書き）

はい。この後、「一年戦争秘録外伝 後継者達」へと続きます。
これ書いた時、綾乃はMCメサイアコントロールの能力有って設定だったんですね…
…今になっては……うーんm（　　）m

シヨタコンお姫様はお好きですか？ 水瀬1年次7月頃

桜井美奈子の日記より

〇〇月凸凹日

水瀬君が怯えている。

授業には出ても、居眠りしない。

授業が終わった途端、姿を消す。

お昼ご飯でさえ……。

水瀬君にとって「最高の楽しみ」のこの時間まで顔を出さなくなったので、さすがに心配して、みんなに心当たりを聞いてみることにした。

私の質問に、

羽山君、秋篠君、未亜……。

居合わせた全員の視線が、一人に向かう。

「……あの、何で、私の顔を見るんですか？」

「瀬戸さん、健呆症？」

「……更年期障害か？」

いいすぎだよ。羽山君。

中身の入ったジュースの缶をともに喰らった羽山君が目を回したけど、さすがに私も、同情するわけにいなかった。

「――あー。ヒデエ目にあった」

保健室で簡単な治療を受けながらボヤク羽山君。

「ことある事に水瀬君が地獄見てるんだから、少しは学べばいいのに」

「落とし前は水瀬につけてもらうことにしよう。さあて、探しに行くか」

「悠理君？」

羽山君の鼻に絆創膏を貼っていた三千院先生が、ベットの方に声を掛けた。

「悠理君？ お友達が来てるわよ？」

「ぼ、ボクはいません」

「いるじゃんかよ！」

羽山君が乱暴にベットから布団を引っぺがす。

布団の下には、確かに水瀬君がいた。

「さぼってんじゃねえ！ 何してやがる！」

「うううっ……せ、先生……隠してくれるって」

「対象に、この子達は入っていなかったもの」

「とにかく行くぞ！」

「お願いだからボクを行方不明にして！」

「わけわかんねえこと言ってるな！」

「ラーメンでも何でもおごってあげるから！」

「はあ……？」

「お、お願い！ せ、せめて、午後だけでいいから！」

両手を合わせて拝み出す水瀬君に、私と羽山君は思わず顔を見合わせた。

「――つまり、お前は、午後からの外部視察に関わりたくない。

「……」

「そう」

外部視察――

明光学園は、在籍する生徒達の特殊性から、各方面からの視察を受けることがある。

そして、今日、午後より視察に来るのは……。

「お前、ラムリアースに何か因縁でもあるのか？」

「べつ、別に国単位で怨恨はないよ……」

「ルシフェルの件もあるし、戦争の時の因縁じゃねえだろうな」

「……コクン」

「おいおい」

肩をすくめて「お手上げ」の仕草をする羽山君。

「お前、殺し合いの中での因縁沙汰を学校に持ち込んでくれるなよ」

「こ、殺し合いの方がまだ気が楽っていうか……」

水瀬君、もう泣き出している。

「お、お願い！お願いだから！友達を助けると思っ……！午後だけ……！午後だけは！」

「……わかった。高くつくぞ」

ため息混じりに席を立つ羽山君が言った。

「ただ、保健室以外の方がいい。サボっていると疑われたら真……先に来るのはここだ」

やっば、友達思いで、面倒見いいんだよね。羽山君。

「ほ、本当！？」

「二言はないが……」

「じゃ、この前、品田君から、HなDVD買っていたの、涼子さ

んには黙っていてあげる！あの“巨乳看護婦”何とかいうヤツ！」
「殺すぞ！」

ラムリアース帝国

地中海にある騎士発祥の地とされる大国で、騎士達にとっては聖地に近い国とされる。

ヨーロッパで最も超帝国の遺産に恵まれている国だから、私としては、観光名所ばかりが頭に浮かぶ。

で、今日、学校を訪問するのは、来日中のこの国のお姫様。

ナターシャ・レイソン・コーダンテさん。

次期皇帝にして、聖導騎士団長。一年戦争でも大活躍した人だ。

未亜に写真を見せてもらったけど、華やかな感じの美人さん。

本当に、ヨーロッパのお姫様って感じの人だ。

水瀬君……なんで、そんな人を怖がるんだろう。

黒塗りの車で来校したナターシャさん（お姫様に「さん」は失礼かな？ま、いいや。日記だし）。

当然、一人で来るはずはなく、大使館の関係者やマスコミまで、いろんな人が一緒に来る。

剣を下けている人は、きっと騎士団の関係者なんだろう。

ナターシャさんの周り、かなり騎士が多いみたい。

でも、生徒達が、最も注目したのは、何より日本側の一人。

あえば・くすは
饗庭樟葉

ナターシャさんと違い、物静かな深窓の姫君って感じの人。さすがに先代の天皇の妹の血を引く、いわば宮家の人ってところかな。にもかかわらず、皇室近衛騎士団副長兼近衛兵団長代行、近衛中将。一年戦争では、魔王の親衛隊長の首級を上げた、ルシフェルさんと並ぶ武勲の持ち主。

つまり、今、この学園で、ルシフェルさんを除いて一年戦争で活躍した女性騎士のトップが顔をそろえたことになる。

こんなことは滅多にない。

だからこそ、戦争での二人の活躍に興奮した経験のある生徒達は、二人を招いての講演を学園祭並の期待で待ち望んでいるのに……。

私達のクラスの騎士養成コースの生徒達は、体育の見学を受けることになったけど……。

なぜか、マスコミが一時的に下げられ、樟葉さん達自身も、私達から少し離れる。

そのワケは……。

「く、樟葉さん！ いっ、痛い！」

「うるせえ！ この私が来てるってのに！ 保健室で寝てるたあい一度胸だ！」

怒り心頭という顔の樟葉さんに首根っこを鷲掴みにされ、廊下を引きずられてくるのは――。

「水瀬君、捕まったみたいね」という私に

「お気の毒様……」と手を合わせる瀬戸さん。

水瀬君の姿に、ラムリアース側がザワツとなる。

間違はなく、水瀬君の姿に驚いている。

対する水瀬君は顔面蒼白だ。

そして――。

「悠理ちゃん！（＾Ｏ＾）」

「ひっ――」

絶叫とともとれる歓喜の声と共に水瀬君に抱きついたのはナターシャさん。

何か、頬ずりなんてしてる……。

それをきっかけに、ラムリアースの騎士の人達は何人も水瀬君に声を掛け、似たように抱きついたり、キスしてる女騎士までいるし――。

まるで、古くからの戦友に再会したって感じの喜び。

「やっぱり、一年戦争の絡み、なんだろうなあ……」

「うん……綾乃ちゃん。押さえてね」

横で殺意満々の瀬戸さんを、珍しく未亜が止めに入っていた。

視察は順調に行ったらしいけど……。

「あ、博雅くん？」

体育の授業が終わった後で、秋篠君に声を掛けてきたのは、樟葉さんだった。

「ちよつといい？」

水瀬君の友達

その秋篠君の説明に、樟葉さんは、他言無用を条件に同席を許してくれた。

講演の準備で未亜がいないことを、神様に感謝。

「はあっ……まいったわ。あのバカ息子にも」

樟葉さんが、席に着いた途端、そう言ってため息をついた。
長いストレートの黒髪といい、涼やかな目元といい、本当に美人だ。

結構、ルシフェルさんって、大人になったら、こんな感じかもしれない。

「あの、水瀬、どうしたっていうんです？あいつがあんなにパニックになるのは……」

ちらりと瀬戸さんの顔を盗み見る秋篠君。
気持ちはよくわかる。

「ナターシャはあの子にとって――」
「？」

「ま、トラウマってヤツね」

「はあ？」

「ほら、知らない？ナターシャの裏の趣味」

「あ、あの……まさか、シヨタ……」

知っているのは私だけだったらしい。

ナターシャさん、実はある側面でかなりスキャンダルを持ち主なんだ。

曰く、シヨタコン。

年下の小さい男の子に異様なまでの執着心があるらしく、ベットに引きずり込んだ男の子の数は、両手両脚の指じゃ足りないと言われる。

別名 ラムリアースの吸い取り女――

「そ。そっちの趣味。で、アレにとって、あの子はもろストライクど真ん中だったらしくてね。戦争中は大変だったんだから」

メキメキ……

何か、変な音がする。

「悠理君とは、そういう関係なんですか？」

「瀬戸さんテーブル壊さない！ ついでに、そんな怖い声ださないで！」

「……ま、あの反応から察してあげて。喜んでいないのは確かでしょう？」

収まらないのは、瀬戸さん。

もう、怖いなんてモンじゃない。

演壇上のナターシャさんを睨みっぱなし。

さすがというか、ナターシャさんは知らん顔していたけど……。

講演が終わり、とっさに逃げ出そうとした水瀬君を捕まえたのは、何と瀬戸さんだった。

「あ、綾乃ちゃん！？」

「……」

グイッ。

瀬戸さん、何と、水瀬君の腕にしがみつくように寄り添ってきたんだ。

周辺の生徒からは驚きの声上がる。

しかし、瀬戸さんの視線は――。

今、思い出しても、あれは怖かった。

本当に恐かった。

瀬戸さん、間違いなく、ナターシャさんにケンカを売った。

水瀬君を巡って、二人の女が視線が不可視の火花を散らし続けている光景なんて、立ち会いたいもんじゃない。

無言でにらみ合う二人。

動いたのはナターシャさんだった。

クスッ

小さく笑った後、軽く手を振って踵を返した。

大人の余裕ってヤツだろう。

対する瀬戸さん、小さく唇をかみ、組んだ腕を放すと、そのまま他の生徒達に紛れて姿をくらませた。

悪いけど、瀬戸さんの敗北。

事件は、それから起こった。

最後の時間は自習。

でも、水瀬君も瀬戸さんも、教室にいない。
携帯も反応がない。

前の誘拐事件のこともある。

マスコミに紛れてさらわれでもしたら――。

私達は、手分けして校内を探すことにした。

そして――。

体育用具室。

「シーツ！シーツ！」

ガタガタ音を立てるのは、用具室の隅にある清掃用具入れ。
発見したのは私と秋篠君のコンビ。

開いた用具入れの中から出てきたのは、猿ぐつわをカマされ、雁
字搦めにロープで縛られた瀬戸さんだった。

「ど、どうしたの！？」

「や、やられました……あの女狐……！！！！！」

怒り心頭の瀬戸さんによると、瀬戸さん、「話がある」ってナタ
ーシャさんに、ここに呼びつけられ、有無を言わさずこうされたら
しい。

「敵の狙いは水瀬君です!」

私達には構わず、瀬戸さんは用具室を飛び出していった。

その頃――

保健室

「や、やつと逃げられた……」

ナターシャとの鬼ごっこを逃げ切った水瀬が、保健室のベットに倒れ込んでいた。

あの夜のベットでの恐怖から逃げられたんだ。

その安堵感を象徴するように、水瀬の髪を撫でる手があった。

「……へ？」

「はあい? (はあと)」

ナターシャだった。

桜井美奈子の日記より

瀬戸さんが、保健室のドアを蹴破った所には居合わせた。

ただ、保健室内の光景を見た瀬戸さん、ちよつとアゼンとした後、髪を逆立てながら保健室の中に入って……。

水瀬君の命乞い、そして鈍い音と共に響く絶叫。

そんな中、服を直しながら出てきたのはナターシャさん。

ここで何があったかは、楽天ブログが、1万文字を超えて入力出来る日まで、胸の中に秘めておくことにしよう。

……絶対。

でも、

水瀬君……。

お気の毒様。

●補足●

ラムリアース帝国。

立憲君主制国家。帝室は聖導皇家。

今の感覚でいえば、ブルガリア・ギリシアからモルダビアやウクライナといった黒海・アゾフ海沿岸を領土とする国家。

総人口6千万。国家騎士団は聖導騎士団（すべて魔法騎士で構成）騎士にとっては「母なる国」とされる。

シヨタコンお姫様は好きですか？ 水瀬1年次7月頃（後書き）

樟葉&ナターシャの活躍は、「一年戦争秘録」でいずれ、必ず書きますっ！

過去と赤提灯と雑談と 水瀬1年次7月頃（前書き）

助六より

樟葉とナターシャの飲み話です。

正規ストーリーでは描かれない小話だと思って読んでください。

過去と赤提灯と雑談と 水瀬1年次7月頃

饗庭樟葉の回想より

水瀬悠理と初めてと出会ったのは、確か小学校三年か四年の頃、長野に遊びに行った時だったと覚えている。

目のクリクリした可愛らしい女の子。というのが第一印象だった。子供は私と悠理だけ。大人は酒の席。

となると、悠理の面倒は私が見ることになる。

当時、妹が欲しかった私は、念願が叶ったような気がして、遥香様や母から、「お姉さん」と呼ばれるのが何よりうれしくて、それはお姉さん風ふかせもした。

ただ、私は私なりに一生懸命、いいお姉さんたろうとしただけなのだ。

しらなかったとはいえ、温泉の女風呂へ悠理を連れていき、大騒ぎになったことなど、思い出したくもないが…。

その悠理と再会したのは、よりもよって戦場と化した、かつて共に遊んだ地。

共に騎士として、だ。

私の後をついてくるだけだった悠理は、いつのまにか、私が頼りとするほど強くなっていた。

遅しく、とか、凛々しく、とかいう言葉は、全く縁がない。

見てくれは、昔のまま成長したことを示していた。

ただ、外見とは裏腹に、悠理は「強く」なっていた。

それが、「お姉さん」としては、うれしくもあり、さみしくもあり……。

悠理から、「友達」という言葉を初めて聞いたのは、再会してからしばらくしてのこと。

英国国教神聖騎士団と共同戦線をとっている最中のことだった。いつも司令部の隅でぼんとしていた悠理が、気がつくといない。どこに行っていたと尋ねると、

友達の所

と言う。

戦場のまっただ中で、友達という言葉が出てきたことに、正直驚いたが、その友達が、あのルシフェル・ナナリだということに、さらに驚くことになった。

ルシフェル・ナナリ

前評判が強すぎるせいか、魔法騎士としてしか、最初は見ることが出来なかったが、この子もかなり浮世離れしているというか、世に慣れていない、不器用な子、つまり、悠理の同類だと気づくのに、それほど時間はかからなかった。

とにかく、コミュニケーションをとるのが大変。

会話のキャッチボールがまるで出来ない、話しかけても、必要最低限のこと以外を話すことをしない、いや、出来ないのだ。

何を話していいのか、いつも困ってしまう。

当然、話していても面白みにかけ、いつしか会話の中から外れていく。

悠理もそうだ。

だからだろう、組織の中では孤立していた。

ま、同い年だし、悪い話ではない。程度にしか、当時の私たちは誰も考えていなかった。

まだ、悠理が大規模な戦いに参加していなかったせいもある。

悠理が、当時から欧州最強レベルと言われていたルシフェル・ナナリの背中を任せても大丈夫なほどの実力者だと、私ですら知らない。

かったのだから――。

そして、二人はいつしか、完全に単なる騎士から兵器へと、周囲の扱いをさらに悪化させ、孤立を深めていった。

二人が友達として、いや、同類同士として一緒にいることが多くなると、自然と、二人の恋人説が軍内部に流れ出した。

誰がいうともなく、だが、それが、好奇心でもあり、二人という特異な存在同士へのせめてもの同情でもあったのかもしれない。

初めて聞いた時、私はルシフェルが悪趣味だとか、悠理が背伸びしすぎだとか、確かに困惑した。

それは、弟に彼女が出来た。と聞かされた姉の心境だと、そう思っている。

つまり、一抹の寂しさだった。

その悠理が、ルシフェルのことで相談に来る回数が多くなったのは、ルシフェルが、やっと悠理が男の子だと知ってからだった。

ルシフェルの誕生日に何かプレゼントをしたいとか、

ルシフェルが口を聞いてくれなくなったとか、

相談内容は、ごくささいなこと。

だが、悠理にしては大問題なのかもしれない。

この子も、友達づきあいなんてしたことがないのだから――。

最初は、姉のつもりで。

そして、慣れてくると暇つぶしを兼ねて。

戦争を忘れる意味で、相談に乗っているつもりで、さんざん二人をネタに楽しんだのは、我々女性騎士達だ。

ルシフェルがどうこうより、むしろ自分ならば。の立場で悠理にあれこれ吹き込んだものだ。

悠理は悠理で、一々それを鵜呑みにして、ルシフェルに散々な目

にあわされ、泣きながら私の所へ来たのは一度や二度ではない。

自分が面倒くさかったからとはいえ、洗濯位して欲しいといって、それが彼女の希望でもあると勘違いした悠理が、彼女の下着まで洗濯し、一週間近く、私たちの口添えが有るまで口一つ聞いてもらえなくなったのは、いまでも悪いことをしたと思っではいる。

東京某所ガード下

「ま、あんたと飲むのは久しぶりね」

「苦労したわよ？取り巻き巻くの」

「でも、もう少しマトモなところで飲めないの？」

「何いつてるのよ？日本酒は、こういうところで、コップで飲むからおいしいんじゃない！ね？そうでしょ？おじさん」

「へ？へえ…まあ」

「ほらあ！」

勝ち誇った顔をする目の前の女を無視するように、目の前でおでんを皿に盛っている屋台の主に、楠葉は言った。

「おじさん。ごめんなさいね？騒がしいの連れてきて」

「いえいえ。お嬢！いや、先々代からお世話になっているんですから！」

「クスッ。ありがと。でも、おじさんも、いい加減店を持てばいいのに」

「いやあ……」

捻り鉢巻の年老いた男は、頭をかきながら言った。

「美学、みたいなもんですわ」

「美学？」

「ま、箸にもかからねえクズみてえな屋台の主の戯言ですけど。でもね？こうして屋台を引いて、店広げて、来るお客と話す。身よりもねえし、何より、こんな年になると、これしか、たったこれだけが楽しみでねえ。そんな俺が、店持ちなんて格になると、何かこ

う、大切な何かが変わっちゃまう。何十年やってたことが、ね。俺あ、それが怖いんですわ」

はい、ちくわぶ。と主が楠葉の皿におでんをのせる。

「……」

「……」

楠葉も、横の女も、無言で目の前のコップ酒を見つめていた。

格が上がると変わるもの。

それは、彼女たちもまた経験してきたことだ。

「俺は変わりたくない。その代償として、こんな老体にむち打って、毎日屋台引きですわ。ははっ。でもね？この年になって思うんですよ。お嬢様」

「？」

「変わることを受け入れても、拒んでも、でもね？人って、気がつくと、どこかでかわっているんですよ。昨日まで何でもなかった屋台引きが、今日には腰に辛いとかって、ね」

「まあ、そんなものよ」

不意に、女が言った。

「人は変わっていく。変わるからこそ、前に進むものでしょ？」

「へへっ。俺にやあ、学がねえから、そんな難しいことはわかんねえけど、お客さん、外人さんなのに日本語上手いねえ」

「日本人の子に恋しちゃってね？そりゃ、一生懸命覚えたものよお？でもさ。その子がさ？今日だってベットのままでいったのに、邪魔が入ってさ？もう散々。何のために日本語覚えただんだか」

「動機が不純すぎるって」

「あらあ？その年で浮いた話一つない方が問題じゃない？」

「いいわよ！もうこうなったら独身一直線！親父が嘆こうが知ったことか！」

楠葉は豪快にコップ酒を空けた。

「おっ！」

女は無責任にパチパチと手をたたいて喜ぶ。

「さ、あんたも飲みなさいよ。あんたの失恋記念に！ね？ナターシャ」

「……あんたもいうようになったわね」

「で、さあ」

飲み出してからしばらくの後、ナターシャは楠葉に訊ねた。

「噂、なんだけど」

チラリと主を見る。

「おじさんなら大丈夫よ」

楠葉は、なんでもないという顔で言った。

「元・近衛右翼大隊第一中隊長、祖父の上官だった人よ」

「え？」

「へへっ。戦闘で右足亡くしましてね。当時の魔法技術では、騎士としてはお役に立てませんでした」

「あ………そうなんだ。ごめんなさい」

「いえいえ。その後、饗庭様ん所のご厚意で足をいただきましたね。今ではなんでもないですよ。ま、ただ、騎士よりおでんやの主の方が、性にあってたんで、これだけはそのままですけど」

主は、苦笑混じりで、そう言いながらナターシャのコップに酒を注いだ。

「よかったじゃない。でさ。楠葉、近衛がルシフェルを採るって噂、本当なの？」

「アトールには悪いけど、ウチは逆指名よ」

「ルシフェルが？もう騎士廃業とばかり思っていたんだけど」

「そ。ただし」

楠葉は酒を飲みながら言った。

「学校への通学は最低条件。つまり、学校に行かせてくれるなら、近衛に入るってさ。……ま、あの子、騎士じゃなければ、今頃、どんな人生歩んでいたのかしら」

「結構、いい人生歩んでいたんじゃない？体はかなりのもんだし。

オトコ作ってウハウハ」

「……あんた、結局、そこなのね」

「当然じゃない。それこそがオトコとオンナよ？」

「……どうせ私に縁ないわよ」

「ま、オンナをあんたが採用するってなら、オトコはもらっている？」

「だから断ったでしょ？」

「足りなかった？」

「あんたね。非公式とはいえ、シ千億円払うから水瀬よこさせて、国としての常識疑うわよ？」

「メサイア何騎か建造予算パクレはちよろいわよ」

「で、手に入れたら、どうするの？」

「もち、私専用のハーレム作って」

「こら」

「いいじゃない。あの子と私の愛の巣よ？ あんた達、日英軍が期待したルシフェルと水瀬のカップリングより健全だわ」

「どこがよ！？」

「大人のオンナが少年を自分色に染め上げる……ね？」

「あんた、言ってることが犯罪だって、気づいてる？」

「ひっどいいかたねえ。あーあ。私がもう少し若ければなあ」

「私の方が年下だって何度言えばわかるの？ やめてよ。こっちまで老けてくるわ」

「戦争ばかりの人生じゃ、老けもするわよ」

「戦争中、成長したのはあの馬鹿息子くらいか」

「全然よ」

「したわよ」

「どこが？」

「内面よ」

「幼児化が進んでたわよ？ あの、なんとか言う女の子に半殺しにされる位弱くって」

「あの子は非常識すぎるのよ」

「あの子、何者なの？」

「……不明。ただの子じゃないから、調べがつき次第、近衛でどうするわよ」

「あの子、人質にとれば、悠理は言いなりってこと？」

「あのね……」

「そっかぁ」

「あんた、今、何考えたか言ってごらんさい」

「やだ楠葉ったら！」

楠葉は、ナターシャが何を考えたのか、聞くことすら止めた。

「……まあ、ルシフェルに提示された条件、全部飲んだことだし。あとはあの子次第ね」

「楽しい。反面、えらくトラブル続きの学校生活になりそうね。

近くにいるのが悠理じゃ」

全くその通りになるのだが、今はここまで。

この一ヶ月後、ルシフェル・ナナリが来日することになる。

選びし乳（前書き）

先代丁稚、でっち水瀬の遺作です↑マヂ!?!↑マヂでそうなってます。

選びし乳

桜井美奈子の日記より

放課後、みんなで教室掃除。

詩乃さんの授業で宿題忘れた水瀬君と羽山君、南雲先生の授業中に居眠りした私と未亜……。

ま、理由はいろいろあるけど、みんな罰掃除だ。

「ちゃっちゃとやって帰ろうぜ」という羽山君と一緒に机を運ぶ私。

その後ろでは水瀬君がモップがけ。

事件は、そこで起きた。

「おい水瀬！ 足下にバケツが――」

「え？――わっ、わっ！」

ガシャンッ！

羽山君の声が出たかと思うと、何かが倒れる音、そして、背中と胸の辺りに違和感が走る。

「へ？」

恐る恐る下を見ると、誰かの手が、私の胸を鷲掴みにしている。

「いっ、痛たたたっ……」

背中から聞こえる声は水瀬君。

「ご、ごめんね。桜井さん、すぐ動くから」

「あ、あのね……」

ムニユ

ムニユ

自分で表現するのも何だけど、水瀬君が動こうとする度に、胸を掴む手が動くわけで……。

水瀬君を蹴り飛ばしてやったのは、女の子として当然のことだ。

水瀬君曰く「転びそうだったので、思わず掴んでしまった」そうだが、女の子の胸を掴んでタダで済むはずはない。

後の掃除は、水瀬君一人でやってもらい、帰りにチャーシューメン大盛りと餃子をおごらせた。

ま、それで勘弁してあげよう。

うん。

やっぱり、私は優しい人間だと思う。

数日後

桜井美奈子の日記より

朝から瀬戸さんが激怒している。

ワケを聞いた。

昨日、先生に頼まれて資料室の片づけを、水瀬君と手伝ったそう
だ。

そこでのこと。

水瀬君は、この前の掃除の時同様、何かに蹴躓いて転びそうになった。

「わっ。わっ」

瀬戸さんによると、バランスを崩した水瀬君が、背後から手を出してきた。

瀬戸さんも「胸を触られる」と思ったそうだけど、水瀬君の手は、そのまま瀬戸さんの胸の数センチ手前で空を切ったまま、足下へ消えていき、つかむ物のない水瀬君はそのまま転んだという。

「つまり——」

言いたくないけど、まとめましょう。

「私の時は、つかめたのに、瀬戸さんの時はそのままスルーしたってことは……」

勝った！

勝てた！

勝ちました！！

内心でガッツポーズ！

対する瀬戸さんは……

「うっ、うえええええん！！」

あーあ。泣き出しちゃった。

瀬戸さんは言う。

「胸の大きくなる体操だって中学からずっとやってます！それに胸クリームだって始めました！天○のブラだってずっと！」

「そこまでやって……それで——スルー？」

「うっ」

「逆にまずくない？」

「……ヒドイです」

「瀬戸さん……二十歳まで希望は捨てちゃだめだよ」

凹む瀬戸さんに、私が出来たことといえば、そんな慰めを言う程度のこと。

ただ――

この日一日、

私はすばらしい優越感に満たされていた。

うん。今日はいいい日だった。

選びし乳（後書き）

でっち水瀬より

試験的な短編です。

元ネタでは綾乃は82センチ、美奈子85センチですが、この世界では綾乃80センチ、美奈子88センチという設定です。やたら巨乳になったのは、美奈子へのせめてものご褒美かな（笑い）

綾乃は……ま、いいか。

しかし、88センチ……某国の戦車砲の口径。

管理者より

綾乃ちゃんにより、でっちがこう（←）になりましたので、証拠画像を掲載します。合掌。

— — —
^ — ^
(— (、
U
UU

カップと嫉妬とお引越　水瀬1年次8月頃

瀬戸綾乃の日記より

明日はせっかくの休日ですから、水瀬君とどこかに遊びに行こうと思います。

でも、悠理君は忙しいそうです。

理由は、昨日来日したばかりのルシフェルさんの新居の準備があるそうです。

あの女、私の悠理君をコキ使おうというのですか？

戦友だかなんだか知りませんが、幼なじみ兼クラスメート兼婚約者の無敵トリプルコンボ保持者の私の許可なく悠理君を使う事なんて、人道の観点から許されることではありません。

ムカつきましたから、悠理君におねだりして、準備に参加させていただきました。

悠理君は一晩、大けがが原因で入院するそうですけど、誰の仕業でしょう？

何より、あの女、けが人に引越しを手伝わせようと言うのですか？

ムカつき度が鰻登りです。人の迷惑を顧みないなんて、いつか、天罰が下ります。

ええ。きつと。

朝早くから家を出て、悠理君の家へ。

お義父様とお義母様まで来ていらして、ちょっと驚きました。でも、いいチャンスです。

悠理君の妻の地位は、この私にのみ、ふさわしいことを再認識していただく、またとないチャンスです。
はりきって行きましょう。

10時過ぎにデパートに行きました。

まずはルシフェルさんの制服です。

トップアイドルの私のプロポーションに比べれば、こんな異国育ちの小娘なぞ。

ふふっ。

さて、

ルシフェルさんのサイズは……。

バスト……

バスト……

き、97？

97センチ……

ま、負けた……

負けました……。

完敗というか、むしろ惨敗です。

15センチ……15センチも違うなんて……。

何を食べればこんなに大きくなるんでしょうか。

牛乳は、毎日飲んでいるんですが……。

で、でも、まだ、ウエストは私も52センチ、細さでは自信が……

「49センチ？うーん。サイズ大丈夫かしら？」

お義母様の心配そうな声が試着室から聞こえてくる。
に、2連発で敗北です。

巨乳に柳腰とはよくいいますけど、この子、本当に人類なんですよか？

結局、サイズ（特に胸）の問題から、制服はフルオーダー。

私の時は、Mサイズで全部なんとかったのに……。

神様は不公平です。

お義母様がルシフェルさんの下着まで選び出しましたので、付き合います。

あ、このブラ可愛いけど……パッドが入らないならダメですね。

「カップのサイズは……Dじゃ足りないわね」

「……」

赤面しながらポソポソとお義母様の耳元で何かをささやくルシフェルさん。

「まあ、じゃあ私と同じね。うーん。でも、そうするとサイズが……ないわね」

「？」意味がよくわかりません。

「Fカップってなると、もう専門店行かないと……」

Fって、人類がつけられるカップなんでしょうか？

……か、悲しくありません！む、虚しくなんて……う、うううううっ。

専門店に行くというルシフェルさんとお義母様を見送って、私は悠理君の所に行きました。

Fカップには興味があるんですけど、でも、見た時の自分のダメージを想像すると……。

「やあ綾乃ちゃん」

家具売り場にはお義父様がいらっしやいました。

「おじ様、もう家具は決められたんですか？」

「ん？ああ、あれ位で丁度いいと思ってね」

指さした先にあったのは、『ブライダル家具』コーナー。

あのアマ、殺す。
もう殺す。

何様だか知りませんが、お義父様に新婚家具を買わせるとは……
(激怒)

お義父様の見ていないところで、ダンスを殴ってしまいました。
もろすぎます。

この程度で粉々なんて、ダメですねえ。

店員さんと警備員さんが近づいてきました。

首根っこ掴まれた位で笑顔を失うようでは、販売員失格です。

首をねじ切る一步手前にしてさしあげつつ、少おしお話ししてあげたら、問題ないと半泣きで逃げていきました。

店員がこの程度では、扱う品物も大したことないですね。

ま、あの女の使うモノですから、知ったことではありませんけど。

「……悠理、何モタモタしている！早くしろ！」

お義父様の声が飛ぶ。

家具売り場にいた人達全員の視線が注がれているのがわかります。
少し、恥ずかしいです。

「は、はいいいっ」

タンスコーナーの後ろからよろよろ出てきたのは、ベット。

じゃなくて、ベットを抱えた悠理君。

紐でくくられた布団が背中にくくられています。

「会計が終わったらさっさと家に持って行け！」

「は、はいいいっ」

シュンッ

一瞬で悠理君の姿が消える。

「あ、あの？」

「レポートだよ。すぐに戻ってくる。で？遙香達は？」

「下着の専門店に行きました。いいのがないそうで」

「ああ。サイズがサイズだからなあ」

納得という顔のお義父様。

うううつ……。

「でも、なんだかすごい買い物ですね」

「ん？まあ、この位はなあ」

お義父様は、なぜか少し、寂しげに見えました。

「まるでお嫁に娘を送り出すような心境ですか？」

お義父様に許されるかもしれないギリギリのイヤミです。

「近いが違うな」

「？」

「……あの子も騎士だ。どっちが先に死ぬかわからない。なら、生きている内に出来る限りのことはしておいてあげたい。ま、そういうことだ」

「そういう、ものですか？」

「ああ」

お義父様は、その後、私の頭を撫でながら言いました。

「次は、綾乃ちゃんの嫁入り道具が待っているけどな」

し、幸せです……。

ちゃんと定まった未来のことまで考えていくべきだったなんて！！
お義父様。私、絶対に義理の娘として生涯お仕えいたします！

私が感動に浸っている時です。

パツと、強い光がさしたかと思うと、何だかおしりの辺りに違和感を感じます。

誰かにおしりを撫でられているような感じ。

恐る恐る後ろを見ると、何故か私のスカートが盛り上がっていました。

「――プハッ」

スカートの中から顔を出して来たのは、悠理君。

悠理君自身、びっくりした顔で私を見つめています。
よかった。

勝負下着にしておいて。

恥ずかしいですけど、悠理君ですから。

頭蓋粉砕骨折程度で済ませてあげましょう。

「ご、ごめんね綾乃ちゃん。位置を間違えちゃって」

ゴツンッ

私の手より先に、お義父様のゲンコツが悠理君の頭に炸裂しました。

「このバカモン！わざとやったな！？」

悠理君の胸ぐらを掴むお義父様の目は、尋常じゃないほどの光を放っています。

「じ、事故ですう」

「ウソを言え！何色だった！？言え！見たんだろう！？しっかりとその眼で！」

宙に浮いていた私の一撃の喰らわせ所が決まりました。

お義父様、お覚悟を――。

「あきれた」

お昼は市内のレストランです。

悠理君達が、親子で頭にタンコブを作ってきた原因を知ったお義母様の第一声がこれ。

ちなみに、お義父様、お義母様、そしてあの女。向かって私達夫婦です。

「何をやっているんですか。全く」

「おじ様、不潔」あの女が図々しくもおっしやいました。

「うっ——」

「じ、事故みたいなモノですから」

さりげなくフォローを入れる、我ながらそつのなさに惚れ惚れします。

「悠君も悠君です。事故とはいえ、女の子のスカートに顔を突っ込むなんて、恥を知らないさい！」

「反省しています」

チラリとあの女の顔色をうかがう悠理君。

なぜ、私の顔を見ないのでしょいか。

この女も、何故か私の顔をチラチラ見ながら言います。

「未亜さんから色々聞いているよ？ダメだよ？男の子なのはわかるけど」

「未亜ちゃんから？」

「うん。あと美奈子ちゃんや博雅君とかからも」

「え！？」

びっくりする悠理君。

「ど、どういうこと？」

「ほらメールアドレス教えてもらってからずっとメールでやりとりしていたの」

「じゃ、ルシフェ、ひよっとして」

「私、水瀬君より学校のこと詳しいかもよ？」

「学校の創立は？」

「1925年」

「生徒会長は？」

「75代生徒会長で四方堂緑、2年A組」

悠理君との間で一問一答が繰り返されている中、私は内心で焦っていました。

こ、この女、未亜ちゃん達まで味方につけているのですか！？

未亜ちゃんをコキ使って、学校にいられなくしてやるという、私

のすばらしい作戦は、根底から覆されることになります。

これは、マズいです。

「綾乃ちゃんの裏のあだ名は？」

「清純風武闘派アイドル、またはブラッティープリンス」

「そ、そこまで知っているなんて――」

止めて欲しいんですけど。

「す、すごいよ！ブラッティープリンスなんて、羽山君と秋篠君と僕の間でしか通じないのに！」

どういうことか、後でたっぷり聞かせてもらいましょう。悠理君？

そして帰宅。

あの女の手伝いのため、部屋に行きました。

そして、私達は二人っきりになりました。

事故に見せかけて始末も考えたのですが、相手は世界最強の魔法騎士。

それに、もっと効果的に殺すことを考えましょう。

「あの……」

この女が、心配そうな顔で声をかけてきました。

「何です？」

「……迷惑、かな」

「？」

「私が、学校に通うのは、迷惑、なのかな」

わかっているんですね。

「いつ、いえ？そんなこと、ありませんよ！みんな楽しみにしますよ？品田君達なんて内緒で歓迎パーティー開いて驚かせてやろうって」

「……でも、瀬戸さんは、迷惑そうだよ？」

「え？」

「私、迷惑がられて生きてきたから、そういうのは敏感なのね？」

今日一日、瀬戸さん、すごく迷惑って顔だったから――」

「そ、そんなことはありません」

思いつきあります。

はつきりいって迷惑です。

「ごめんね。あの、迷惑にならないようにするから出来るもんならやってみてください。

「ただ、教えて欲しいことが」

「何ですか？」

「私、何で迷惑なの？」

「――戦友って、どういう意味ですか？」

言葉が止まらなかった。

「戦友って言葉、私にはわかりません。でも、私は悠理君が好きです。好きな人がどういう関係であれ、他の女と一緒に住むのを大目に見るほど、私は寛大でもバカでもドンカンでもありません！」

「……」

この女、きょとした顔あと、突然吹き出しました。
人をバカにしています。

「何がおかしいんですか？」

「ご、ごめんなさい……で、でもね？」

涙を浮かべるほどおかしかったのでしょうか？

「わ、私、水瀬君を恋人にして、人生フイにするつもり、ないもん」

「はい？」

「悪いけど、あんなヘンな子、恋人にしたら大変だよ？」

「す、すでに大変なんですけど」

「瀬戸さん、みんなから言われているよ？物好きだって」

「ヴッ……」

「ねえ、瀬戸さん？」

じっと見つめてくる顔を、思わず見つめ返してしまいました。

芸能界でも滅多にいない、というか、張り合える子が、すぐには思いつかないほどの美少女なのは、百万歩譲って認めましょう。

「なっ、何ですか？」

「水瀬君の、どこがいいわけ？」

「そ、それは——」

まるで誘導尋問にひっかかった容疑者のように、私はこの女の言われるがまま、誰にも言ったことすらないことまで、全てをしゃべり続けてしまいました。

ルシフェル・ナナリ——

私がこの女を好きになるまで、しばらくの時間が必要みたいです。

転校生は世界最強？ 水瀬1年次9月

ルシフェル・ナナリ。

一年戦争の英雄。英国神聖国教騎士団を突然退団してから数ヶ月。数千億円にまで跳ね上がった契約金額と熾烈な獲得合戦がマスコミを賑わせたが、結局、彼女は皇室近衛騎士団へ入団する。

その入団条件。

それは「学校へ通わせてくれること」だった。

明光学園編入試験全科目満点の記録と共に、彼女は明光学園へ編入することになる。

これはその頃のお話。

桜井美奈子の日記より

その日の朝、瀬戸さんの機嫌は最悪だった。

教室に入るなり、ピリピリとした殺気すら放っている。

また水瀬君が何かしでかしたんだろう。

「ど、どうしたの？」

心配になったから、声だけかけてみた。

「みんな、酷いです！薄情です！」

みんな？ということは、怒りの矛先は、水瀬君じゃない。私達に向いている？

「な、何が？」

「今日は、何の日かわかっていますか!？」

「えっと、1950年にジェーン台風でしょ? 1977年は王貞治756号ホームラン」

「違うよ美奈子ちゃん。今日はあ、ドラえもんの誕生日!」

あっ、そうか!

「違いますっ!」

「わかってるよお。ルシフェルちゃんの記念すべき初登校日でしよう?」

未亜が突っ込む。

そうだ。

今日はルシフェルさんの初登校日。

一大イベントの日だ。

「そうです! 半世紀前のジェーン台風の死傷者ではすまない危険な日なのに……どうしてみんな……」

瀬戸さん、何を言っているんだろう。

「だって、みんな興味津々で、学校前にはマスコミも」

「あんな危険人物! 学校にどうして近づけるんですか!？」

「き、危険人物って……」

「私は前から対策を講じてきました! この前、陸軍にもお願いしました!」

「なっ、何を?」

「あの危険人物をこの世から抹殺するために反応弾（核爆弾）貸して下さいって!」

「……」

「……」

瀬戸さんの表情からして、どうやら本当に頼んだらしい。

思わず未亜とお互いを見合った後、瀬戸さんに言った。

「断られた……よね。当然」

「反応弾がだめなら、せめて気化爆弾とか、殺傷力の強い兵器貸してくれといっても聞いてもらえず……」

瀬戸さんの声は次第に涙声に変わっていく。

「ぐすっ。近衛でメサイア動かそうとしたら、これも許してもらえず……思いつき怒られて」

「当たり前だっ」

「綾乃ちゃん……それ、ボケ……だよ」

未亜。多分、それははっきり違うと思うよ？

「私は本気ですっ！」

瀬戸さんはムキになって怒鳴った。

ほらね？

「ならせめてと思って、家にあった薙刀持ちだそうしたら、今度はお母さんから」

「親として当然だよ」

「そうだよ。娘を人殺しにしたい親なんていないって」

「……で、ですけど、あの女は、どうあっても！」

「大体、なんでエルシフェルちゃんが敵なのお？」

「悠理君と同じ屋根の下、暮らそうなんて、この世で許されることではありませんっ！」

「綾乃ちゃんならいいんだ」

「当たり前ですっ！妻なんですからっ！」

「……そういつていたら、おはよう。水瀬君」

水瀬君が入ってきた。

「あ、おはよう。桜井さんに未亜ちゃん。それに綾乃ちゃん」

「なんで私が最後なんですか!？」

瀬戸さんが怒鳴る。

「えっ？」

「私が最初じゃなきゃ挨拶ではありませんっ！」
うわっ。理不尽。

「そ、そうなの?……ところで綾乃ちゃん」

「何です？」

「おばさんからでね?荷物検査するから、カバンだして」

「えっ？」

「カバン」

「だっ、だめですっ！」

瀬戸さんは、突然、カバンを抱きしめた。

「これには女の子の秘密が！」

「確認の電話をHR前に入れないと、綾乃ちゃんを家から追い出すって、おばさんが」

ぐいっ。水瀬はカバンをすばやく取り上げると、中に手を入れた。そして……

「綾乃ちゃん？何これ」

呆れるしかなかった。

カバンから出てきたもの。

包丁

メリケンサック

砂の詰まった細長い袋

紐

よくわかんないけど、化学薬品が入っているらしい瓶。

そして……

「こんなモノ、どこで手に入れたの！」

水瀬君が怒った代物。

それは……

「あっ、あの……倉橋の家から」

「没収っ！」

「そんなぁ！」

「そりゃそうだよお」未亜も呆れるしかなかった。

「拳銃なんて、女の子が持っていないモノじゃないよお」

「それだけじゃないよ。これプラスチック爆弾じゃない！」

瀬戸さん、最近どんどん犯罪者になっている。

「あと仕上げ」

そう言った水瀬君が突然、瀬戸さんの肩から腕にかけて触りだした。

「きゃっ！ゆ、悠理君！こんな所じゃダメですっ！」

「だめ。HRまで時間がない」

「やっ！そっ、そんな所まで！」

ぽいぽいぽい。

そんな音を立てて瀬戸さんのあちこちから出てきたモノ。

ワイヤーカッター

ポリカーネイド製ナイフ

特殊警棒

催涙スプレー

棒手裏剣

「はい。終わり。全部没収」

「……はあ……はあ……悠理君。続きは夜、二人きりで」

熱っぽい、うるんだ声の瀬戸さんだけど、水瀬君はそっけなかった。

「今日、仕事でしょ？というか、瀬戸さん。戦争でもするの？」

「あの女が存在する所、そこはすなわち戦場ですっ！」

そう、怒鳴られても……。

「綾乃ちゃん」水瀬君も困惑気味だ。

「お願いだから、ルシフェと友達になってあげて。いい娘なんだ

よ？」

「知りません」

もう、瀬戸さん意地になってるな。これ。

HR。

南雲先生に連れられて入ってきたルシフェルさん。

世界最強騎士。

生きた英雄。

……その肩書きがなくても、彼女は一人の女性として十分スゴい！
本当、同じ年とは思えないほど綺麗。

長い艶やかな髪。

白い透き通るような肌。

うらやましき炸裂のボディライン。

同じ制服着ている分、その偉大さを痛感させられる。

男女問わず、生徒達からは賞賛のため息が出る。

ただ一人、敵意丸出しで睨み続ける瀬戸さんを除いて――

「まあ、今更なにをかいわんや。だ」

南雲先生は言った。

「ルシフェル・ミナセだ」

「えっ？」

瀬戸さんが呆然とした顔になる。

南雲先生がルシフェルさんについて説明している言葉は、多分、

瀬戸さんには聞こえていないな。

ああ。

肩が小刻みに震えて……髪が逆立ち始めた。

うわっ。

怖いっ!!

バンッ!

突然、室内に風が流れた。

あれ?

風が止んだ後、気がついたけど、瀬戸さんと水瀬君の姿が消えた。

教壇のルシフェルさんがきょとんとしている。

「ああ。少……じゃない。ルシフェル。気にするな。とりあえず水瀬とはそういう関係だ。なあみんな。これでは区別が付きづらいだろう。どうだ? 今まで通り、ルシフェル・ナナリで通しては」

「賛成!」

ルシフェルさんの席は、私の隣。そして反対側は秋篠君の席。

「よろしくね」と声をかけたら、

「こちらこそよろしく願います」と返された。

本当、礼儀正しい子だと思う。

HRが終わった途端、みんなが一斉にルシフェルさんの席へ殺到! 怒濤の質問攻めが始まった。

驚いていたルシフェルさん。それでも懸命に質問に答えていく。

「ねえ! ルシフェルさんって、向こうに彼氏いなかったの!?!」

「シャンプー何使っているの!?!」

「部活は!?!」

等々……。

ルシフェルさん。これも通過儀礼。頑張つて。

質問攻めが一段落したのは、お昼休みに入ってからだ。

「あの……桜井さん。ありがとう」

ルシフェルさんが言った。

「桜井さんの読み通りに動いている。驚いたけど、でも、助かった」

「ううん。大体、予想はついているから。ところでルシフェルさん。お昼は？」

「うん。お弁当……みんな、どこで食べているの？」

「教室か、食堂ね。一緒に食べよ？」

「うん」

ニコリとほほえむだけで、本当に絵になるよなあ。ルシフェルさんって。

食事はルシフェルさん、未亜、そして私の三人で机をあわせて。

「でさあ。ルシフェルちゃんはある」

未亜がパンをかじりながら訊ねた。

「入団契約金ってどれくらいもらっているの？」

「額面は80億円」

「はちっ!？」

驚いた。

やっぱり、スゴいんだなあ。

「でも、少くない？」

未亜。80億円のどこが？

「中東のどこだっけ？4000億円つけた国あったでしょう？」

「でも、こうやって学校これるほうが大切」

「偉いっ!」

こらっ未亜っ!ルシフェルさんの頭を撫でないっ!

「所で……」

ルシフェルさんが誰を捜しているのかはわかる。

「あーっ。水瀬君ね？」

「うん。瀬戸さんの姿も」

「……あの二人なら」

未亜が遠い目をしながら言った。

「地獄、かな？」

「そうねえ……」

罪人（しかもえん罪）が水瀬君。

獄卒が瀬戸さん。

……いい加減、見慣れてきた絵面だな。

「地獄？」きよんとするルシフェルさん。

「どういう、こと？」

「ああ。気にしないで。ここじゃ、日常茶飯事だから」
「？」

結局、二人は放課後まで戻らなかった。

ルシフェルさんも心配だからと、探すのを手伝ってくれた。

校舎裏を一人で歩く瀬戸さんを見つけたのは、それからすぐ。

ルシフェルさんの姿を見た途端、敵意むき出しになったけど……

ルシフェルさんに頼まれて、ルシフェルさんと瀬戸さんを二人つきりに。

私と未亜はその間に、桜の木の下へ埋められた水瀬君を掘り出しにかかった。

未亜、救急車呼んで。

違うっ！葬儀屋じゃないっ！

ルシフェル・ミナセ

その名は当然。

何故？

日本国籍取得する時、ルシフェルさんは養子縁組しているから。
親は水瀬君のご両親。

ナナリから姓が変わるのは当たり前。

つまり、今のルシフェルさんは、水瀬家の養女にして、水瀬君のお姉さんなのだ。

「ルシフェル・ナナリ、水瀬家へ養子縁組！」は、もうマスコミに何度も取り上げられた話題なのに、瀬戸さんが知らなかったことにむしろ驚いた。

それさえ知っていれば、水瀬君はこうはならなかったのに。

「何で言わなかったんですか！」とは水瀬君に対する瀬戸さんの弁。

……調べようよ。瀬戸さん。

数日後――

「お姉様」

教室に入ってきたルシフェルさんをそう呼んだのは、瀬戸さん。
ちよっと前まで敵とかなんとか言っていたクセに。今や誰より親身になってルシフェルさんに接している。

その日のお昼のこと。

「ところで」ルシフェルさんが困惑気味に私に尋ねてきた。

「何？」

「お姉さまって、どういう意味？」

「英語でシスター？」

「うーん」ルシフェルさんは納得出来ない様子だ。

「どうしたの？」

「あのね？下駄箱に手紙が入っていて」

「ラブレター！？」

「ほとんど女の子からのもの。その全部に“お姉さまになってください”って」

「……未亜、説明お願い」

未亜が熱心に説明し、それを横で暴走しないように時折、突っ込む。

その間、私は真剣に聞くルシフェルさんの顔を見つめながら、ぼんやりと考えた。

とにかく、ルシフェルさんは瀬戸さんを押さえた。

当然、水瀬君が逆らえるはずがない。

力関係から言えば、これでルシフェルさんは校内一を誇る水瀬君より強い立場に立つ。

うん。

やっぱり最強……なんだな。

あ、ルシフェルさん？

集中治療室から水瀬君が出られるの、いつ頃か知ってる？

秋篠君の幸福？災難？ **水瀬1年次9月頃（前書き）**

かなめ初登場です。

秋篠君の幸福？災難？ 水瀬1年次9月頃

●昼休み 明光学園 教室

「ニュースニュース！」

大声をあげながら教室に飛び込んできたのは……。

「何？未亜、またロクでもない情報仕入れてきたみたいね」

「むーっ。何よ美奈子ちゃん。失礼だなあ」

「真実よ」

「で、未亜ちゃん。ニュースって、何？」

「水瀬君、よくぞ聞いてくれました！」

未亜は美奈子の手から缶ジュースを取り上げると、一気に飲み干した後に言った。

「新しい剣術教官が来るんだって！」

「こら未亜！」

「剣術教官？」

「そう！ほら、ウチの組の剣術指導を担当する教官が決まっていなかったでしょう？ようやく決まったんだって！」

「水瀬君。剣術教官って？」

「あ、ルシフェルは知らなかった？ココにも、騎士に剣を教える立場の人がいるんだよ」

「ああ。そういうこと」

「ルシフェルさんじゃ、教わることなんてなと思うけどなあ」

そういう美奈子だが、「そんなことない」と、ルシフェルは否定する。

「そう？」

「まだまだ未熟だよ？私なんて」

「世界最強騎士に「未熟」なんていわれたら、立場ないんじゃない？羽山君？」

「イヤミか？」

「無視。で？未亜、その人って、どんな人なの？」

「うーん。よくわかんないけど、近衛の人だって」

「ルシフェルさんの仲間？」

「私、聞いていない」

「え？本当に？」

「うん」

ルシフェルがちらりと視線を向ける先にいた水瀬も首を横に振る。

「うーん。極東最強の騎士団から派遣されてくるんだから、さぞ腕が立つんだろうなあ」

感心したような声を上げる博雅に、美奈子が言う。

「剣が上手くても、厳しければ大変だね」

考えてみれば、その一言が、騎士養成科生徒のこれからの運命を予言していたのかもしれない。

●翌日 明光学園教室

騎士養成コース所属生徒専門の授業はいくつか存在する。

その中の一つが、この「戦術講義」だ。

「授業を始める」

苦い顔で教室に入ってきた南雲の巨体の後ろにはスーツ姿の女性
がいた。

長い髪をポニーテールにして束ねており、鋭い感じのする目から
は殺気に近いものが放たれている。

「怒らせたらタダではすまない」

生徒達は、一瞬にしてそう悟った。

「女の人？」

「誰？」

教室がざわつくのを、南雲が制する。

「静かにしろ」

張りがなく、憔悴したような声が教室に響く。

「新任の剣術教官を紹介する」

南雲がチョークで黒板に名前を書き出した。

福井かなめ

とある。

何故か水瀬の顔は真っ青。

ルシフェルも平然としているようだが、どこか焦っている感じだ。

「では、福井先生。どうぞ」

ガンッ！

福井は、まるで威嚇するように手にした竹刀で床を突き、口を開いた。

「剣術指導教官の福井だ。帝国国防の楯となる貴様ら騎士養成コース生徒の指導に当たることは名誉なことと思う。今後とも、よろしく頼む」

「ありがとうございます。……では、授業を始める。テキストの125ページを開け。今日の当番は……安藤、読め」

「あ、あのお……」

「どうした？」

「俺、テキスト忘れてきちゃって……」

バンッ!!

竹刀の鋭い音が教室に響き渡った。
生徒達が身を固くする。

「たるんでいる!」

「ふ、福井先生……」

「テキストを忘れた? 貴様、何のためにそこに座っているのか!」

「あ、あの、すみません……つい」

「謝ればよいというわけではないぞ!」

バンッ!

「そんなたるんだ根性で騎士として十分な戦いが出来ると思っているのか!?」

「……」

安藤はうつむくだけだ。

反省はしていると思う。

だが、福井はそんな安藤に容赦しなかった。

「罰だ。校庭を10周してこい」

「こ、これからですか!?」

「ふ、福井先生……それはあまりに」

「騎士たるもの、少しの油断が死につながることに、その程度は南雲先生にはお分かりのはず」

「は、はあ……まあ」

「この生徒にはその油断がある。テキストを忘れるなど、その証拠以外の何者でもない!」

福井は竹刀を一閃させながら怒鳴った。

「校庭10周だ！さっさと行け！」

「はっ、はいい！」

安藤は走りながら出ていった。

「あーあ。情けねえの」

誰かのボヤきが福井の耳に入った。

「……誰だ？」

しんと静まりかえる教室。

「ワイヤ」

手を挙げたのは草薙だ。

「そんなにおかしければ一緒にやってこい！校庭10周だ！」

「そんな無茶な！」

「授業中の私語が禁止されていることは、生徒として当然知っておくべきことだろう！ましてクラスの仲間を侮蔑するとは何事か！」

「い、いや、ワイはそんな」

「いいから走ってこおい！」

草薙が出ていった後、水を打ったように静まりかえる教室。

「うむ。授業中は静かであるべきだな」

福井は満足そうに言った。

「では南雲先生、心おきなく、続きをどうぞ」

●桜井美奈子の日記より

お昼休み。

騎士養成コースの生徒のほとんどが、自分の机に突っ伏している。ご飯すら食べていない。

「南雲先生は止めなかったの？」

「ああも理路整然と精神論唱えられたら、あの口べたの南雲先生が止められるはずないよ」

水瀬君はため息混じりに言った。

「草薙なんて校庭40周だよ？あれじゃ見せしめだよ」

うわーっ。お気の毒。

「しかも、午後の体育は、あの先生の指導。大変なことになるよお？」

●明光学園校庭

「授業を始める」

なぜかスーツ姿のままの福井が居並ぶ生徒達に口を開いた。

「まず、校庭10周」

ざわつく生徒達を無視した福井は続けた。

「その後、腹筋、腕立て、背筋を各300回、終わったら各自スタンブレードの素振り1000回だ」

「な、何ですかそれ！？詩乃ちゃんのシゴキじゃあるまいし！」

「……この程度のウォーミングアップ、当たり前だ」

「じ、冗談。どこがウォーミングアップだよ」

「いいからやれ！いいな！？基本こそ最も大切だ！基本を体にたたき込め！」

「……やってられねえよ」

そんな声があがり、何人かの生徒が腰を上げた。

●桜井美奈子の日記より

騎士養成コースの生徒5人（確か沼田君達）が福井先生の叩きのめされたと聞いた時はさすがに驚いた。

福井先生の指導に納得出来ないという生徒達だ。

福井先生に挑発されて剣を向けた5人は、あっさりと先生の刃に叩きのめされ、しかも、生徒達全員が連帯責任で校庭20周させられたという。

「無茶だよねえ」

放課後、水瀬君はそうボヤいた。

「相手は近衛だもん。ルシフェルさんじゃなきゃ、勝てないよね」

「かなめさん、ルシフェルに勝ってる」

「え、！？」

驚いて見たルシフェルさん、心なしか顔が引きつっている。

「ルシフェル、同じようになめさんに抗議して、同じ目にあってるんだよ。ね？ルシフェ」

「……あの時は、本当にそう思ったんだもの」

「る、ルシフェルさんが負けた？」

「ルシフェが剣をお父さんから学ぶきっかけにもなったんだよね？」

「……負けるの、嫌いだから」

なるほど、やっぱりみんな、いろいろ過去があるんだね。

●桜井美奈子の日記より

翌日の午前中。

普通コースの授業を受けていたら、
ドドドドドッ

すごい音がしたので外を見たら、騎士養成コースの生徒が一丸と

なつて校庭を走っていた。

「うむ。やはり騎士は体が資本だからな」

神田先生はさも当然という顔でうなずいた後、黒板に向かったけど……。

●秋篠博雅の日記より

ついに俺も走る日が来た。

うっかり、出席当番を忘れていたことをとがめられ、校庭10周。確かに、非は自分にある。

だが……

校庭から教室に戻った途端、他の生徒の連帯責任でさらに20周だ。

さすがにバテた。

20周を走り抜き、ゴール地点でへたり込む。

見ると、他の生徒もあちこちでばてていた。

「お疲れさま」

声をかけてきたのはルシフェルだった。

一緒に走っていたはずなのに、息を乱してなければ汗一つかいていない。

「大丈夫か？」

「平気。いつもやってるから」

「はあ!？」

「毎朝、福井先生のカリキュラムはこなしてるの。水瀬君もだよ?」

……あいつらが平気な顔している理由がわかった。当たり前のことをしているからだ。

俺も修行が足りない。

よし。俺もやろう。

ここで休んだらな。

そこへ福井先生がやってきた。

「よし。走り終わったようだな。これに懲りたら、少しは失態を犯さずに済むように心がけろ」

「……はい」

「よし。さっさと教室に戻れ」

俺は先生の言葉に従い、勢いをつけて立ち上がろうとして

「あっ！」

「きゃっ」

立ち上がった途端、バランスを崩し、ルシフェルに倒れかかる形で抱きついてしまった。

「だ、大丈夫？」

「す、すまない！わ、わざとじゃ……」

……ううっ。相変わらず柔らかいし、いい匂いがする。

力が戻るまでの役得だ。もう少し……と思ったが、

！？

突然、背後からすさまじい殺気を感じ、その途端、俺は凍り付いた。

恐る恐る振り返った先にいたのは……

「き、貴様あ……！」

福井先生が恐ろしい形相で仁王立ちしていた。
肩が怒りでふるえ、すさまじい殺気を放っている。

うわ。ルシフェルほどじゃないが、怖い。

「この婦女暴行魔があ！」

「ふ？」

「せ、先生、秋篠君は——」

福井先生が血走った目で怒鳴った。

「見苦しいぞ！現行犯だろうが！」

「げ、現行犯？」

「私の前でナナリに……ナナリにつ……」

「せ、先生！」

「なんと不埒な！」

だめだ。説得が通じる状態じゃない。

「せ、先生。私、別に……」

「ナナリ、女として辛かったことはわかる。だが、泣き寝入りしてはならないっ！」

「で、ですから……」

「何も言うな……秋篠！校庭100周だ！」

「げえっ!？」

「私の目の黒いうちは邪なマネが許されると思うな！」

「ですから、あれは事故で！」

「見苦しい！校庭200周だ！」

「げえっ!？」

福井先生は腰に下げていた霊刃を抜いた。

「行かねば……この場で斬り捨てる」

気がつけばもう放課後だ。

他の生徒達が下校する間を縫って俺は走り抜いた。

もう体力が続かない。

ゴール地点にたどり着いたのまでは覚えている。

気がつけば、俺は保健室のベッドで眠っていた。

すでに夜。

蛍光灯の明かりの下、痛む体で辺りを確認すると、椅子に座ったルシフェルが眠っていた。

看病してくれたらしい。

ありがたい。

気がつくと、俺はルシフェルの寝顔を見つめていた。

本当に愛らしい寝顔だ。

体力を使い切るまで走り抜いた先にあったのは、この幸福な一時。悪くはない。

「……んっ」

形のいい眉がぴくりと動き、ルシフェルが目を覚ました。

……ま、この先の展開は、「お約束」だ。

しかもベッドの上。

最高のシチュエーションだ。

何度目か忘れた位のキスの後、ルシフェルの声も甘くうわずって
いるのがわかる。

「いい？」

「——うん」

俺の指先がルシフェルの制服のボタンにかかった時——。

不意に保健室のドアが開くなり、聞きたくもない声が聞こえた。

「秋篠、目を覚ましたか？」

●翌日 明光学園教室

「——で？」

「博雅君とルシフェルちゃんがいついていた所へ、宿直の福
井先生が入っちゃってえ」

「それで校庭——」

「そう。1000周。博正君、さすがにダウンだって」

私は博正君の机に手を合わせた。

「ご苦労っていうか、ご愁傷様」

ひみつのかなめちゃん 水瀬1年次9月頃（前書き）

……ま、カタブツなかなめといえど、人には言えない趣味だってあるわけで……。

ひみつのかなめちゃん 水瀬1年次9月頃

明光学園では、土曜日に登校することが月に1回ある。
そんな日のことだ。

「校庭10周だ！」

その怒鳴り声に、隣で寝ていた未亜が飛び起きた。

「はあ……」

美奈子はその様子を見ながら、ノートに線を一本付け足す。
正の字が2つ、できあがった。

つまり、校庭を走っているのは10人。
窓の向こうをのぞき見る必要は、ない。

最後の授業となれば、それは退屈というか、ほとんど消化試合に近い。

授業をする方も受ける方も、やる気なんてない。

それがこの学園の常識なのに……。

にもかかわらず、学園で一つだけ、緊迫しきった空気でこの時間を過ごしているのは――。

「その程度の問題もわからないのか！」

教壇で罵声を上げるのは、かなめだった。

「校庭20周！」

「ひええええっ！」

キンコンカンコンコン

「――む？時間か？しかたない。貴様、次の時間までに21章、丸暗記してこい！次の時間にテストをする。さぼったり欠席したら連帯責任で貴様ら全員、校庭20周だからな！」

「はっ、はいいいっ！」

「よし。今日の所はこれまでだ。用のない者は、はやく帰れ」
そういうかなめは、ジロリと一人の生徒をにらみつけた。

「秋篠」

「は、はい！」

ガタッ

席を立て直立不動の姿勢をとる博雅。

「貴様、何か用事は？」

「ありません！」

「よし。一人で、まっすぐ家に帰れ。寄り道は許さん」

「は？」

「わかったか？」

「は、はいっ！」

「よし。不純異性交遊は、万死に値するからな。わかっているな
？秋篠」

「はっ、はいっ！」

「――よし」

「きりーっ。礼！」

「はあ……」

なかめが教室から出た後、生徒達は力無く椅子に崩れ落ちた。

「あーっ。緊張したあ」

「なんか、文字通りの真剣勝負だったな」

「つたく、近衛だかなんだか知らないけど、あれでも人間か？」

「苦痛がいずれ快楽になるなんて物騒なこと平気というしな」

生徒達から口々になめに対する不満が噴出する中のことだ。

「つーか。秋篠。お前、何しでかしたんだ？」

男子生徒数名に絡まれた博雅だが、さすがに保健室での一件はいえなかった。

「い、いや別に……」

「あやしい」

「や、やましいことなんてしてない！」

「なんだあ？ ムキになるところが余計あやしい」

「うゝっ……」

「たとえば、保健室で女の子とエッチしてたのが福井教官にバレたとか」

「なんで知ってんだ!？」

「……」

「……」

冷やかし半分だった男子生徒の目が陰しくなる。

「おい、秋篠」

「な、なんだ？」

「相手、誰だ？」

「へ？」

「こっちはカマかけたただぞ？ その反応ってことは、だ」
生徒の手が博雅の両肩をがっちり掴み……。

博雅が男子生徒からつるし上げられている丁度その頃、

校門をすさまじいスピードで飛び出していった影が二つ。

ひとつはかなめだった。

騎士の猛スピードで飛び出していったかなめの手には、大きなバツクがあった。

同じ頃――

「お疲れさまでした」

「本当に綾乃ちゃん。一人で大丈夫？」

「平気です。私も一人になりたいですし」

「そう？」

「じゃ、失礼します」

そういつてマネージャーの前から姿を消した綾乃の手にも、大きなバツクがあった。

ガチャ。

某デパートの女子トイレの個室。

出てきたのはスーツに身を包んだサングラス姿の女。きれいだが、あまりに怪しすぎるその女性は、トイレ横のコインロッカーにバツクを放り込むと、そのまま歩き出した。

30分後

「ま、間に合った」

かなめは電車の中でドアに身をゆだねながら息を整えていた。

「――全く、なんでこんな大切な日に午前だけとはいえ、授業があるんだ？こんなこと、聞いていなかったぞ」

いいつつ、髪を束ねていたりボンを解く。

絹のような美しい髪がはらりと落ちるだけで、かなめの印象はかなり違って見える。

「さて。スケブは――」

同じ電車。

ポニーテールの女性の真横の席に座っているのは、結い上げた髪にキヤスケット帽にセルロイドのメガネの女の子が、分厚いマンガ雑誌のような本をバックから取りだし、熱心に見入っていた。

「えっと、”CRN”のブースはここですから、”クリムゾン”の次に回って……」

さらに同じ電車の別の車両。

スーツ姿にサングラスの例の女性が、なぜか職務質問もされずに、女の子と同じように分厚い雑誌に見入っていた。

「ここは最後でいいわ。”クレサージュ”はその前に回れば……そうね。そうするのが」

三人が降りた先、そこは晴海だった。

さすがにかなめは騎士だけに駅からも速い。

といたいだが、駅から”そこ”を目指す者の波に押され、かなめも騎士の力を発揮することは出来なかった。

というか、ここで目立つことは絶対に阻止しなければならない。

そのためにここは一般人と同じでなければならない。

それが、三人の共通した姿勢だった。

目指した先

そこにはやたらと「BL」という言葉が連発して書かれていた。

「第5回BL同人誌即売会 in 晴海」

というのが正式名称だ。

つまり、BL小説の即売会。

このイベントの最もすさまじい所は、

「一切のオトコ立ち入り禁止」

の姿勢を堅持していること。

警備員すら女で固めているというからすさまじい。

「……や、やっとなつた」

その三人から遅れること30分。

入り口の行列に並んだのは、何と美奈子だった。

そう。校門から飛び出したもう一つの影は、美奈子のそれだったのだ。

会場内部は、それはすさまじいことになっていた。

会場が男子厳禁なのは、イベントの内容というよりむしろ、そこに参加者のすさまじさに起因すると思えない。

「きゃーっ！！ ●様あ！！」

「目線くださあい！！」

「お姉さまあ！」

……とまあ、そんな感じだ。

そんな中、美奈子を含めた四人は、めざすサークルを、全く無駄

のない動きと時間で移動し、お目当ての同人誌・同人ソフトをゲットし続けていた。

「はあい！ファーストベアー、今回の新刊はこちらあ！」

メガネの女の子が売り子をするブース。

「ア○ラン×キ○」とか何とか、不思議な言葉（笑）が机に書かれていた。

まず訪れたのはキャスケット帽子の女の子だった。

「これとこれ下さい」

「はい毎度！」

それを横目にスーツ姿の女は通り過ぎていく。

（残念。「キ○×アス○ン」なら買うけれど……）

女のつぶやきは、誰の耳にも届かない。

そして10分後。

「新刊売り切れました！」と書かれた紙を張り出そうとしたメガネの女の子に近づいたのは、かなめだった。

かなめは、無言で女の子の胸ぐらを掴んだ。

「ち、ちょっと、何ですか！？」

「お、お客さん？その子、騎士ですよ！？」

「そうです！その気になったらちよいちよいで——」

「知っている——四方堂。新刊が売り切れたとはどういうことだ？」

「——へ？」

「生徒会長が、学校をさぼってこんなところへ来ている？ほう？停学がお望みか？」

「あ、あなた——まさか！？」

「あーあ。結局、収穫少なかったなあ」

美奈子は、そうぼやきながら、帰路につこうとしていた。望んでいた本はほとんど売り切れ。

こんなんだったら、ア○バにでも行けばよかった。

美奈子が重い足を引きずるようにして通り過ぎたのは、宅配受付のコーナー。

「――あれ？」

美奈子はそこで見慣れた人物を二人もみつけてしまった。

「はい。確かに受け付けました」

「うむ。よろしく頼む」

「郵便局止めですね？」

「はい。あの、父の代わりに、私がとりに行ってもいいですよね？」

「えっと、郵便局留め」

「はい。主人名義ですけど、私がとりにうかがいます」

三人が別々の受付口からほぼ同時に離れた。

足早にその場を離れる三人。

窓口から声があがった。

「あっ。いけね。お客さん、福井さん？福井かなめさん！？お釣りお釣り！」

「瀬戸さん！？電話番号！」

ぴたり。

三人が動きを止め、それぞれをものすごく気まずい気分で見つめた後、黙って窓口へと戻っていった。

翌日 瀬戸邸

「瀬戸さん、ごめんね?」

美奈子の手には、同人誌がぎっちり入ったバックがあった。

「い、いえ。いいです」

「まさか四方堂先輩がとっておいてくれた分が、誰かに奪われるなんて思いもしなくて――」

「四方堂先輩も、災難ですよね」

「本当。マナー悪くて困るよね。――あつ、これ、コピーしたらすぐ返すから」

「……内証ですよ?」

「っていうか、私も同罪じゃない。それ言ったら」

「ふふっ。そういえばそうですね?」

コンコン

笑い会う二人の間に入ってきたのは、由里香だった。

「入りますよ?」

ものすごく気まずいという顔で、由里香は言った。

「綾乃、桜井さん? お茶をお持ちしました」

「あ、すみません」

「お母さん。ありがとう」

「――いえ」

「それにしても、オバさんまでこういうの、趣味だったなんて知らなかった」

「私もです」

お茶をテーブルに置く由里香の手が止まった。

「——いい、いいじゃないですか。好きなモノは好きなんです」

「で、オバさんは受け攻めどうなんです？」

「やっぱり、ア○ラン×○ラですよ？」

「何を言っているんです？ そんなのは邪道です。キ○×アス○ンに決まっているでしょう？」

「ええっ！？ それはヘン！」

「何がヘンですか？ これは正道というもので——」

「違います！ それはむしろ邪道というもので！」

「この道20年の私の嗜好に問題があると！？」

母子でギャアギャア言い出した二人を後目に、美奈子は思った。

（私、イ○ーク×ア○ランがいいんだけど——）

数日後のことだ。

「——な、なんだこれは」

学園新聞を見たかなめが凍り付いていた。

そこには一枚の写真を巡る記事があった。

目を血走らせながら本を吟味する女性の姿——

それは、あのイベント会場で本を買いあさるかなめの姿そのもの。しかも、その姿がアップで載せられていたのだから、かなめが驚くのも無理はない。

キャプションには

『同人誌を買いあさる女性 門川書店『ボーイズタイプ〇月号』

からの転載』

と書かれていた。

つまり――

「福井少佐。個人の趣味についてとやかくいいませんけど――」
職員室でとなりの席に座った南雲が呆れたように言った。

「これはまずいでしょう？ 生徒に示しが」

「何をいう！ 南雲大尉！ 貴官はこのイベントの重要性がかっていないのか！？」

「えっ？」

「参加者の約三割は近衛の女性隊士で構成され、買い手も2割近くは近衛、もしくは近衛関係者で占められると言われる大切なイベントですぞ！？ それを――土道不覚悟もいなはだしい！！」

「いや土道は関係ないと思いますけど……そうなんですか？」

「開発2課をはじめ、部課単位での参加は当然！ この学園においても、桜井先生主催のサークルは大手として勇名を馳せ――」

「いい、趣味ですね。うん。枯山水に近い」

この事件の後――

「かなめちゃん」

かなめが生徒達からそう呼ばれるようになったことや、

「教官。漫研の顧問になってください！」

かなめは確実に生徒達との距離が縮まった。

それは、かなめがただの堅物ではなく、恥ずべき秘密を持つ、一人の人間だと生徒達から認められたということでもあった。

無論――

「校庭10周だ！」

そのスパルタぶりは相変わらずだったというが……。

未亜ちゃんの日記 水瀬1年次10月頃（前書き）

別タイトル…南雲の人生転落日記（笑）

未亜ちゃんの日記 水瀬1年次10月頃

信楽未亜の日記より

○月○日晴れ

朝

目覚ましがりやにしているテレビから「目覚ま○テレビ」が聞こえ出す。

うーっ。眠い。

ご飯、面倒くさいからケログと牛乳だけですませる。

水瀬君か南雲先生がいてくれれば、すごい朝食なんだろうけどなあ。

身支度を整えてから、美奈子ちゃんの家へ。

ちよつと早かったかな？

ま、いいや。

軒下に隠してある盗聴器のテープを変えてつと。

「今、来ました」みたな顔でチャイムを鳴らしたら、おばさんじやなくて葉子ちゃんが出てきた。

幼稚園のスモック姿がとってもかわいいから思わず抱きしめてほおずり。

おばさんもすぐ出てきて、美奈子ちゃんが寝坊したから台所で待っていてくれという。

「まったくもう！いつもいつも、未亜ちゃんを見習えっていつてるのに！」

おばさんは怒りながらテーブルの上にご飯を並べていく。

焼きたてのトーストに紅茶、サラダに卵焼き。

——いいなあ。お母さんの手料理なんて、私、何年食べていないだろう。

「はい。時間無いけど、ちゃんと食べるのよ？」

え？美奈子ちゃんのじゃないの？

「寝坊した罰！あの子は今日は朝ご飯抜き！」

いいのかなあ。と思いつつ、有難く食べる。
やっぱり、手作りのご飯っておいしい。

紅茶を飲んでいるところで、階段を降りてくる音が

ドタバタ

「きゃーっ！」

ドッシーンッ

？

「痛ったあーいっ！！」

にゃ……美奈子ちゃん、やったな。

通学路

「痛たたたっ……」

大丈夫？

「もう最悪……寝坊するわ、階段から落ちるわ、朝ご飯もらえないわ」

代わりに私が食べてあげたからね。

美奈子ちゃんの恨めしそうな顔を見ながら、私はバックからカリ○メイトモドキを取り出した。

一個、200円でどう？

「……いい商売、してるじゃない」

特売で98円で買ったカリ○メイトモドキをかじる美奈子ちゃん。

まいど。

教室には、一週間ぶりに綾乃ちゃんの姿があった。

秋のドラマ撮影で北海道ロケだっけ？

「おみやげ買ってきました。後で食べませんか？」

だって。

やった！

午前中の授業は、南雲先生の英語から。

わかりやすいけど、普通に英会話出来る私にとっては退屈。

あーっ眠い。

気がつくとお昼。

あれ？私、何時間寝ていたんだろう。

ま、いいや。

学食でパンと牛乳を買ってきてみんなと食べる。

スペシャル焼きそばパンはやっぱりおいしい。

ご飯のあと、おまちなかの綾乃ちゃんのおみやげ。

クッキーの詰め合わせ。

やっぱり、北海道は食べ物おいしい。

さて。クッキーももらったことだし。

私はそっと、綾乃ちゃんの机の中へ、例のブツを入れた。

綾乃ちゃん、そしらぬ顔でそれを鞆へ入れたのは確認。
まいど。

放課後

部室に行く前に、あちこちに仕掛けてある盗聴器のテープ交換作業をする。

昨日は、体育用具質で三年の○○君と××さんのナニしていたのを、一部始終記録させてもらった。

こういうのはさすがに売り物にはならないけど、何かあった時の大切なカードになる。

最も売れるのは職員室のネタ。

この前、○○先生が浮気したネタは、早速校内新聞に掲載させてもらった。

嫌われていた先生だから、一面扱い。

……あ、これが元で、あの先生、近くのビルから飛び降りたつけ。

昨日の録音記録もそこそのネタになるはずだ。

部室の一番奥のデスクに座る、校内新聞編集長を兼ねる部長にネタのタイトルだけ書いたメモ用紙を手渡す。

「……よし。これとこれはネタにつかえるな
これは？」

「これ以上の教員の自殺は困るよ」

部長、穏和な顔してなかなかのタヌキだからな。

『教員、ソ○ブランドをハシゴ!?!』

これだけで、誰のことはわかっているはず。

「それは個人的に買い上げよう。よくやってくれた信楽君。報酬

だ」

部長は引き出しから封筒を取り出してくれる。
まいど！

その後、部室にいたら、救急車が学校へ来た。
なんだろう？

誰か、ケガしたのかな？
ま、いいか。

今日はアナウンサーにとって大切な発声練習の日。
美奈子ちゃんは真剣そのもの。

対して私はレポーターとして必要な現場認識能力の訓練。
私にとって得意技だ。

現場の状況を、いかに正しく把握して、表現するか。
聞き手が、耳から入る情報だけで現場を正しく想像できなければ、
レポーターは存在価値がない。

一瞬で現場を頭に焼き付け、カメラめがけてその映像を表現する。
それは、記憶力と集中力、そして表現力の勝負。
日頃、鍛えている私にとって、何でもないことだ。

部活が終わって、

「あーあ、最悪」

凹む美奈子ちゃんを慰めつつ、家路につく私。

美奈子ちゃん、セリフとちった挙げ句、原稿を一枚とばし読みし
たから指導役の先輩から大目玉。

実際やったら一発クビだ！！って、すごかったもんねえ。先輩。

「さすがに返す言葉無かったわよ……」

気分転換に、マックでもどう？

「うん」

私は期間限定のエビゴマにフィレオ。

夕ご飯代わりだ。

美奈子ちゃんはマツクのハッピーセット。

ポテトもらった。

で、セットの景品は、葉子ちゃんのおみやげにするんだって。

美奈子ちゃん、お姉さんになったね。

「相手が誰だか知ってるけど、やっぱりねえ……」
へ？

「う、ううん！こっちの話！」

……美奈子ちゃん、ナニか隠してる？

「か、かくしてないわよお！いい、イヤねえ」
？

夜、シャワーを浴びた後、パソコンへ。

綾乃ちゃんからの入金を確認後、盗聴器のテープを再生。

美奈子ちゃんの着替えシーンゲットしたけど、全体的には不作為。

南雲先生がアパートから追い出されて、公園で寝泊まりしている
って位かな？

こういう日もあるよね。

美奈子ちゃんの着替えはデータとして美奈子ちゃんコレクション
のフォルダへコピー。

その後、私はコンビニへ明日のご飯を買いに出た。

……あれ？

公園の水飲み場にいるのは――

――先生？

ギクッ！

飛び上がった大きな体は、間違いなく南雲先生だ。

「お、おう！し、信楽じゃないか」

セリフが棒読みだよ？

どうしたの？

「い、いや、ちょっと喉が渴いてな」
あつ。そうか。

先生、アパート追い出されたんだよね？

「な、何故知っている！？」
いろいろ。

「じ、実はな？ちょっとワケありで」

えっと、詩乃ちゃんをアパートに連れ込もうとしたけど、酔っぱらった詩乃ちゃんがアパートの入り口で暴れ出して、止めに入った大家さんのヅラひんむいちゃった。で、怒った大家さんに、南雲先生が追い出されたってことだよね？

「お、お前、どうしてそこまで……」

内緒。

——ホントは、南雲先生がかなめちゃんに話していたのを盗聴したから。

いわないけど。

「は、はははっ……」

力無く笑う先生。

「どうせ、学校新聞のネタにするんだろ？」

安心して？返答次第では学校新聞に載せないから。

「ほ、本当か！？」

うん。条件さえ飲んでくれれば。

「条件？」

あのね？

翌日の朝

「ほら信楽！起きろ！」

うーっ。まだ6時だよお？

「6時に起こせていったのはお前だろうか？」
そうだった。

眠い眼をこすりこすり台所へ来た私の目の前には、2メートルの巨体にエプロンをつけた南雲先生がいた。

「注文通り、朝飯はつくっておいたぞ？」

ありがと。

先生も寝るところが見つかってよかったね。

「……次をすぐ見つける。そうしたら、すぐに出ていく」
えーっ！？ここにいなよ。家賃とらないから！

「ほ、本当か！？」

うん。先生がいれば、泥棒も押し売りも来ないし。

何より、ご飯が食べられるから

「……ったく」

とにかく、いただきます！！

うん。

やっぱり朝は和食だね。

さて、学校行く準備しなくちゃ。

あ、今日は歴史があるから――あれ？
なんで、このファイルがここにあるの？

これ、昨日、綾乃ちゃんに渡したファイル。

私は綾乃ちゃんから水瀬君の校内での監視を頼まれている。
もちろん、ご注進一回で数千円のお小遣いがもらえる。

で、水瀬君からは、その注進をほのめかすだけで、最低でも綾乃ちゃんからもらえる見込み額の倍の口止め料がもらえる仕組み。

今回、3年の矢部先輩に告られた挙げ句、断り切れずに一回だけ

の約束でデートした件、調査報告にいろいろ脚色（?）をつけたり、想像とことわればそれで済む）をつけた私は、水瀬君に報告を見せ、結果数万円の口止め料を手に行っている。

……まずい。

処分したつもりオリジナルが綾乃ちゃんの手に渡ったら――

「おい信楽」

ドアの向こうから南雲先生の声がする。

「先に行ってるぞ。途中、病院へ見舞いに行く」
病院？

「ああ。昨日、また瀬戸が水瀬を殺しかけたんでな」

本当に生きた心地がなかった。

クライアントとの契約違反どころじゃない。

水瀬君、怒っているだろうなあ。

びくびくしながら教室へ。

「おはようございます」

にこやかな顔で声をかけてくれたのは綾乃ちゃんだった。

お、おはよ。

「昨日はありがとうございました」

い、いえ……それで、水瀬君は？

「はい。病院の集中治療室で反省してもらっています」

……うわ。

「本当に残念です。もう少しで地獄に堕ちてもらう所でしたのに」

そ、それでいいんだよ。

「そうですか？」

……はあ。

水瀬君のお見舞いに行って、素直に謝ろう。

教訓 情報の管理は正しく行おう！！

南雲教諭のありがち(?)な災難について 水瀬1年次10月頃

●南雲の日記より

俺は南雲敬一郎。

一応、近衛騎士だ。

今、わけあって高校教師をしている。

高校教師としての仕事がメインになりつつある今、本当に近衛騎士だったかどうか、俺自身、とても自信がない。

だが、これは大切な任務だ。

別に、教員免許を持っていたのが、近衛騎士団でおれと福井少佐だけだとか、そんなことは関係ないはずだ。

でなければやってられない。

さらに俺は、わけありで金がない。

身分を隠すため、近衛関連施設からの出勤は出来たモノではない。だから、学校の近くの格安アパートに住んでいたのだが――

追い出された。

で、公園で野宿を始めたところで、俺は教え子の信楽未亜の紹介で、信楽のマンションに世話になることになった。

信楽未亜

明光学園高等部1年生徒
身長155センチ

体重、スリーサイズは気の毒だから言わない。

本当の父はすでに他界。継父2名は共に離婚、母は世界中をまたにかける宝石のバイヤー。

こっちでの身元保証人は祖母の信楽房江。

芸能プロダクションのオーナーで、その世界では圧倒的発言力を有する大御所と聞く。

本人もレポーターを目指しているが、いずれは祖母、または母の跡をとるだろう。

その子は葉月で一番高級なマンションの最上階の1フロアを丸ごと使った部屋に一人暮らし。

考えてみれば、恐ろしく恵まれた子だ。

だが――

俺はその台所に立って、それを否定する。

食器棚は一人分の食器しかなく、冷蔵庫も、俺が来るまで空に近い状態。

この子は孤独だ。

同級生の桜井美奈子に絡むのは、彼女自身の生来の性癖だけではない。

人とのふれあいを求めていることの裏返しだということは、見ていればわかる。

さて――

食材を冷蔵庫から取り出した俺は、ここに住む条件―信楽の身の回りの世話―を満たすため、包丁を握った。

●明光学園 午前9時

「ねえ未亜」

美奈子が心配そうな顔で未亜に声をかける。

「ナニ？」

「あんた、南雲先生と一緒に暮らしてるって、本当？」

「うん」

「だっ、大丈夫？」

「何が？」

「だ、だから――その」

「にゃあ？何を想像したのかなあ？」

「だ、だからね？あ、あなたも年頃なんだし、その、もし、何か間違いがあったら」

「だあいじょうぶだよお」

未亜は笑って桜井の心配を否定した。

「南雲先生は、そんな事する人じゃないし、部屋だって別々。なにより、あんな優秀なおさんどさん、そうは手放せるわけないじゃん」

「お、おさんどさん？」

「そ。料理、すごく上手なんだよ？あ、でも、お洗濯は私の役目。掃除は当番制だけどね」

●明光学園 校長室前廊下

「失礼します」

出てきたのは南雲だった。

「災難だな。大尉」

廊下の壁によりかかるようにして南雲を待っていたかなめが声を

かける。

「校長に随分疑われているようだな。生徒の家に厄介になるというのは、そう簡単な事じゃないことがわかったろう？」

「そうはいいますけどね？少佐」

「――貴官の事情は承知している」

かなめはそういうと、廊下を歩きだした。

「同じ近衛同士、金策はお断りなんだろう？ま、なにかあったら、言え。出来る限りのことはする」

「――はあ」

未亜の家に南雲がいることが知られたのは、校内放送がきつかけだった。

単なる事故。ともいう。

ある日、未亜は職員室である先生にインタビューの仕事を終えた。未亜の仕事は完璧だった。

実際、未亜のアドリブとトークの技術は、すでにマスコミからオファーがかかっている程だ。

校内インタビューのあと、マイク係がマイクの電源を切り忘れていたのに気づかなかったのは、決して未亜のミスではない。

「おい信楽」

仕事が終わったと判断した未亜に、南雲が声をかける。マイクにはその声が完全に入っていた。

「あ、南雲先生」

「今日、どうする？」

「うーんと――部活はすぐ終わるからね。ね？今日はどうするの？」

「帰ってからの楽しみだ。帰ったら楽しみにしている」

別に、未亜の日頃の行いが悪いせいじゃない。はずだ。マイクにノイズが入って、校内に流れたのが、

『今日は？』

『帰ったら楽しみにしている』

だけが流れたのは、事故だ。

だが、噂は噂を呼び、南雲がどんなに否定しても、「南雲が教
子に手を出した」という噂は、懸命に否定する南雲の様子のおもし
ろさから、生徒達がことあるごとに蒸し返したため、簡単には消え
なかった。

噂が疑惑を呼ぶ中、それでも未亜が南雲を引き留めていた理由は、
南雲にはわかっていた。

未亜は、ひとりぼっちが嫌だったのだ。

帰れば家に誰かがいてくれる。

暖かい手作りのご飯が待っていてくれる。

それが、未亜にとっての幸せだった。

せっかく手に入れた幸せを、未亜は離したくなかった。

そういう、ことだ。

それからしばらくした後の日曜のことだ。

台所の掃除が終わった南雲は、ベランダでぼんやりしていた。

晴れ上がった空は、高い。

「先生、じゃま！」

「ん？」

振り向くと、そこには未亜がいた。

手にはバスケットに入った洗濯物。

「洗濯物、干すからどいてて」

「あ、ああ——手伝うぞ？」

南雲が無造作にバスケットの中からとりだしたのは、ピンク色の
ヒモ

「にゃああああっ！！先生のエッチ！！」

「な、何がエッチだ？」

未亜が血相を変えて南雲の手から洗濯物を奪い取ろうとした瞬間、
それが何か理解した南雲は、慌てて手を離れた。

「す、すまん信楽！」

それは、未亜のブラジャーだった。

洗濯物が出ている間はベランダ立ち入り禁止！

という新しいルールができあがった瞬間だった。

お昼過ぎ

しかし——

買い出しから戻った南雲は、マンションを眺めながらため息をつ
いた。

ベランダに干された男女の服。

人が見たらどう思うだろうか。

「ん？」

屋上から出た黒いポールの上に、何か白い物が動いた気がした。

「あっ！先生！」

玄関前で慌てた様子の未亜が飛びついてきた。

どこかに行っていたらしい。

「ど、どうした！？」

「た、助けて！」

「何！？どうした！」

「ね、猫！」

「猫？」

未亜の話だと、屋上から出ている飾りのポール（正しくはマンション全室向けサービスの一環として音楽配信会社が設置したアンテナ）で猫が動けなくなっているという。

「よく気づいたな」

「ベランダにいたら、ニャーニャー声がするからね？屋上に行ってみたんだよ！」

屋上に設置されたポールの高さは約3メートル。

電柱並みの太さだ。

その上で、猫が一匹、丸くなっていた。

「どうやって登ったんだ？」

「そんなことより！先生！助けようよ！」

「よ、よし」

結局、南雲が未亜を肩車すると、丁度手が届くことがわかったので、そうすることにした。

「よし。猫ちゃん。いい子だからおいで」

未亜が懸命に手を伸ばすが、猫は警戒を解こうとはしない。未亜は焦っていた。

ポールは約3メートル。だが、ここは地上12階だ。

しかも、ポールは端から約1メートルの位置。

猫が端へ向けて飛び降りたら、着地位置によってはそのまま――

「よしよし。いい子だね？おいで」

猫は、未亜の手をじっと見つめていたが――

「あっ！」

突然、未亜にしがみつく形で飛びついてきた。

「こ、こらっ！痛っいたたたっ！」

薄いシャツに爪を立てられたからたまったものではない。

「し、信楽！暴れるな！」

南雲はバランスを失い、大きく後ろへ転んでしまう。

「い、痛ったーっ！」

南雲がクッションになることで、なんとか信楽を床にたたきつけることだけは避けたものの、2メートルの急激な高さの移動は、それでも未亜にそれなりのダメージを与えていた。

猫は無事。

よかったと安堵する間もなく、未亜は自分と南雲のおかれた状況を呆然としてながめることになる。

未亜は、確かに南雲の上に乗っかる形になっている。

だが、それは、南雲に肩車してもらっている体制のはず。

それなのに、

なんで、私――

私、南雲先生の顔にまたがっているの？

とにかく、

「にゃあああああつ！！！」

近所中に響き渡るような悲鳴をあげた未亜の往復びんたが南雲の顔に炸裂したのは、確かなことだ。

「先生のスケベ！」

目にうつすら涙を浮かべた未亜が、猫を抱きしめながら南雲を非難する。

「私は美奈子ちゃんのものなんだからね！？」

「だ、だから、これは事故だろうが？」

顔に見事な手形を二つもつけた南雲は、それでも教師としての威厳をみせようと、虚しい抗議をするが、未亜の耳には届いているか、正直、自信がない。

「全く、お前のせいだぞ？」

南雲はそうばやいて猫をつまみ上げたが――

ニ、ヤアアアアッ!!

バリバリバリバリ

南雲の悲鳴がここに続いたという。

すべては、よく晴れ渡った日曜の出来事だった。

●翌日 明光学園

「み、未亜？あのね？」

未亜の両肩を、しっかりと掴んだ美奈子が、真剣な眼差しで未亜に言った。

「辛かったと思う」

「にゃ？」

「でもね？私たち、友達でしょう？」

「美奈子ちゃん？」

気がつくと、周囲には美奈子の他にも綾乃をはじめ、クラスの女子を取り巻いていた。

「心配しないで。今、南雲先生は校長室に呼び出されているし」

「——お話が見えないんだけどなあ」

「福井先生とルシフェルさんが、“南雲先生を斬る”って向かってきている。だから」

「え、!？」

「言える限りでいいですよ？」

綾乃も青くなりながら言った。

「辛いことは、誰かに聞いてもらうだけで違います」

「あの、何の話？」

「あの南雲先生のひっかき傷と手形、未亜が抵抗した跡ね？」

「あ、あはははっ……あれはその」

「でも、南雲先生の力なら、そんなものは——グスツ」

美奈子をはじめ、女子生徒はそろってそこですすり泣きを上げ始めた。

「未亜、私たち、どんなことがあっても友達よ？ 言いなさい。昨日、何があったのか」

「……」

『南雲先生が教え子に手を出した』という噂は、未亜の必死の抗議で、何とか否定出来た。

それを南雲が知ったのは、「公開の場で斬首。それまで死んでもらっては困る」と主張する、霊刃片手のかなめとルシフェルの監視下、水瀬から治癒魔法を受けている中だった。

無論、校長室に呼び出され、学校経由で近衛の査問委員会に呼び出され——

南雲は、生活費まで教え子に頼ることになったという。

しばらくしてからのこと。

「あ、ほら。先生、あの猫！」

食材の買い出しの帰り、未亜が指さした先には、あのポールに登った猫がいた。

「元気そうだね」

「ああ。憎ったらしいほどな」

「先生？」

未亜がいたずらっぽい声で南雲に言った。

「何だ？」

「あの時、本当は、私に手を出したっていったら、どうなったか

なあ」

「ば、バカ！教師をからかうな！」

「あははっ。でもねわかんないよね？同じ屋根の下だし」

「こらっ！相手は選べ！」

「えーっ？私、南雲先生ならいいのになあ」

「あのな！」

「お料理上手だし——あ、でも、世渡り下手だから出世はないか」

「わ、わるかったな……」

「でもいいや！」

未亜は笑顔で言った。

「私が面倒見てあげるから！」

「はあ？」

「先生、これからも私のおさんどさん決定！」

南雲は、人生の先に、なにやら暗い影を見た気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204d/>

ぱらのいあな日記（美奈子ちゃんの憂鬱短編集）

2010年10月10日20時20分発行